

なるを期しながら、強ひて當時の梨園に媚びて團菊輩の藝風に迎合せんことを勉めず。而して其の文章に於ては、從來戯曲の修辭たる七五調、掛詞、縁語等を用ひたる叙事詩的分子尙少からずと雖、概して精練暢達、一代の才筆没すべからざる者あり。

曙光は暗黒を破れり。曉鐘は寂寥を破りぬ。默阿彌以下過渡時代の史劇を超出して近代思想に成りたる新戯曲は、其の頭角を露はしぬ。百千の群議は一人の實行に若かず。脚本改良の聲起りて、所謂評論家の囂々は其の聲徒に大にして、功果一物をも残さざること數年、茲に至りて、漸く劇壇渴望の一端を充たしぬ。

然れども、此の劇を読む者、主人公の苦忠に同情を表すると共に、其の性格の明確を缺けるを覺ゆ。思ふに且元は主君の面前に奸臣と激争し、乾坤一擲悲壯の最期を遂ぐるが如き快男子に非ず。遠謀深慮、内忠奸を操縦し、外老獪を控制し、以て主家百年の安寧を致すが如き智者に非ず。壯烈の意氣は重成に及ばず、老熟の智略は家康に若かず。謀りて誤り、誤りて

斷せず。因循姑息、一日を緩うせる者。斯かる概括的性格は稍明かなりと雖、其の云爲常に含糊にして直截ならず。或は故主の恩に感じて孤忠盡瘁するが如く、或は首鼠兩端、自家の安きを計るが如く、悲劇的境遇に處して煩悶の痛烈なる者表はれず。壯烈なる大破綻なくして、早く身を退くなど、往々吾人の同情を冷却せしむるものあり。要するに性格悲劇に非ずして境遇悲劇なるべし。蓋し「桐一葉」は、完結せる戯曲に非ず。且元の悲劇的最期は、別に續篇ありて之を詳悉すべかりしなり。作者は三十年「沓手鳥孤城落月」を『新小説』に掲げ、以て此の脚本の局を結べり。

「沓手鳥孤城落月」は大阪落城の一刹那を舞臺として、且元の最期を描ける悲曲にして、落城の早朝、生命且夕に逼れる重病を推して家康の陣營に赴き、秀頼母子助命と共に、禮を以て出城を迎へんことを請ひ、且自ら其の使節たらんことを求め、十年の苦心、鬢髮霜の如き老武士、籠を急がせて城に向ふに始まり、本多正信の計略に阻まれ、自己の重病に時機を失ひ、遺恨千秋、本丸炎上して母子生害となり、乃ち悲憤の涙を揮つて城門の前

に瞑目するに終る。總べて三幕七場を以て成る。通篇悲愴の調を以て被はれ、備庫階上淀君の狂亂秀頼の愁歎人の腸を斷たしむるは勿論、末段且元落命の一場、卷を掩うて痛憤せしむ。而して曩に模稜含糊の趣ありし且元の面目此の一場に至りて漸く明かにせられぬ。彼は素と、石田三成の所業を以て猿才覺となし、機の熟するに時方ありと、中心竊に戦を期しながら、大御所存命の中は平和を陽に一時を欺き、徐に計を運らすを以て唯一の希望、畢生の事業となせる者。彼の苦心經營せるも、卑怯と罵られ不忠と認められしも、總べて此に出づ。彼をして悲劇的最期を遂げしめしものは、主として、大勢を達観すべき神智なく、因循姑息一時の小策を弄して機微の動くを悟らざる彼自身の性格なりといふべし。「孤城落月」を「桐一葉」と共に二部曲と見るを得ば、始めて新悲劇の面影を彷彿すべきなり。

此の曲は幾多の瑕瑾ありと雖、とにかく明治文學の一記念にして、戯曲史上期を劃すべき著作なり。小説史上空前の事業を成し、春の屋主人は、茲に再び戯曲史上の大業を成せるなりき。而も其の活動は之に止まらず、

更に『牧の方』を創作せり。『牧の方』は、鎌倉執權北條時政の後妻牧の方を主人公とする悲劇にして、牧の方が所出政範の愛に溺れ、之を將軍職に就かして尼御臺の榮華を學ばんとし、乃ち千幡將軍尼御臺及び義時を除かん大陰謀を企て、事現はれて義時の前に自盡するに至る筋、總べて六段十七節、北條時代初頭の罪惡史中、特に著しき一女丈夫の末路を描けり。然れども、此の曲は之を以て完結せるに非ず。續きて出づべき『源實朝』及び『右京兆』と共に三部曲の形式をなし、以て義時を主人公とする一大史劇を爲すべかりしなり。故に此の曲は牧の方を主人公とする獨立の曲に非ず。陰謀家牧の方を中心として、更に大なる陰謀家義時の前半生を描けるなり。されば單獨に之を評論せんは、頗る當を失すと雖、試みに其の脚色を窺ふに、政範を擁して籬中の權を振はんとする牧の方、牧の方を擁して全權を握らんとする稻毛父子、稻毛父子を使喚して政範に代らんと巧らむ平賀朝雅、是等總べてを自滅せしめ、將軍を擁して執權の天下を謳はんとする義時、巴の如く相追うて、一起一伏、野心は野心と戦ひ、陰謀は陰

謀と相衝き、所有罪惡を盡す。故に場面變化に富み、事件參差として常に讀者の注意力を緊張せしむ。然れども、一部の主動たるべき牧の方の陰謀が、常に黒幕に潜める義時の爲に操縦せらるゝ傀儡に過ぎざる趣あるが故に、時々之に對する感興を破らる。且此の曲には、幾多の豫想せられたる事實を含み、讀者の歴史上の知識に委ねて其の叙述を省略せる者多きを以て、讀者をして、此の曲は甚だ大なる史劇の中間に位する一小部に過ぎざる感を起さしむ。牧の方の性格の如きも、直截明晰なるに係はらず、悲劇の勇者として讀者の注意を一身に集むべき偉大の資質を缺く。其の陰謀もおのづから所動的にして、所有外敵と戦ひて壯烈なる没落を遂ぐるが如き大觀は遂に見ること能はず。

之を『桐一葉』に比するに、其の目的が、史上の事件の隱微なる消息を描破するに在ること兩者相同じ。『桐一葉』は豊臣家滅亡史の裏面に潜める隱微を描くを主とせし如く、『牧の方』は鎌倉三代將軍時代の罪惡史の隱微を寫すを主とせるに似たり。唯取材の時代及び史料の選擇に於ては、『牧の

方』の取りし所は、古今罪惡史の頂點にして、史的研究の鋤未だ入らざる荒野なれば、作劇家が想像を逞うして一大悲劇を編み出すべき餘地を存する點に於て、大に『桐一葉』に優れたり。蓋し作者は先づこの神祕なる罪惡史に著眼し、其の黒幕の陰に立てる義時を認め、之を中心として此の時代の史實を網羅せる三部曲を作らんと企てしなるべし。然れども、局面宏濶、事端繁瑣に過ぎて、劇の進行に餘裕なく、且事件の全部が陰謀の連続なれば、總べて秋霜逼促の趣ありて、詩興おのづから乏しきを免れず。此の點に於ては『桐一葉』に一籌を輸せざるを得ざるなり。

逍遙は上掲三曲の外、尙「二葉楠」の一篇を『新著月刊』に掲げたり。小楠公を主人公とせる抒情詩的小戯曲なり。三十一年「孤城落月」と共に『菊と桐』と題して出版せり。

逍遙が作は何れも場に上らざりき。然れども評壇の大部分は噴々之を稱揚し、新作劇家の之に倣ふ者漸く現はれぬ。高安月郊は、二十九年『重盛』をものし、翌年「眞田幸村」を『早稻田文學』に掲げ、其の他譽田綠堂、

土居春曙、松居松葉、及び水蔭漣山人柳浪等、各戯曲の才を一二の創作に試みたりき。

三十年夏、櫻痴居士、俳優團十郎、芝居師森田勘彌の應援を得、從來の立作者たる舊劇の作家に代りて、自ら歌舞伎座の立作者となりぬ。是より先き櫻痴の新作の實演せられし者少からざりしも、舊慣の關門固うして未だ立作者たるを得ざりしなり。されば此の事あるや、江湖の囑望一方ならず、往々斯界の形勢一變して新作大に行はるゝに至らんと夢想する者さへありき。然れども、彼が入座以來の作は、『俠客春雨傘』を始め、舞臺面の變化面白く、役々善く俳優に適ふのみにて、材料着想に、些の新彩なく、脚色主旨に何等の統一なくして、全然舊劇の後塵を拜するが如き者なれば、到底新時代の要求に應すべき者に非ず。要するに新舊過渡の作家たるを免れざりき。純乎たる新文士にして梨園の關門を打破せるは、蓋し松居松葉を嚆矢となす。三十二年松葉、史劇『惡源太』を草し、左團次に附して上場す。俳優を標的として人物を作りし舊式の者なるが上に、脚本としても

失敗の作なりと雖、幼稚なる梨園は、先づ此の種の新作を以て啓發せらるべきなり。

右の事件を一小波瀾として、劇壇の狀況は不活潑を極めたり。往年の脚本改良會の再興とも見るべき青葉會起りしも、何等の功なく、新演劇は一敗地に塗れてより、僅かに、知名の小説、例へば思軒譯の『警使者』紅葉作の『心の闇』『冷熱』等を脚色上場して、一時の人氣に投せんと試るのみ。元來小説の脚本化は、大阪の劇壇にては通例の事なれども、脚本化其の事既に不合理なるが上に、脚色者概ね無識の輩なれば、脚本としての價值問ふに足らず。總べて劇界の進歩は、いたく小説界に後れ、唯一の機關雜誌『歌舞伎新報』も、一たび倒れ、三十三年に至りて、漸く復興して『歌舞伎』となれるものあるに止まる。

翻つて作劇界を通觀するに、史劇の盛行に比して世話劇は甚だ貧しく、悲劇の發達に較べて喜劇（滑稽劇）は皆無に近し。前期の末、紅葉がモリエールを翻案せる『夏小袖』『戀の病』に似たる者すら、當時の喜劇界に現

はれざりき。

戯曲の翻譯は、二十九年の初『早稻田文學』に掲げし逍遙の「ハムレット」最も注目すべく、三十二年『太陽』に出でし戸澤姑射の「オセロ」、當時出色の譽あり。三十四年月郊が譯出せる『イブセン作社會劇』は、北歐近代の名家の作「社會の敵」「人形の家」二篇を收め、獨得の詩筆を以て、最新思潮に觸れたる傑作を紹介せり。其の他二三の譯述特に擧ぐべきなし。

第四節 小説 其の二

心理解剖、性格描寫、乃至情緒細叙の小説が文壇を風靡するに方り、其の傾向の極端に赴かんとするに不満を懷き、實世間と密接なる交渉を旨とする傾向の盛ならんことを望む者漸く多く、實業小説、宗教小説、諷刺小説、政治小説、家庭小説、社會小説等、種々の形式を以て其の新要求を表せり。此の風潮は、夙く二十九年に其の萌芽を發し、二三の論者が、或は活動を叙せる實業小説、或は道念高き宗教小説を求めたりしが、民友社が

社會小説の名を掲げて之を募集するに及び、此の論漸く盛なり。然れども、社會小説の意義に至りては、頗る不明にして、或は所謂社會主義の小説となし、或は戀愛を以て唯一の材料とせる從來の小説に對し、政治宗教等社會の所有部に廣く材を取る小説に附せる名稱となし、或は個人を描き心理を寫せる小説に對し、社會を描き其の實相を寫せる小説を指して言ふとなし、造語解釋區々たりき。而も實世間に觸れよ。社會に相渉る作を出せと勸むるに至りては即ち一なり。

論壇の風潮斯くの如くなるに際し、創作壇に於ても一新潮を揚げたり。社會的諷刺小説の續出即ち是なり。風葉の「失戀詩人」柳浪の「非國民」は、共に當世文壇の一部を諷刺し、思案外史の「五濁惡世」は宗教界の葛藤を諷し、漣山人の「從五位」は華族を刺り、美妙齋が飛影の名にて出し「白日鬼」は元老排斥の鋒鋷を見はし、何れも實世間の現象に向つて諷嘲の矢を放てり。斯かる一時的性質を帶べる作品は、小説の理想より見て決して推奨すべきに非ざれど、其の觀察及び諷刺の著しく實世間に密接し

來りしは、注目すべき現象ならずとせず。

抑も此の社會的ならんことを求むる主義は、藝術獨立主義と共に、文藝に於ける二大主義にして、其の消長は小説史上悠久の事實に屬す。前者は之を人生相關主義と稱すべく、教訓主義道德主義諷刺主義等を包括し、後者は文藝獨立主義と稱すべく、性格主義心理主義寫實主義等を包括す。前者は人生と密接なる交渉を有するを利となし、實用主義差別主義に流れて永遠の生命を失ふに至るを弊となし、後者は平等無私、百世に通じて誤らざるを利となし、出世間主義非國民主義に流れて人生と相關するなきに至るを弊となす。曲亭馬琴、勸懲の旗幟を翻して教訓小説を出すや、人生相關主義は一大潮流をなして明治以前の文學を貫流し、末流弊を生じて世益主義實用主義に走りぬ。此に於てか藝術獨立主義の反動は、逍遙の『小説神髓』となりて現はれ、寫實の大旆を擁して勸懲の舊主義を打破し、明治の新小説は此の間に生れて赫々たる功績を文學史に残しぬ。然れども末流遂に實世間と離れ、國民の性情に遠ざかり、偏に小主觀に出でたる情緒小

説、異邦民性に出でたる翻案小説を作るに至る。此に於てか、反動は再び人生相關主義の側より起らざるべからず。上述の新傾向は即ち是なり。

げに此の事實は、既に社會的諷刺小説に現れぬ。三十一年に入りては、更に内田魯庵の宗教小説となりて現れたり。抑も江戸時代、儒教及び武士道の、人心を支配せしより以來、宗教思想が文學の根本思想となること其の跡を絶ちぬ。明治の作家に在りて佛教思想の片影を小説に寄せしは、獨り露伴あるのみ。基督教の如きは、未だ文學の思想となるべき地位に達せざりき。魯庵は即ち此の棄てられたる基督教の思想を取り來りて之を小説に寄せしなり。魯庵は不知庵の名を以て前期の批評家たり。後専ら力を翻譯に注ぎしが、此の年轉じて筆を創作に染め、先づ「暮の二十八日」を出し、大望を抱き事業に憧る、青年が、事志と違ひ、煩悶遣る方なきに際し、宗教的光明に接して迷夢忽ち覺め、終に靜平なる家庭生活に適歸すといふ筋を描いて、一種清高の趣を帯び、從來陰慘の小説の間に一新面目を開けり。爾來、『太陽』『新小説』『文藝俱樂部』等に掲げし短篇皆宗教趣味を帯ぶると

共に、社會の諷刺を含む。就中「今様厭世男」は執拗優柔なる自稱薄命詩人を描き、「浮き枕」は上流社會が權勢と富力とを濫用して横暴を逞うする當世の社會現象を寫し、「片鶉」は失戀の令嬢が悲惨の運命を藉りて、官吏と商人との間の情弊を暗刺し、其の他の作概ね之に類す。

此の時に方りて、時代精神の論、文壇に起り、時代の精神を顧みず、之と相關ることなき文學は價值なき者なり、大文學は常に時代精神を代表し、當代國民の感情に最も明瞭なる發聲を與ふる者なりと唱へて、益々文學の社會的傾向を鼓吹する者ありき。『太陽』の高山樗牛先づ之を唱へ、此の精神を表はせる文學を稱して近代主義の文學と言ひ、近代主義の文學は藝術獨立主義の文學に非ずして、十九世紀末の日本文明社會の眞精神を描破せる文學なりと言へり。『新小説』の魯庵次いで之を説き、方今の小説、徒に戀愛に狂して社會と相關するなきは、是れ作家が明治思想の眞相を解せざるが爲ならずやと言へり。就中魯庵は、嘗に論議するのみならず、創作界に立ちて之を實現せんと勉め、三十二年「落紅」「霜くづれ」「血櫻」「電影」「青

理想」等を連出せり。不幸にして筆力其の抱負に伴はず、描寫冗漫に流れ、此の種の作物の成功の要素たるべき沈痛の風趣を缺き、其の着想に至りても、新舊思想、信仰、道德の衝突に關する觀察、必しも神に入らず。然れども、其の諷刺や批評や眞摯切實にして從來作家の如く冷嘲的ならず。勉めて時代の實相に觸れんと試みたる態度は、亦以て異彩とすべきなり。

此の氣運は延いて新進作家の間にめぐり、宙外の「腐肉團」「時事新報」風葉の「政驚」「新小説」、秋聲の「惰けもの」(同)等、社會的傾向の者少からず。三者は共に當今の政黨員を主題とせる政治小説にして、就中「政驚」に、政黨員の家庭を寫せる所最も讀むべし。然れども、是等も亦魯庵の如く、觀察の皮相にして、時代政治界の神に入らざるの弊を免れず。却つて作家従前の作なる心理小説に劣れり。其の他前田曙山は『東京朝日』に「濁り水」「千枚張」「腕くらべ」等を連載し、當世の暗黒面、社會の裏面に於ける種々の現象を暴露せしも、固より社會的小説の成功せる者に非ず。斯くして、三十二年の社會小説は、何等の著しき痕跡を残さずして止み、爾後

復發展せざりき。

さはれ、實世間に觸接せよとの要求は、磨すべからざる眞理を含み、理想派の泰斗として知られたる露伴すら尙之を唱ふるに至り、心理小説の作家も、人を精寫するを主眼とする從來の着想以外、社會を寫さんと試みる者漸く多く、個人の研究以外社會に近接せんとする傾向漸次現はれたり。所謂新寫實的傾向是なり。

小説の新寫實的傾向とは、從來の寫實よりは一層廣濶なる意義を有し、個人より進んで、個人對社會の實相に入らんとする者なり。即ち從來の心理的傾向が新に興れる社會的傾向の影響を受けて成立せる一變形に外ならず。此の傾向は夙く『多情多恨』より『金色夜叉』に移りし場合に現れしが、三十二年頃より宙外、柳浪、天外、風葉等の新作家の製作、概ね此の流風を追ふに至れり。宙外の「新機軸」「縁不縁」先づ彼が以前の作に對して新彩を加へしが、論壇に文士生活問題起るや、田園生活論を主唱して、

悲觀説を寛和せんと勉めしより此のかた、其の論旨は製作の上にも現はれ、三十五年の「遺る光」「乳母が家」「新小説」を始め、總べて精細穩健の筆、田園の情景を寫し來つて獨壇の妙あり。「ありのすさび」以後の作者の特徴は、最もよく此の和平自然波瀾なく奇巧なき田園小説に發揮せられたり。

柳浪は多作第一の目あれども、佳作多からず。「羽拔鳥」以後三十五年迄の間に、擧ぐべきは「纏れ糸」「骨ぬすみ」「紫被布」「二人やもめ」「亂菊物語」「雨」等の數篇に止まる。「纏れ糸」と「骨ぬすみ」とは、三十二年初に、『新小説』と『文藝俱樂部』とに出で、前後連關せる者、「紫被布」と「二人やもめ」とは、亦同年『文藝俱樂部』に分載せし前後連續の小説、「亂菊物語」は長篇の新聞物、「雨」は可憐の小品なり。何れも機智縱横、地の文は粗笨なるも、對話の巧妙なるを以て之を補ひ、優に戯曲的活動を示すに足る。一篇の情趣、讀者を恍惚たらしむるが如き美感を催起するなきも、痛切人の肺腑を衝くの實感を誘起す。總べて曩日の特徴依然として存すれども、唯其の着想、往年の如き陰慘の事相、病的戀愛はた變畸の人物に向ふ

ことなくして、事相人物自然に出で、戀愛亦純眞となり、「紫被布」の如きは、多少當年の俤を存すと雖、尙「二人やもめ」に於て之を調節せり。特に「縫れ糸」「骨ぬすみ」は、着想筆力共に新發展の先頭に立ち、「河内屋」以後の佳作と稱せらる。惜むらくは作者の達筆、一氣呵成に過ぎ、従つて濫作の弊あり、量に於て一世に超出するに係らず、明治文學の傑作として傳ふべき者甚だ多からず。

新寫實主義は、風葉天外に至りて自然主義的傾向を取るに至れり。抑も此の主義は近代思想界の一潮流にして、文藝に在りては、美の極致を發揮するよりは、むしろ實際生活を描寫せんことを求め、總べての思辨臆想を排して、唯自然のまゝを體現せんとするなり。故に此の主義に成れる文學は、美醜を識別して詩材を選択するを要とせず、世上百般の人事を其の儘に寫せるもの、やがて詩篇たるべしとなす。されば罪惡必しも避けず、卑猥必しも去らず、悲惨必しも却けずして、社會に存する程の事相は一毫の微も之を網羅せんとす。是素より其の極端なる者に就て言へるなれども、

風葉天外の作風多少之に類する所あり。

風葉は曩に「寢白粉」を作り、社會の暗黒面に筆を着けて評壇の問題となりしが、三十一年より次年に互りて、「戀慕流」「蠶下地」等を出して再び注目を惹きぬ。前者は『讀賣』に連載せし者にて、一管の吹奏斯界の天才と囑目せられし青年樂師と、洋樂界多望の秀才と稱せられし少女とが、近親を棄て名譽を棄てて多感の情焰に殉せしが、彼等が藝術の誇りと共に、懐しき未來の空想、夢の如く破れ、情に脆く意に弱き彼等は、社會の劣敗者となりて暗黒の裡に葬られ、はては辱められ、汚され、赤繩遂に完きを得ずして、『埋れ木』（鷗外譯）の樂師と少女との如き結末を告げし薄倖の譚を叙し、尙此の本筋に編み込むに暗黒界裡の消息を少からず綴れる傍筋を以てしたり。此の篇實に風葉の名を重からしめし傑作にして、又當時の彼を代表すべき總べての性質を具備す。後者も亦薄倖の藝人を主人公となし、戀と子の愛と絡み縫れて遂に狂ひ初むるに至れるを寫し、文章の雅文を學べるを瑕とすべきも、前者と同じく葛藤の深刻なる戀物語を綴り、當時社

會の一部に存する思想と煩悶とを描き出でて妙趣なきに非ず。凡そ作者の文辭、凄艶にして滑脱、精緻にして婉曲、紅葉門下の中最もよく師の衣鉢を傳ふと稱せらる。其の詩趣饒かにして一種の光彩あるは、柳浪天外の遠く及ばざる所、獨り鏡花に一籌を輸するのみ。且其の結構の緊密にして戲曲的開闔に富むこと眞に柳浪に接踵すべし。然れども、其の着想の現實的なるや、時に不倫の行爲を寫して顧みず。絢爛なる詩筆も遂に其の醜を蔽ふこと能はず。三十四年以後に於ける「醒めたる女」「黒裝束」「心中くらべ」「沼の女」等は皆此の作風にして、就中「醒めたる女」は、所謂本能満足主義乃至個人主義の思想を含み、當代思潮に關聯する者あり。

天外は此の風潮の最も極端なる代表者と見るを得べし。彼は從來諷刺小説家として知られしが、三十三年「初姿」を公にするや、揚言して曰く、小説作家は唯實世間に在るが如き人物を描き、其の人物の當然爲すべき行爲を正直に丁寧筆記するを勉むべし。小説は其の事相の如何を問はず、作家の空想せる世界に讀者の空想を遊ばしむれば足る。要は、讀者をして

實世間の事に感ずるが如く感せしむるに在りと。即ちかの十九世紀後半の佛國自然派の主張を以て信條となすに似たり。爾來公にせし幾多の小説、必ず寫實小説の標榜を冠し、勉めて叙事を省き獨語を斥け、對話と動作とのみを以て一切を描き去らんとす。蓋し此の傾向は突然「初姿」に始まりしに非ず。既に三十二年の作「肱枕」「亂れ髪」「娘心」後に「左繩」と改む等、皆作意なく、結構なく、日常矚目の人情世態を實寫するを主として、其の由つて來る因果の關係を追求することをなさず、概ね斷片的にして有機的の一個體を形成せざりき。「初姿」は此の傾向の益、明かに益、意識的になれるに過ぎず。之を其の後篇「戀と戀」及び後れて出でたる續篇「にせ紫」と併せ見るに、人物事件の出入偶發的にして、讀者の同情を集中し、其の感興を昂上せしむべき中心の人物事件なく、唯或る性格の人が或る境遇の下に正に爲すべき行動を實寫せる者なれば、之を斷片的に見るに、個個自然の姿を寫して美醜共に嫌ふ所なし。爾來「女夫星」「新學士」等の作、皆此の作風に從ひ、客觀寫實の筆淡々として他奇なく、唯事件の變化進行に

興味を感ずるのみ。

天外が自然主義は『はやり唄』に至りて代表的製作を出せり。嘗に寫實の筆力漸く蕉境に入り、巧妙ならざりし對話も漸く圓熟し來りしのみならず、佛國自然派の好題目たる遺傳と境遇とを以て總べての行爲を説明せんと擬し、且つ其の題材を現實の社會に取りて不倫の醜事をも避けざりし事など、所有方面に作者の特質を發揮したりしなり。筋は淫亂の血統を享けし女性が、夫に他の女あるを知りて嫉妬の末不和となり、報復的に姦通をなし、「狂ふ仇花親の種」と流行唄に唄はるゝに至る始末を寫し、自然の模寫を以て藝術の要義と觀じ、善惡美醜の取捨又は醇化理想化を加ふるを欲せざる作者の實驗小説の標本と見るべく、此の見地よりすれば、彼が一代の傑作なり。大體に就て言へば、女主人公の行爲の因て來る所、第一遺傳、第二境遇に存する事、おぼろげながら認められ、總べての動作をば是より演繹し得べきに似たり。然れども、各個に就て見れば、云爲唐突に失して因果の關係模稜に過ぐ。蓋し作者は其の主義よりして叙事の細きを望まず、

心理描寫の主觀的筆法を用ひず、只管外面に現はれたる對話と動作とによりて其の進行を示さんとす。斯かる客觀的描法は、常に感覺を本とするを以て、時としては冷々淡淡々、同情の溫きを缺き、想像の貧少と詩趣の缺乏と、亦之に伴ふ。特に下層社會の病的現象を寫すや、風葉と同一對境を取りながら、詩筆遙かに及ばざるを以て、益、感覺的に流れんとす。

*

*

*

*

*

*

自然主義的傾向に對立してロマンチック傾向を代表する作家を鏡花となす。彼は現實界よりも虚靈界を重んじ、自然界よりも神祕界に傾き、其の空想は人間寰を超越して夢幻境に入り、其の空想を載せたる詩筆は、幽玄の高調を帯びて空靈の域に上る。彼は現實自然の境地を描きて寫實小説と呼ぶべき者を作らざるに非ず。然れども、之を作るに方り、常に一種の神祕なる着想と幽玄なる筆致とを交へ、或は實世間の裡に超自然超人間の或物を究め、然らざれば、現實界と神靈界との間に或交渉を發見せんとす。唯其の想像の幻怪なる、往々常軌の外に顛脫するを以て、世或は妖怪小説

の名を以て其の神祕的美點をも没し去らんとす。然れども、人生何の時か神怪を絶えたる。社會に光明的半面と暗黒的半面とあるが如く、人間に凡と聖とあるが如く、人生亦尋常知見の及ぶ半面に、不可思議なる神祕界を藏せずんばあらず。天外は即ちかの平凡なる人生の半面に就き、其の暗黒界を寫せる者はして、鏡花は即ちその神祕なる人生の他の半面に就き、其の暗黒界を描ける者なり。

『梟物語』以後、三十二年に入りて益々幽怪を逞うし、『錦帯記』『通夜物語』『黒百合』『湯島詣』『五の君』より、『三枚續』『高野聖』『註文帳』『袖屏風』等を経て、三十五年「女仙前記」「起誓文」等に至るまで、一として怪奇の想を凝さざるなし。中に往々材を尋常の境地に取りし所謂寫實小説に近き者、例へば「通夜物語」「湯島詣」「三枚續」等の如きもあれども、其は神祕的分子の量の多寡によりて分る、皮相的差異にして、根本的性質に至りては即ち一なり。故に其の構想概ね或特徴を帶べる人物、或特種の神祕的事實を中心として、全篇の動作之に向つて集中するが如き型式を取る。例へば、

「錦帯記」は月夜五色の彩暈の出現に、妖女お禮の運命を附會し、通夜物語」は吉原のお職丁山といふ傳法肌の女性を中心とし、「湯島詣」は憂世に辛酸を嘗め盡したる勝氣の少女蝶吉を中心となし、「三枚續」は我儘育ちの氣象者の柳屋お夏を中心となして、三者共に數奇の運命を叙し、「黒百合」は古來人跡至らず魑魅魍魎の巢窟と傳へられし石瀧の奥深く、稀世の珍草黒百合の咲けりといふ事實を中心となし、之を採取せんとて此の神祕境に足を入れたる花賣少女と、之を救はんが爲に怪窟を搜りし少年華族とを點出し來つて一篇幽玄の曲を作り、「女仙前記」は轉生といふ靈界の現象を取りて貴族の奥方の前身を描きしが如き、即ち是なり。就中「湯島詣」「黒百合」「高野聖」等は當時の傑作として傳ふべく、前者は神祕的分子の少き方の作を代表すべく、後二者は神祕的幻境を寫せる好標本とすべし。

鏡花は人生の下層暗黒の一面に詩眼を注げり。社會凡俗の間に薄遇せられ壓伏せられて、孤弱伸ぶる處なく、而も天稟の意氣鬱結して反抗の氣焰を揚げ、進んで凡俗界を翻弄せんとする者、即ち彼が創作せる人物なり。

其の凡俗反抗の一面より見れば、飽くまで意力の人の如くなれども、底を叩けば熱情の暗涙を湛ふ。故に其の敵に對するや猛然として破壊の暴腕を振ふと雖、其の知己の懷に在りては赤子の如く可憐に、半生の薄命を混々たる涕涙に渾ひ盡さんとす。斯かる境界に同情せる作家は、曩に一葉女史あり。然れども一葉の人物は飽くまで人間なりしに異なり、鏡花の人物は、常に一種神祕の色に包まれて獨得の怪氣を現はし、遂には縹渺として超人間の幻境に入らんとするなり。若し夫れ彼れの文章に至ては、洵に當代の雋逸にして、詩韻饒かに幽味掬すべく、省筆一過すれば簡淨警拔、餘情言外に在り、精描細寫すれば愼密委曲、錙銖を分ち、二方面を兼具して何れも短句短文錯落して變化の妙を極む。其の一たび怪奇の想像を載せて奔逸するや、或は深山晝寂かなる「高野聖」の夢幻境となり、或は天麗かに氣澄み深林幽水咽んで滿地のうつぎ花雪の如く、聞として一鳥鳴くなき「黒百合」の別乾坤となり、其の對話の形を以て人物の口を出づるや、熱罵怒嘲、紙面に躍動する所、紅葉風葉が濃艶妖冶の方面に於けると同じく、斯

壇之に接踵する者を見ざるなり。

以上は明側より見し鏡花の一斑なり。然れども、彼れの作品は必しも至醇の藝術に非ず。其の傾向の極端に走するや、暗側乃ち現れずんば止まず。彼れの缺點は怪奇を弄び怪奇を銜ふに在り。筆端の凄愴脚色の幻怪を以て想髓の淺薄を蔽はんとするに在り。彼が多數の作、此の弊に陥らざる者甚だ多からざるなり。

文學轉進の運に乗じて發達せし小説は略之を説きぬ。翻つて小説界の他の半面、即ち歴史小説傳奇小説の消息を覗ふに、時運の影響極めて少く、又新進の名手出づるなく、依然として舊態を存せり。蓋し斯道の大家は、數百年にして僅に存する者、學識筆力準備、共に尋常にして足らず。馬琴の大才を以てして、其の歴史小説は、事件と人物とを史上に求むるのみにて、内部生命は純乎たる江戸時代の者たるを免れず。況んや過渡の空氣中に呼吸する明治文壇に於てをや。今の世に在りて歴史小説の逸作を得んは

殆ど不可能に屬す。されば前期以來、唯新聞物に生命を維ぎ、俗衆に投じて文壇の一隅を占有するのみ。但し讀者の數を以てすれば、必しも心理小説に劣らず。茲に少しく此の種の作家を取り、總べて寫實小説、心理小説、はた社會的小説等の範圍に入らざる小説類を叙せんとす。皆文學の進運に洩れし者なり。

浪六は、二十八年『たそや行燈』を出し、次いで『大阪城』『當世五人男』『原田甲斐』等をものし、皆例の遊俠氣質を寫せり。就中『五人男』は二十九年より『朝日新聞』に連載せし長篇にして、一屋の破窓に苦學を共にせし五人の書生が風雲を見て世に立つに至れる消息を描ける者、舞臺は明治なるも精神は依然として水滸傳的なり。弦齋は、世話小説をも作れども、觀念的心理的傾向は全く之を缺き、唯新聞紙上其の日々を面白く讀ませ、間々婦幼の教訓を含めたるに過ぎず。『衣笠城』『日出島』『小猫』『深山の美人』等、作甚だ多く、當時健筆第一と稱す。就中『日出島』は、其の量を以てすれば、類なき大作にして、二十九年より三十五年に亙りて『報知』に連

載し、卷を重ねて十二に至る。百般の社會事象を取りて悉く材料となし、總べて之を作中人物の閱歷として表出す。以て明治世態の皮相をも知るべく、無學者の學問にもなるべし。涙香は、近時連りに西洋通俗小説の翻譯又は翻譯を『萬朝報』に掲げて依然時好を維ぎつゝあり。以上三者は當時の通俗小説家、新聞小説家として知られ、文章平易、取材多面、最も俗耳に入り易し。大阪にては『朝日』の南翠、此の時好小説を代表す。二十八年頃の『荒海貫一』最も世に知らる。

澁柿園の歴史小説は多少の進歩を見る。二十八年の『最上川』『北條早雲』等より、『伊達政宗』『島左近』『五月女坂』『脱走兵』に至るまで、或は浪六を模せる痕ある者もありしが、後おのづから一家をなし、主に戰國時代の戰爭譚を綴り、美人勇士を點出して因果應報の結末を描けり。大體に於て依然舊様を脱せざれども、文章豪健にして内容に適應せるは、讀みて心地よし。多くは『日々新聞』に出で、新聞小説家として讀者の多き、弦齋浪六に次ぐ。麗水は美文家なり「不二の高根」「首陽山一帶の風光」等、紀行文

に在りては麗藻美辭有數の地位を占むるも、小説に在りては内容貧弱にして文辭誇張の弊に陥る。二十八年の『半月城』を始め、『さんざ時雨』『照日松』等、皆此の類にて、總べて澁柿園の後影を踏めり。其の他松葉、青軒、『大阪朝日』の加藤紫芳、渡邊霞亭等、皆多少の作あり。就中紫芳の『臺灣陣』(二十八年)は鄭成功の事蹟を描いて當時に名ありき。

終に臨んで、残存せる舊作家中、諷刺滑稽の一面を記さん。南新二は舊文學戲作界が残し、最も巧妙なる滑稽作者にして、前期中、『新作十二番』に出し、『鎌倉武士』及び此の期に入りて『太陽』に掲げし「滑稽道中雙六」の如きは、輕妙洒脫、現代の傑作と稱せられしが、二十八年末遂に歿しぬ。幸堂得知は、黄表紙の系統を引ける戲作者にして、亦輕妙なる滑稽の筆を弄し、篁村と共に斯道の殿たり。元來滑稽の名作は、明治の文壇に乏しく、僅かに是等舊時代作家の什を以て其の面影を偲ふのみ。

吾人は既に此の期の小説を説き了りぬ。翻つて翻譯界の趨勢を窺ふに、其の進歩亦著しき者あり。抑も明治文學の一進轉歩をなせしは、一般學術の進歩と文藝趣味の發達とに因ること論を俟たずと雖、之が原動力となりし文學者評論家を練成して此の事業を爲すに至らしめし者は、即ち泰西の思想及び文學ならんばあらず。今や國民の外國語を解する力亦往時の比に非ず、新著新作の舶來する者、古來の名著傑作と共に日に多きを加ふ。されば我が文學者は、嘗に之を玩味して自家の著作に資するのみならず、之を翻譯して江湖に紹介する者益盛になれり。此に於てか、翻譯文學は文壇の一勢力となりて絶えず創作壇を刺撃し、兼て國民をして泰西文學の面影を偲はしめぬ。而も此の活動は小説に於て最も著しきを見る。

曩に思軒鷗外等の翻譯界に立つや、翻譯家未だ多からず、紹介せらるゝ泰西作家作品の範圍甚だ狭く、且つ其の譯出紹介、多くは抄譯梗概譯若くは翻譯案に過ぎずして、謹嚴忠實なる譯述は極めて寥々たりき。然るに今期初頭に入りては、文科大學、早稻田専門學校、明治學院等は、數多の新進

翻譯家を出し、従つて翻譯紹介の範圍も、リットン、ユーゴーに限らずして、古今東西に亙り、且つ其の技倆精力も著しく進みて、翻譯案に非ず抄譯にも非ざる全譯を出すに及べり。今次を追うて少しく之を述べん。

思軒居士は、初め『報知新聞』に據り、其の「報知叢談」に抱一庵等を率ゐて譯筆を揮ひしが、後轉じて『國會』に入り『萬朝報』に移り、老熟の手腕を以てユーゴー、ポー、ベルヌ等を譯し、三十年末歿するに至るまで、斯壇を啓發して怠らざりき。不知庵も亦斯界の先輩にして、二十九年以後に於ては、ゾラを譯せる「戰塵」、コンウェイを譯せる「彫像師」を始め、譯述少からず。文辭暢達を缺くと雖、譯風誠實の稱あり。彼が創作壇に活動せし素地をなせりと見ゆ。鷗外は前期に引きかへて譯筆寥寥たりと雖、妹女史喜美子、レルモンツフの「浴泉記」(二十七年)、ビンデルマンの「名譽夫人」(二十八年)、ハイゼの「浮世のさが」(同年)等數篇の譯あり。皆幽婉なる雅文を以て之を綴り、活動の趣なき代りに氣品高尚なるは鷗外に似たり。三十年二人の譯稿を集めて『かげ草』を公にしぬ。若松賤子は亦女

流翻譯家にして、英語の素養文藻の才力、斯壇の異彩と目せらる。『女學雜誌』及び『閨秀小説』に收めし「忘れ形見は」ミスプロクトルの韻文を散文に譯せる者、三十年(歿後)遺稿として出版せられたる『小公子』は、バーネット女史の作を譯せる者、共に明治翻譯界の珍として永く滅びざるべき名作なり。其の他飯田旗軒、卯花庵、抱一庵、嵯峨の舍等、皆二三の譯あり。斯壇繁榮の序幕は開かれぬ。

三十年に入りて、翻譯界は局面を開展しぬ。『第二閨秀小説』なる喜美子の「心づくし」桂香の「初戀」故賤子の「ローレンス」、小品なりと雖、幽默掬すべく、今野愚公がコッパルを譯せし「結婚」及び「小説家」、共に筆力見るべし。此の時に方り、文壇に跡を晦す事十年なりし二葉亭四迷は、再び當年の詩筆を揮うて斯界の進運を鼓舞しぬ。二十九年末『片戀』を出してより、「肖像畫」「浮草」を『太陽』に、「夢語」「親心」「腐れ縁」「酒袋」を『文藝俱樂部』に掲げ、獨得の言文一致を以て暢達渾熟の逸品を作せり。就中『片戀』はツルゲネーフの原作にして、ライン河畔の自然美を背景として

詩情清婉の片戀物語を編める者。「浮草」「親心」亦同作家の名品にして、前者は思索家ルーチンの半生を描き、後者は母親の至情に感激して墮落娘の悔悟する筋を叙す。共に長大ならずと雖、内容の異色に富めると譯筆の精嚴なるにより、嶄然として當代に傑出し、二葉亭をして斯壇の第一流として鷗外と對峙するに至らしめぬ。其の他『文學界』の星野天知、馬場孤蝶、戸川秋骨等、連りに南歐文學を唱へ、飄逸優婉の詩想を鼓吹して、其の斷片を紹介するに勉め、『帝國文學』の上田柳村、之に呼應して近代佛英のロマンチック派文學を説き、主として小品の翻譯に力を用ひぬ。長田秋濤は、梗概抄譯なれども『浮かれ蝶』『戀のナポレオン』『王冠』等、比較的長篇を出したりき。

斯かる間に譯風漸く謹嚴に赴き、抄譯翻譯案の外全譯も出で、小品短篇のみならず長篇大作をも譯出する風漸く盛になりぬ。先づ淺野憑虚は、三十四年『スケッチブック』を公にして以來、翌年には『クリスマスカロル』、翌々年には『ヴィカー物語』を出し、皆譯文の清爽、譯風の着實を以て知

られたり。次に從來翻譯案物を以て名ありし『萬朝報』の涙香も、亦眞面目の態度を以て『レ・ミゼラブル』を抄譯し、「噫無情」と題して、三十五年の紙上に連載せり。此の時に方り、曩に、二十五年の頃『柵草紙』に譯載し初め、一時草紙の中絶と共に中止し、三十年再び『めざまし草』に稿を續けし鷗外の『即興詩人』は、起稿以來八年を経て完結刊行せられぬ。原著はアンデルセンの傑作、『インプロヴィザトル』にして、カムパニヤ生れの即興詩人がローマの歌妓と相愛して而も相悟らず、流浪落魄、幾多の轉變を経て中心の愛嘗て渝らず、遂に歌妓が邊陲に窮死するに及び、其の遺書を得て始めて濃情熱愛十年衰へざりし眞相を知り、感謝と追悼との悲涙を尼院の新墓に澱ぐと言ふ筋を、詩人が自叙の體にもものし、ローマ及び其の附近の自然と人事とを背景として清婉の戀物語を綴りし者なり。想像饒かに叙述微に入り、詩趣縹渺として清楚の情掬すべく、譯筆亦優雅圓熟、例の擬古文ながら、『埋れ木』に比して一層の洗鍊を加へたり。且此の篇、從來紹介せられざりし北歐文學の一名什なるを珍とすべきのみならず、堅實

の意志不斷の精進を以て完成せし譯者の意氣を貴むべしとなす。

三十六年に至りては、翻譯文學の機運頓に動きぬ。是より先き、歐洲近代の文學者、特に現代新思潮を代表すべき作家の思想製作連りに我が文壇に入り、或はニイチエを鼓吹し、ハウプトマン、ゾーデルマンを紹介し、ワグネルを論じ、シエンキークウイツチを説き、或はゴルキ一の浮浪思想を唱へ、マールリンクの神祕思想を道ひ、一代の思潮將に一變せんとする兆あり。従つて紹介翻譯雜然として群起し、小説に在りても、富永蕃江の『緋文字』(ホーソーン)、吉田荻洲の『走馬燈』(ド・デー)、本多増次郎の『驢語』(セウエル)抱一庵の『聖人歎盜賊歎』(リットン)『巴里の祕密』(シュー)秋濤の『椿姫』(ヂューマ)、紅葉の『鐘樓守』(ユーゴー)等を始め、長短各種の作甚だ多く、韻文戯曲の譯と共に無前の盛觀を呈しぬ。就中抱一庵は、一時文壇に忘れられし者、再び往年の譯筆を揮ひ、絢爛の致なしと雖、瘦勁にして一種の趣あり。『椿姫』は二十八年の頃、雜誌『白百合』に掲げ初められしまま久しく中止せられ、八年後の今日一部完結して出でし者なり。原作は

所謂十九世紀五大作の一にして、愛すべき人にして世に愛せられざりし薄命の人に洪大なる同情を濺ぎ、愛すべき人を愛せざる社會に攻撃の矢を放ちし者。譯筆は此の同情を傳へんには華飾に過ぎ、妖艶の中純清の韻ある一篇の風趣を失へりと雖、五百頁の長篇、暢達なる口語體を以て揮灑せる所、亦斯界の珍となすに足る。『鐘樓守』に至りては、五大作の隨一、『ノートルダム・ド・パリ』の譯にして、秋濤の草稿によりて紅葉が書綴りたるものなり。此の小説は、巴里城内赫耀たる文明の花と、其の裏面に潜む暗澹たる魑魅の風とを背景となし、ノートルダム鐘樓守を主人公とし、薄命の少女を之に配して綴りなせる史的小説にして、中世の大遺物たるノートルダムの大伽藍を叙せるあたり、精微神に入り、之を中心にして百般の事象を編み出し、十五世紀文明の首都巴里の面目を躍如たらしめし不朽の名作なり。

第七章 文學一轉の機

明治文學も齡漸く長けて今や三十に餘れり。顧みれば二十年前後、文學革新の事ありて以來、思潮變遷文運進歩の急速なる、宛ら走馬燈の回るが如く、昨の新は今の陳、今の新は又明の舊たらんとす。所謂過渡文學といふ名稱は、獨り十年代の文學に與ふべきに非ず。大局の上より見ば、三十年間の文學は畢竟過渡文學の連續たるの觀あらん。十八九年の交、文壇を聳動せし春の屋及び其の他の小説家の述作は、二十八九年に至りては、夙く陳套に屬し、之に代りて起りし觀念小説、心理小説、社會小説の新作家が滔天の勢を以て其の清新を誇りし述作も、三十五六年の交に至りては、是亦新時代の人心を維ぐに足らずなりぬ。獨り小説のみならんや。二十七八年に起りし和歌俳句の新彩も、茲に至りては沈滞して進まず。新體詩も亦晚翠藤村に底止して後久しく、戯曲は逍遙の試験的述作の外、又論壇を驚かす者なし。而も之を刺衝し鞭撻して新文學を起す大動力となり來れる

世界の思潮は、駭々として進むこと暫くも止まず。國民の之に參すること日に月に密接の度を増したれば、文壇永く現狀に安んずべきに非ず。早晩一轉して更に新しき大文學を生せざるべからざる機運に際會せり。

當時の文學は恰も五里霧中に彷徨するが如し。舊に憚らず、新を得ず。疇昔謳歌熱中せし文學も今日既に興趣を感せず。今日興趣を感せざる文學を後來如何に變すべきかを知らず。懊惱煩悶の容文界に普く、二十九年より三十一年に互れる活氣疾く去りて沈滞の空氣斯壇を覆へり。此の時に方り二十年以來の文學者にして時勢の犠牲となりて影を潜め姿を隠す者漸く多く、或は筆を燒きて他に轉じ、或は轆轤落魄世に埋もれ、或は筆を案じて病に仆る。矢田部尙今外山、山相次いで歿し、井上巽軒復歌はず。逍遙身を教育に抛ち、四迷復び隠れ、賤子、稻舟、一葉、薄氷相續いて仆れ、思軒及び硯友社の二三子同じく世を辭し、美妙齋嵯峨の舍遂に當年の勇なく、湖處子忍月各、他方面に轉じ、鷗外稀に筆を取ると雖、雜誌『萬年草』は、遂に『めざまし草』の如く盛なる能はず。露伴は江畔の悠遊に龍蛇の

氣を沒了し、紅葉は硯友社の諸傑と共に俳道に耽らんとす。三十五年より六年にかけては、文星落つる者連りに、子規樗牛先づ歿し、紅葉萩の家之に次ぎ、綠雨抱一庵少しく遅れて三十七年亦之を追ふ。斯くの如きは皆時勢の一大旋轉をなすべき現象にして、正に新陳代謝の樞軸に當れる者なり。今次を追うて此の時代の狀勢を覗はん。

第一節 俳句和歌及び新體詩

俳句界の形勢は既に三十一年に定まり、日本派の趣味作風全國に瀰漫して、新教養あり新趣味を懐ける青年俳家皆之に赴き、競うて俳會を結び俳誌を起し、日に月に隆盛に向うて又蹉跌することなかりき。然れども内容の進歩は到底勃興當時の如く目覺しきを得ず、其の變化も亦當時の如く根本的なるを得ず。概して簡單より複雑に赴き、瑰奇より平淡に向ひ、天然より人事に進み、叙景より抒情に移り、純客觀より主觀に及ばんとするに過ぎず。三十四年の句集『春夏秋冬』を以て『新俳句』に比する時は、容

易に此の間の消息を窺ふを得べし。されば此の前後の俳句は、日本派創業時代に播種せし所の者を收穫したるものにて、三十五年に於ける『獺祭書屋俳句帖抄』『増補獺祭書屋俳話』の出版、及び子規の病歿は恰も此の事業の大成を告ぐる標章の如くなりき。

和歌壇に於ては、『明星』に據れる新詩社一派、『心の花』に據れる竹柏園の門流、『馬酔木』を刊行せる根岸の一派、新詩社より別れて『白百合』（三十六年）を發刊せる青年歌人の一團、及び萩の家の門流、金子薫園、尾上柴舟等、作家益多きを加へ、作品の數量遙に前年に超ゆ。然れども其の思想聲調の一代文運の進歩に伴ふに至りては、俳句と等しく未だ容易に許すべからず。獨り『明星』に於ける女作家鳳晶子、放縱なる感情を歌ひ富瞻なる想像を逞うして一種の詩調を出し、詰屈奇峭、措辭は大膽に句法は奇抜に、複雑斬新なる譬喻擬人を敢てして、歌壇の面目を一新しぬ。假令其の極端に走る所、或は嶮怪の譏り晦澁の嫌ひなきに非ざりきと雖、詩才の縦横情熱の熾盛、斯界稀に見る所なりき。詩題は概ね當時の新體詩と趣を

同じうし、主として戀愛を歌ひ、然らずんば小説的趣向の人事、神祕的空想を逞うせる情景を詠す。而も其の思想に當時青年の間を流れたるロマンチック傾向を帯べるものあり、能く青年一部の感情を表出して最新の思潮に觸れたり。これを以て此の作風一時青年歌人を風靡し、『明星』一派の特色となりて斯壇に重きをなせり。晶子の歌集『亂れ髪』(三十四年)『小扇』(三十七年)は嘗に此の作家を説明する好箇の標本たるのみならず、當代歌壇の新潮を窺ふべき代表的歌集なり。明治の和歌が思想形式共に舊觀を改めしは、直文鐵幹の時に非ずして、實に晶子等の當時に在るなり。爾來晶子の歌漸く圓熟を加へ、當年の純主觀的傾向を離れて著しく客觀的事象の吟詠を増し、一誦すれば自然の風物が人間に對して渾然融合するを感ずる者あり。『舞姫』(三十九年)『夢の華』(同年)二集は正に其の高潮に達せる者にして、『亂れ髪』に比ぶれば跌宕博大の別趣を加へたり。然れども盛觀茲に底止して又展開の餘地なきが如く、短歌革新の事業は既に其の終を告げたるに似たり。

轉じて新體詩界に移らんに、三十五年以後の形勢は俳歌兩界に比して遙かに活氣に富めり。藤村筆を此の方面に絶ちて小説界に移りしも、晚翠、泣菫、月郊、有明、花外、泡鳴、醉茗の徒、『帝國文學』『明星』『新小説』『太陽』『文庫』等に奮ひ、平木白星、前田林外、相馬御風、山崎紫紅等亦次いで起り、『小天地』『百合』等に據りて一時斯壇に光焰を擧げたり。

今次初頭の新體詩は一般に懷古的色彩の著しきものあり。二十九年以後の可憐なる戀愛詩に倦み、卅四年前後の所謂星菫の詩詠に歴きたる讀詩社會は、新なる詩材を覓めて端なく過去の生活に眼を集め、回顧憑弔の意は一たび現はれて古典的詩歌集の刊行となり、『半月集』(半月)『霓裳微吟』(羽衣)『藤村詩集』(藤村)新に世に行はれ、二たび現はれて古蹟古詩人の憑弔過去藝術の讚美を試みたる晚翠の『東海遊子吟』(三十九年刊)月郊の『春雪集』(三十六年刊)となり、三たび現はれ古英雄を賦したる鐵幹等『明星』の史詩叙事詩となり、四たび現はれて古語復活神話傳説の復現を試みたる泣菫の譚歌となり、五たび現はれて史實傳説等を脚色したる白星等の

劇詩となり、以て四十年に至り、斯界別味の一系列をなせり。

○ 晩翠の吟詠は多く泰西羈旅の作にして、仰いで過去の藝術を想ひ俯して現代の文明を觀たる詩人が感傷の聲なり。正に是れ『チャイルドハロルド』の流風遺韻を汲める者、歴史の國藝術の國なる南歐の風物を歌ふに於て特に精采を見る。曾て『曉鐘』に現れし淨樂界の翹望益著しく、遂に此の理想實現の世を我日東帝國の未來に求め、新文明新文藝の出現を望んで國民新に歌あれと祝福するに至りぬ。泣菫の神話的譚歌は斯壇に一新生面を開きたるものにして、三十六年の「雷神の賦」『明星』「天馳使の歌」『新小説』三十九年の「葛城の神」『早稻田文學』等、陳套の傳説を復活して光彩ある一新藝術品となせる績、歎賞に價す。「雷神の賦」は朔風怒濤吹雪雷鳴を觀じて一條の神話的構想をなし「天馳使」は伊弉諾黃泉行の神話と比治山羽衣天女の傳説とを結合し、諾冊二尊長へに別れてより子孫女性の慈悲を知らざりしに、眞名井の翁、天女「慈悲」を下界に抑留してより人の世に絶えたりし女性の慈悲再び現はれ、下界之より新代の歡樂に浴するに至れり

といふを想髓として、趣味ある一篇を成せり。而して泣菫の詩語を洗鍊するや苦心を極め、特に古語を復活する運用の才遙に前年の擬古派詩人に優り、紀記萬葉の語彙を驅使して寤感の態なし。流風延いて當時の詩界を吹靡け、鐵幹有明以下青年詩人等皆其の聲に倣ひ、争うて耳遠き古語を羅列するに至れり。されば其の極まる所弊も亦伴ひ、晦澁に陥り無意義に終ること少しとせず。

新詩社一派の敘事詩は純然たる史詩譚歌に非すと雖、新體詩創始以來斯界に缺如せる一面を充せる者にして、三十六年鐵幹紫紅白星泡鳴等が「源九郎義經」「日本武尊」をもつて研究を試みしを始め、泡鳴は「鳴門姫」「豊太閤」を出し、紫紅は「日蓮上人」を出し、白星は「心中おさよ新七」及び劇詩「老西郷」「耶蘇の戀」「釋迦」を出し、以て一時詩壇の單調を破りぬ。就中白星は別に『日本國歌』と題して、『曉鐘』の後半『行春』の一部に見えたる如き時事に關する感慨の詩、時事に對する主張の詩をも公にせり。

然れども此の敘事詩史詩の流行は空華一時の盛觀を残すに止まり、文壇の中心若しくは詩界の本系に對して何等著しき影響を與へしを見ず。斯壇の中心勢力として次代の新潮に直接關係を有するは、むしろ神祕派空靈派の一流に存す。されば敘事的傾向の行くへを辿る事は暫く茲に止め、翻つて當時の神祕空靈の詩品を模索せんとす。唯筆を改むるに方り、尙一事の述べざるべからざる者あり。從來詩系の外に立てる一詩星の突如として光銜を放ちし事即ち是なり。

三十七年小説家露伴「出廬」の一篇を『讀賣』に掲げ、連載十ヶ月、詩壇無前の長篇として一時人目を眩耀せり。其の引に曰く、「出廬」一部四篇、第一篇は世の悦ぶに足らぬを言ひ、第二篇は詩の愛すべきを叙し、第三篇に至つて空想に遊ぶも亦實在の累する所となるを免れざるを述べ、第四篇に於て詩と世と共に悦び愛すべく、實在と空想と相即き相容るべきを詠じたり。こは予が將に世に出さんとする詩集『心の跡』全卷の序として看るべしと。不幸にして『心の跡』は遂に世に出でず。作者詩想の神髓如何を

知るに由なしと雖、「出廬」のみを見るに、理義透徹して情趣亦饒く、説論明晰にして詞藻亦豊麗、言はゞ作者多年の蘊蓄を傾倒して人生哲學を歌ひ出でし者、即ち人格の詩哲理の詩なり。而も此の種の詩篇は、動もすれば吟詠の境を出でて説論の界に入らんとするが故に、詩としての成功如何は直ちに表現の技巧に關す。「出廬」の結構整正に過ぎ、修辭縱横を極めたるは、却つて此の點に於ける不利となり、渾融の致に缺くる所少からず。吾人は唯時流の外に卓立せる雋邁なる詩想聲調を得、専門詩人以外の警拔なる修辭用語を得て、斯界の爲には有力なる刺撃となりしを喜ぶ。

翻つて思ふ。我が新體詩の本流は何所をかける。曩に空想的戀愛に酔ひ、中頃官能的戀愛に耽りしもの、急速なる文明の進歩に伴ふ現代人の複雑なる心情に適合すること能はず。暫く理想の満足を過去世界に求めて敘事詩史詩を試み、或は之を現在の儘の娑婆世界に求めて逍遙の『新曲浦島』露伴の『出廬』に見えし如き理想即現實の思想を歌ひしも、強烈なる自意識の壓迫に苦める現代青年、最近西洋文學の新潮に知己を見出でたる現代

讀詩社會にとりては、前者は美しき夢の世の如く、自己と相距ること餘りに遠く、後者は諦め過ぎ悟り了れる聖者の如く、自己と相背くこと餘りに甚し。是に於てか、憧憬煩悶、遂に靈を呼び神を呼び、一種の神祕的願想的の詩風を形作るに至れり。『二十五絃』(三十八年)の作家泣菫、『獨絃哀歌』(三十六年)の作家有明、『夏花少女』(三十八年)の作家林外、『夕潮』(三十七年)、『悲戀悲歌』(三十八年)の作家泡鳴の如きは、この作風を代表せる者なり。

『二十五絃』は之を彼の藝術の悠久を歌ひし『行春』に比するに著しき詩想の變化あり。多くは自然を觀照して中に一種の靈を覓め、飄逸なる想像と曲折ある譬喩と、相俟つて一脈神祕の薫りを浮動せしめたり。「虹の歌」には各種の生活と自然現象とを結合し、「公孫樹」には落葉を實在の證明と觀じ、「翡翠の賦」には小禽の生態を見て其の胸に包める祕密を思ひ、「金剛山の歌」には自然を人格化して高山の曙色を歌ひ、その他「霜月の一曰」「神無月の一夜」等、皆自然を靈化して幽玄の想像を馳せたり。次に『獨絃

哀歌』は靜思の姿願想の趣、全篇にほのめき、前代の熱情的戀愛詩に對してよく當代の特色を現せり。例へば「靈鳥の歌」「佐太大神」等に空靈高渾の想像を凝し、「幻影」「蓮華幻境」「光の歌」等に神祕清遠の憧憬を披瀝し、「聖樂園」「頼るは愛よ」「君も過ぎぬ」等に靈氣に満ちたる信念を吐露し、特に「幻影」の一篇、かの心に求むる所ありて求め得ず、捉へんとする影ありて未だ其の形を確め得ざる無限の哀愁を幽婉の詞章に寓せ、總べて宗教的神祕的色彩を帯びたり。流風正しくロセツチに出で、前代の泣菫がキーツの遺韻を汲めると相對して、流風の變遷を適切に覺知すべし。要するに有明の詩想は、情緒の靈化せられたる淨樂界を翹望し、「永世の脈精氣満ちて時劫の進み老いせぬ愛のとかげ」の實現を見んと冀ふ者なり。而して此の夢幻の如き幽情を傳へて晦澁ならざらしめんが爲に、修辭上多大の苦心をなし、或は譬喩を用ひ、或は抽象を具象化し、觀念を感覺化するに努めたり。

『夏花少女』に在りては、「魔怨」「妖魔の泉」「沙雲雀」「妖女」「魔障」「夏の夜

の夢」等の諸篇、總べて怪奇の空想を逞うして幽魔の境に入り、陸離たる麗藻を凝して技巧の堂に上る。彼は非情を人格化せんとする事泣菫に似て魔氣に富むこと之に過ぐ。次に『夕潮』『悲戀悲歌』は同じく一味神祕的基趣を帯び、達し難き翹望の惱みを表せり。之を他作家に比ぶるに、泡鳴の詩は理を以て優り、他の唯美的の詩篇に對して著しく哲理的に傾けり。唯其の措辭餘りに直截、語彙餘りに貧少、理路餘りに露骨なるを失とす。然れども當代詩界に缺如せる剛健重厚の作風に至りては、遂に之を泡鳴に求めざるべからず。『悲戀悲歌』の中なる戀愛詩が一樣に神祕的宗教的色彩を帯べるは言ふも更なり、『夕潮』の中なる「あゝ世の歡樂」の如きは、心に求むる所ありて而も得られざる苦惱を詠じてよく當代の詩風を表せり。

詩想の傾向かくの如く變遷しつゝある間に、詩形に於ても幾多の新しき試みはなされぬ。晩翠は必ずしも七五五七によらず、時に長短句を試み、泣菫は前の八六調の外種々長短句を混用し、有明は四七六の一句八行六行の二節より成れるソネット形を試み、林外は八七調四行八行二行の三節より

成れるソネットを作し、泡鳴は八七、七六、六四、七七等、各種の詩律に指を染め、其の他苟も詩人にして詩形に關する多少の研究をなさざるもの無かりき。

當時詩界に於ける此の新潮の由て來る所は、勿論一代人心の傾向に在りと雖、新詩人を刺撃し暗示したるものは實に泰西詩人の作品なり。三十四年以來刊行せられたる『ハインネの詩』『ゲーテの詩』『ユーゴーの詩』『キーツの詩』『アルツワルスの詩』『テニソンの詩』『セレーの詩』『バーンスの詩』等幾多の譯詩は、是等泰西詩人の作品が如何に當代人士に愛讀せられしかを證すると共に、孰れの詩人の作風が當代を動かしつゝあるかを明にせり。曩に情熱を歌ひ古典的の作風を追ひし時は、前掲の英獨詩人に影響を受くること少からざりしが、近時ロセチ、スキンバーンに私淑して、茲に有明等に見えたる空靈神祕の詩趣を喜ぶに至れり。斯かる間に三十八年前後に至り、更に佛國象徵詩派を紹述して一種の象徵詩を我が詩壇に導き入れしにより、詩風一轉の機新に兆して、斯界頗る色めきぬ。事は次章に詳悉す

べし。

○斯くの如くにして當時の形勢は藤村晩翠が一世を指導せし時に比して著しく變遷し、一代の詩人二家の境地より一步を進めんとするに方り、右往左往各、其の好む所に從ひて上來述ふる如き諸種の詩風を起し、其の他醉茗の如き花外の如き、亦一種の詩調を出し、或は泣菫の『白玉姫』(三十八年)の俗謠體となり、或は晩翠の律詩(同年)となり、或は露伴の四行詩(同年)となり、暗中摸索動搖の態所在に現れぬ。而も中に一道の本流之を貫くあり、新代の思潮に應せんには早晩一回旋を試みざるべからざるに至りぬ。

第二節 小説及び戯曲

三十四五年來、小説界の氣運著しく沈滞し來り、作品の量作家の數遙かに前代に超ゆるに係らず、新代の人心に添ふべき佳篇甚だ乏しく、舊作家は萎微し、新作家は未だ形を成さず、斯界暫く混沌の間に在り。其の間多

少注目を價する者は、露伴の『一日物語』(三十一年)『天打つ浪』(三十六年)紅葉の『金色夜叉』續稿(三十五年)眉山の『石卷庄左衛門』(三十六年)天外の『魔風戀風』(同)風葉の『涼炎』(三十五年)鏡花の『白羽箭』(三十六年)『風流線』(同)及び新進作家春葉、秋聲、徳富蘆花、菊池幽芳、中村春雨、島崎藤村、山岸荷葉、田口掬江、永井荷風、草村北星、生田葵山、三島霜川、木下尚江等の二三の作品に過ぎずして、未だ一世を指導すべき大勢力とならん者を見ず。左に少しく這般の消息を覗はん。

『金色夜叉』未だ完結に至らずして作者宿痾に悩み、起稿以來五ヶ年を経て一臥遂に起たず、三十六年晩秋未完の大作、彫心鏤腸の迹を留めて詩魂長へに逝きぬ。文壇の先覺紅葉の文學的事業は斯くして終を告げぬ。吾人をして暫く彼を回顧せしめよ。彼は一身を以て詩神に獻じたりし天成の文學者なりき。文藝に對する趣味の廣きや、文學の所有種類を試みて倦まず。而も之が創作に従事するや、主題の研究周匝を極め、文字の推敲慘憺を極む。其の藝術的良心の旺盛なる、文壇其の比を見ず。彼れの將に死せんと

するや、弟子を顧みて曰く、七度生れ更つて文章の爲に盡さんと。彼が生涯の事業は、一に此の抱負と覺悟とより來る。硯友社を結んで新文學興隆に盡し、も之が爲なり。門下俊才を養うて文學教育家の典となりしも之が爲なり。文學者對社會の問題起る毎に、一身を以て文學者の長城となりしも之が爲なり。十千萬堂出版社（三十六年）を起して文學者に對する出版業者の壓迫を防遏せんと勉めしも亦之が爲なりき。是等の點に於ては、彼は實に明治文學者の巨頭たり。唯其の作物の傾向に至りては、紅葉は未だ文學界全般の代表者たるに足らず。彼れの代表するは其の都市的半面に止まる。彼は純乎たる都市的詩人なり。其の小説俳句は都市の情に入るの深き、人事を穿つの犀利なる、口語對話を操るの巧妙なる、殆ど天品に出で、之に反して田園の情を描き自然の景を寫せる者は、概ね皮相にして神に入らず。瞑想靜思の趣致おのづから缺けたり。故に小説家にては馬琴よりも京傳を尙び、俳人にては芭蕉蕪村に赴かずして談林江戸座に往き、紀行文『煙霞療養』の如きは全然失敗に歸したり。此の對比は總べての都市文學

者と田園文學者との間に存し、觀察着想文體技巧等、兩者各其の特長を具ふと雖、殊に紅葉は都市的特長の特長を集め、宛然東京詩人の代表者たり。故に其の特質の範圍内にては、彼れの才は多面無礙、行く所として可ならざるなく、特に其の本領たる小説は、洵に明治文界の名珠にして、其の發展推移の迹を叙しなば、直ちに一部の明治小説史を成すべし。『我樂多文庫』の昔より『金色夜叉』に至るまで、二十年間の作、初は江戸戯作者の面影を帯びし者。漸く移りて泰西作家の思想聲調を傳ふるに至りし始末を見るに、彼れの小説は事實に於て新舊分子の混融する所、東西文學思潮の合流する所、敵かば何れ過渡の音を發せざるなし。思ふに三十年間の文學は、大局より見れば、畢竟過渡の産にして、異日精華を開くべき、新國文學の基礎を置ける者。紅葉の如きは正に此の遷轉期の偉人たるべし。

紅葉の逝去に先つこと少時、露伴は「天打つ浪」を『讀賣』に掲げ初めぬ。爾來斷續遂に完成せざりきと雖、着想詞藻作者の特長を發揮し、小説界一般の潮流に關せず、獨り其の本來の理想的傾向を進め、人生哲學の披

瀝益、蘊奧に入り、且つ其の宗教的神祕的思想は新彩を帯びて益、幽玄の致を加へたり。其の文章に至りては、雄健周匝、神來一揮の妙益、加はり、多年の蘊蓄、傾け來りて作家の面目を躍如たらしむ。思ふに露伴は、紅葉と等しく文學的修養を舊時代に得、舊文學を鑑識せる眼光を以て泰西の文學を見る。故に創作の内容外形、共に純然たる新文學なる能はず、言はゞ過渡時代文學者の粹たるに過ぎず。然れども彼が述作に臨むや、深邃なる研究と該博なる涉獵とをなし、準備既に成り材料既に集らば、乃ち神興を藉りて一氣揮灑、詩想混々として盡きず、詞章陸離として輝く。而も内に養ふ所の氣魄精神は、文字以外作風以外に卓立して容易に他の追蹤を許さず。露伴の如きは實に新舊文學遷轉の軸頭に立ちて過渡時代の精粹を集めたる明治文學史上の一大記念なり。

斯くて過去小説界を支配せる二巨人相繼いで辭し去り、次代を形作るべき作家は各、自家の傾く所を盡くして特種の作風を發揮しつゝ、暫く道途に迷へり。就中當時の讀者社會に比較的勢力を得て一時世に行はれしは、所謂

家庭小説の一流なりとす。蓋し前代以來痛烈なる刺撃を要求せる人心に適應せんが爲めに、深刻悲慘なる作風の行はるゝを見しが、其の弊の極まる所、茲に沈滯し、萎微し、遂に反動を起し、人心一時新なる或者を需む。此の間の消息は夙く前章に説ける柳浪が作風の變遷に表れしが、茲に至りて明に其の體を露出せしなりき。蘆花幽芳春雨春葉掬汀柳浪等の最近の作風即ち是なり。

蘆花は夙に民友社の紀傳家として知られしが、三十二年「不如歸」を『國民新聞』に掲げ、小説家としての名聲俄に揚りぬ。爾來三十四年『思出之記』、翌年『黒潮』を公にし、最も時流の歡迎を受けた。著想結構特に秀でたるなく、描寫の技巧必しも精妙ならずと雖、一篇の骨子たるべき事象は、健全なる家庭的趣味に富み、至醇の戀愛を以て肉づけられ、深切なる同情を以て衣づけられて、一種道念の高潔なる作品を形成せり。獨り「黒潮」は明治の文明明治の社會の側面觀を具現せし社會的小説とも見るべけれど、中に貫流する一道の情趣は亦前二者と同一に出づ。幽芳は新聞小説

家としてむしろ俗流の嗜好に投せんことを勉むるものなるのみならず、作品多く翻案に似て、本邦現代の生活と相渉る者少ければ、特に文壇に重きをなすに足らずと雖、一時讀書社會の人氣を得たるは、即ち『己が罪』『乳姉妹』等の家庭的趣味に負ふこと少からず。掬汀は其の地位傾向二つながら幽芳に似、『人の罪』『伯爵夫人』等、新聞小説として著名なりしは、皆此の潮勢に乗せるによる。春雨は新進の作家にして、三十四年『無花果』の作を以て知らる。着想純眞にして中に一貫の道念あり、最も宗教的色彩に富む。春葉は平靜溫藉なる家庭小説を能くし、紅葉の絢爛風葉の妖艶なき代りに清楚掬すべき旨味あり。既に『錦木』(三十四年)に其の傾向を示し、『忘水』『いさゝ川』の短篇に漸く形をなし、『母の心』(三十八年)『宿り木』(三十九年)『古驛』(同)に至りて明に家庭小説を標榜せり。柳浪は近時作風を變じて筆を家庭小説に著け、『二筋道』『繪師の戀』等、皆時尙に適應せんと努めしに似たり。

斯くて家庭小説は一時新聞小説を中心として盛に行はれしが、詳に其の

内容を省察すれば其の案外に空虚なるに驚くべし。時代の社會道德に適應せんと企てたる態度は文藝其の物の上より見て慶すべきか否かは俄に判すべからずと雖、之が爲に強ひて作爲の迹を残すが如きは遂に高級藝術の事に非ず。不幸にして當時の家庭小説は結構描寫二つながらわざとらしき作爲の迹を存し、到底進歩せる讀書社會を満足せしむるに足らざりき。蓋し當時の家庭小説は前述の如き反動の勢に成りしもの、固より確たる根柢あるに非ざりしなり。

されば當時の小説界には依然として相反せる潮流あり。秋聲は『雲の行くへ』(三十四年)『春光』(三十五)『桎梏』(三十六)等に沈痛の筆を揮つて敗れたる人生の或問題を解釋せんとし、荷風は『地獄の花』(三十五)『夜の心』(三十六)に於て人間の獸性に著想し、遺傳と境遇とに伴ふ小説的事件の開展を敘し、風葉は『涼炎』(三十五)に官能の刺撃によりて人間の道念と獸性とが迭に消長する契點を描き出て、藤村小説界に入りて『舊主人』(三十五)『水彩畫家』(三十七)に愛情なき家庭の主人が外國の事情に引かれて自

然に落ち行く情塊の果てを寫し、皆前章述べたりし自然主義的傾向を帯びて而も一層深痛なる内省の迹あり。而して此の方面を代表して當時最も盛名ありし者を天外の『魔風戀風』となす。三十六年春より『讀賣』に出でし長篇にして、作者が所謂寫實小説益現實的となり、事件人物悉く現社會に粉本を求めて敢て醇化を加へず。之を主人公の性格に見るに、感情と理性との發達に比して意志甚しく薄弱、感情の盲動は直ちに理性の反抗を受けて煩悶を極むるに係らず、意志の力を以て之を斷する能はず。而も主我の念盛なるが故に、強ひて自ら辯じ自ら欺いて以て心理の煩悶を壓伏せんとす。斯かる性格は正しく現代の教育ある青年の間に存し、之より惹起せらるゝ種々の事件は正しく現世相の一端を表せり。唯其の描寫、世相の形に偏して其の神に入らず。教育ある青年學生を點出せるも、其の頭腦を支配せる最新思想に及ばざりしが故に、未だ適切に吾人が心胸に響應する可と能はざりき。

述べて茲に至り、顧みて小説壇を通覽すれば、前述二潮流の外、尙ほ蘆

花の『黒潮』と略其の性質を同じうせる尙江の社會小説『火の柱』『良人の自白』あり。鏡花水蔭の如きロマンチックの作風を續くるあり。種々の試験雑多の提唱、皆是暗中の摸索ならざるはなく、混沌として大勢の何れに適歸すべきかを審にする能はざりき。

轉じて劇界に入らんか、不振の狀勢は依然たりと雖、裡に一道の暗流大變遷の前兆を爲すものあり。作劇の方面に在りては著しき活動を見ずと雖、劇場觀客俳優の方面に一新現象を呈しぬ。即ち第一、競うて新小説新脚本を演ずるに至り、第二、頻りに西洋物の翻譯翻案を歓迎するに至り、第三、新俳優は第二期の發展をなし、第四、舊俳優は屢新劇を取りて新俳優と競はんとするに至りき。時正に三十六年なり。

小説の戯曲化は「心の闇」「髯男」「己が罪」を始めとして、「不如歸」「金色夜叉」「高野聖」「畜生腹」「黒潮」「乳姉妹」等、小説として最も讀者に歡迎せられたりし者には相次いで行はれ、皆舞臺に上せられたり。此の現象は純粹なる文學的見地よりは、素より推奨すべきに非ずと雖、社會が舊劇に飽

きて何か新しきを求めんとする過渡期の現象として必しも斥くべきに非ず。之が爲に作劇家を刺撃して好新劇を産出するを得ば、洵に文壇の慶事なり。『沓手鳥孤城落月』以來久しく消息を絶ちし脚本新作の事、三十六年復び新聲を傳へしは、多少此の間の關係に因れりといふべし。松葉が左團次の爲に書きし二三の新作は暫く措くも、鷗外『玉篋兩浦島』(三十六年)及び『日蓮聖人辻說法』(三十七年)を作り、月郊『大鹽平八郎』(三十六年)、『江戸城明渡』(同)を公にし、風葉柳浪等、亦一二の新作あり。『兩浦島』は浦島傳説に新意匠を寓したる二幕の小劇詩にして、上篇は、浦島太郎が龍宮、歡樂の夢さめて仙界平和の空想に飽き、漸く世間の事業人間の活動を懐ふに至りしを叙し、下篇は人界三百年を経たりし後の世、太郎が裔なる後の浦島、活動の事業に向つて努力せる者、仙界三年の歡樂を捨て、歸りし先祖の浦島に邂逅し、兩人手を執つて、「思ふは祖先、行ふは子孫にこそあれ」と謳ふを大筋となす。着想に就いては批評家の見る所一ならずと雖、浦島傳説に一新生命を與へ、露伴の『新浦島』以外、一新發展を加へたるは争

ふべからざる功績なり。全體、歌劇風の劇詩にして、白は總べて七五律を以てし、典雅平正なる雅言體にて成る。されど此の大膽なる創意は、形式の單調科白の緩漫の爲に、不幸にも舞臺上の失敗を免れざりき。『辻說法』は七五調によらず、雅言に拘せざりしが故に、此の點に於て少からぬ利益ありき。中幕物の小篇なれども、鎌倉武士をあしらひて日蓮の英姿を寫し、雅醇森嚴の趣饒し。『大鹽』と『江戸城明渡』とは共に脚本體の史劇にして、題材の選擇表現の技巧、共に『眞田幸村』の比に非ず。唯其の奇抜なる着想と雄大なる結構とに伴ふべき事件の配置、臺詞の練成に缺くる所あるを憾とす。

新作歡迎の氣運は、延いて翻譯翻案の悦ばるゝを致し、世俗迎合を事とする梨園は競うて此の種の劇を取れり。月郊の『闇と光』(キングリア)水蔭の『オセロ』、春曙の『エニスの商人』、『ハムレット』、漣山人の『瑞西義民傳』(キルヘルム・テル)等、は即ち此の要求に應じて出でし者なり。されど、皆唯、輪廓を象りしに過ぎず、素より完全なる翻譯脚本に非ず。

以上各種の新劇は皆彼の新俳優によりて演せられし者にして、曩に舊派の夢幻劇に敗れて屏息したりし新俳優の一團は復び其の面目を起しぬ。此の時に方り、舊劇の大立物として妙技斯道の精粹を蒐め、以て其の末路に大光明を放ちし菊五郎團十郎左團次の三者は、三十六年春以來相次いで幽界に入りぬ。残存の諸優は過去の遺物に據りて新時代の好尚を維ぐべき大手腕ある者に非ず。是に於てか相率ゐて新劇に入り、三十七年大阪の我當上京して芝翫高麗藏等と連合し、始めて『桐一葉』を演じぬ。是れ斯界の一大旋轉機なり。蓋し垂死の舊劇が命脈を今日に維ぎたりしは、主として二三名優の斯壇に有せる惰力と、新派俳優に名手なきとに因る。今や此の惰力を失ふ。舊劇の殘壘危しといふべし。新派の徒が杜撰なる脚本と未熟なる演技とを以てして、尙舊派に優る人氣を得たるは、主に舊劇の世潮に合はざるに由る。されば舊派俳優にして演技を以て世に立たんとせば、勢新劇を取らざるべからず。而も新俳優の跡を追うて小説劇翻案劇を弄ばんは、徒に彼等の後塵を拜するに止まる。茲に至りて我當等が新劇を索めて

『桐一葉』を取りしは獨り彼等の慶のみに非ざるなり。『桐一葉』は製作當時に論せられたりしが如く、脚本として非難無きに非ずと雖、舊型に新想を盛りたる漸進的性質は、過渡期の劇として適切なること素より翻案劇小説劇の比に非ず。況んや上場の成績に徴するに、新悲劇としての特質は、大略發揮せられたるをや。『桐一葉』世に出でて八星霜、今日始めて劇壇刷新の道程に上れり。爾來三十七年には『日蓮聖人遷説法』三十八年には『牧の方』三十九年には『杵手鳥孤城落月』相次いで舊派俳優に演せられ、作者の盛名と教育ある新觀客の同情とによりて、全然舊劇を壓倒するに足る好評を得たり。

三十七年秋久しく教育界に隠れたりし逍遙は再び起つて『新樂劇論』を草し、國劇將來の發展に關して多年研鑽の結果を公にせり。曰く今や國劇刷新の要迫れり。而も刷新の方針は國劇固有の要素の上に立てられざるべからず。翻つて想ふ、國劇は其の能たると歌舞伎たると振事たるとを問はず、悉く樂劇の要素を有す。故に刷新を計らん者は、須らく樂劇たる性質

を需要と好尚とに應じて發展し醇化し、以て二十世紀文明國の藝術たるに相當すべき一種の純樂劇たらしむべし。然らば從來の三種樂劇の中孰れを取りて將來國劇の基礎とすべきか。能劇は畢竟過去の美術にして將來の好尚に適せず。歌舞伎劇亦然り。唯常盤津長唄等の振事劇のみ醇化發展の希望あり。其の作意脚色樂曲科介扮裝等に存する缺點を除くを得ば、庶幾くは進歩せる將來の好尚を維ぐに足らんかと。斯くの如きは本論の緒言に過ぎずと雖、純劇即ち科白劇を起して泰西の糟粕を嘗むるを避け、過去の國民生活を尊重して其の特質の上に立てられたる新樂劇を得んとする識見は、略之を覗ふを得。之を著者が『桐一葉』を公にせし頃の意見と比するに、劇の形式に關しては多大の徑庭あり。蓋し當時は從來の劇を導いて泰西の科白劇に近き者たらしめんとせしも、國劇の精神は樂劇的方面に在りて科白劇的方面に在らざるを悟るに及んで其の態度を一變せるなり。

『新樂劇論』は洵に劇曲刷新の曉鐘にして、曩日の史劇論と共に著者が劇壇の先覺として常に豫言的創意を齎せる二大記念なり。而して『桐一葉』

に相當すべき一新樂劇次いで出でぬ。『新曲浦島』是なり。曲は浦島傳説に材を取り、三幕十二段に分る。序幕は丹後澄江浦に幻影を追うて心空なる浦島、父母に別れて失望自殺せんとするを乙姫に救はれ、歡喜して龍宮に赴く筋、中幕は龍宮三年の悅樂に人間を忘れたりし浦島、明月の夜遙に船歌を聞き、又父母の幻影を見て人間慕はしく、玉匣を形見に乙姫と別れて立歸る筋、詰幕は三百年後の故郷の變遷を見て悔い恨む處、青年の男女來り慰むるあり、匣を開けば、白氣立騰りて浦島忽ち老翁となる。時に天明け旭昇り、老人青年光榮の未來を謳ふといふ筋。全部曲章と振事とにて現はし、補ふに少許の科白を以てし、曲人は歌ひ、優人は舞ひ、樂人は三絃を主として他種々の樂器、西洋のをも併せ用ひ、曲は場合によりて其の種類を異にし、從來の樂曲殆ど總べてを包容す。斯くの如き型式が新樂劇として成功すべきか否かは之を當來の試験に徴し、茲には單に其の内容思想を見んに、『兩浦島』以外更に一新發展をなし、先づ現實と空想との交渉の上に存する過渡時代の煩悶を寫し、進んで現實の上に立つて理想を忘れざ

るは即ち新時代の新理想たるべしとの意を寓したるに似たり。

翌年逍遙は又第二の見本として『新曲赫哉姫』を作しぬ。材を竹取物語の傳説に取り、二幕十五段に分ち、莊重典麗の歌詞を以て仙女上天の一新樂劇を組立てし者にて、之を『浦島』に比すれば、傳説の取扱に於て多少の差あり。『浦島』に在りては一種の新寓意ありて傳説上の發展ありしも、此に在りては傳説其のまゝを繼承して別に新意を加へず。且つ彼には舞踊を本位とせるに此には謠唱を本位とし、彼は俗曲を主腦とせるに此は寧ろ謠曲を根幹となし、多少新樂劇論を修正せるを見る。然れども國劇の特性の上に立てる樂劇たる根本的性質は『浦島』と異なることなし。

劇界の状態は斯くの如く動搖と變遷との渦中に在り。未だ其の間に系統ある活動の一定の針路を指すを見ず。而も其の裡、常に新しき或物を得んとする翹望と努力とあり、混沌の中一道の活氣の未來の光明を豫言するを認む。

* * * * *

以上述ぶるが如く文壇當時の形勢は混沌なり動搖なりき。二十年來の各種の文學は新世紀の大思潮に伴ふ能はずして其の勢力を失ひ、其の間に努力せし先進の諸家亦道を後進に譲りて去りぬ。而も之に代りて新代國民の新思潮に觸るゝ者未だ是あらず。左顧右眄、所有試験と提供とをなして懊惱煩悶の態を極む。獨り其の内容の上のみならず、形式たる文體の上に於ても作家悉く道途に迷へり。試みに小説に見んか、内容を明治世相の寫實に取り、形式を言文一致體の文章に取りしは、疑もなく明治文學史上の一大事實なりしも、今や之に一新面目を與ふるに非ざれば其の發展を望むべからず。之を新體詩に見んか、七五五七の詩律のなせる貢獻は、西詩の想形を移植せる功績と共に、過去詩壇の一大記念たりと雖、之に著しき工夫を加ふるに非ざれば將來の好尚を維ぐに足らず。更に戯曲に見んか、夢幻劇打破の運動は目覺しき限りなりきと雖、無意義なる翻案劇小説劇の外に、發達せる人心に適應する新形式を得るに非ざれば、劇の前途必しも祝すべからず。從來の文人未だ茲に想到せざりしに、今や是等の大問題、端なく

其の意識に上り、乃ち動搖煩悶して暗中摸索す。天か時か。過去文學の大星續々落ちて新陳代謝の機正に迫り、一方に於て外征の大勝國民の自覺と國力の發展とを促し、我が文學は早晩一變せざるべからざる機運に際會しぬ。正に是れ山雨至らんとして風樓に滿つる時なり。

第四期の文學

明治三十八年——同四十一年

第八章 新興文學の由來

第一節 舊文藝破壞の思潮

近時文壇の趨勢を見ん者、何人も其の願想的思索的傾向の著しきに想到すべし。所謂人生問題心靈問題は到る處に論議せられ、學者文學家の此の問題に對する態度著しく痛切嚴肅となれり。世には此の問題の解決に煩悶して自殺せし文學者あり、學生あり。然らざるも心靈上の此の消息に觸るゝ者、多少の懊惱を懷かざるなし。清澤滿之高山樗牛綱島梁川の如きは、正に此の氣運に鞭つて現はれたる好箇の代表者たり。其の他近藤燕處姉崎嘲風等の言説、角田劍南島村抱月等の評論、多く内觀に傾き靜思に富み、進んで心靈の堂奥に入らんとす。三十四年清澤滿之、雜誌『精神界』を刊行し、所謂精神主義を主唱して自己の主觀的充足を説き、更に歩を進めて曰く、宗教は主觀的事實なり、實なるが故に信するに非ず、信するが故に

實なりと。而して教養ある青年佛教徒翕然として之に靡く。同年又高山樗牛『太陽』の論壇に立ちて主觀の權威を説き、信仰の威力を叫びぬ。曰く人生は價值なり、而して價值は我れ自ら造る所なりと。彼れの主張は有名なる「美的生活論」と共に一代青年を動かし、彼等をして手の舞ひ足の踏む所を知らざらしめたり。翌年綱島梁川宗教的眞理を説きて、神の主觀的創造は我が本性必至の要求の然らしむる所なりと唱ふ。其の思想界に對する影響は前者の如く痛烈廣汎ならざりきと雖、爾來『新小説』誌上に連載せる「病問録」は、眞摯なる心靈の叫びを漏して明治の思想史宗教史の上に磨すべからざる足跡を印しぬ。三十七年姉崎嘲風の『復活の曙光』に見えたる神祕論、及び同年發刊の『時代思潮』に見えたる信仰生活の鼓吹、亦同じく此の系統に入るべく、國木田獨歩が作品の上に現したる主張言説亦著しく懷疑思索の色彩を帯べり。

思想界の主觀主義はかくの如くにして旺盛を極めたり。而も其の由て來る所は、洵に從來の客觀主義、啓蒙思潮、科學萬能の思想に對する反動た

らすんばあらず。十九世紀物質的文明の洪波忽として絶東の洵美境を侵し來るや、舊物悉く破れて茲に一新境地を拓き、發して思想界の功利説となり、唯物論となり、無神論となり、福澤翁と加藤博士とを中心とする客觀思潮は恣に斯界を横流せりき。然れども勢窮れば則ち變ず。二十七八年戰役の前後より幾分反動の現象を生じ來りぬ。夫れ人智の精を極むるや。萬象一として明ならざる無きが如しと雖、一步其の眞諦に入りて奥義を探ぐれば、何人かよく眞理の鍵を握り得るものぞ。維新當時の幼稚なる頭腦は、一時其の絢爛の光彩に眩惑して科學萬能を信じたりけんも、今や三十年の修養を積みて從來の思想の餘りに空虚なるに驚きぬ。眞理を疑ひ人智を疑つて深く瞑想思索の境に入り、所謂懷疑の思潮漸く其の芽を萌し來りしもの、自然の徑路なりといふべし。而も懷疑の結果は虚無なり。反動の第一歩は破壊なり。思想界の所有方面に破壊運動起り、功利説を倒し唯物論を破り無神論を排し理論主義科學主義を斥け、所有舊信仰舊道德の權威を奪ひ盡さずんば已まざりき。而も之に代りて一世を指導すべき新思想確立せ

ず、各其の行かん所に行き、趨らん所に趨り、其の間に一定の歸趣を見ること難かりき。唯其の新運動の根柢にはおのづから相通する一道の暗流あり。理論主義に對する實行主義、知力主義に對する情意主義是なり。曩に第五章第一節に述べたりし日本主義の運動（三十一二年）、第六章第四節に述べし文藝上の時代精神論の主張と社會小説宗教小説の推獎、（同年）『哲學雜誌』等の誌上、井上元良諸學者が倫理問題を研究して倫理上宗教の必要を論じたる倫理的宗教の主張（三十二三年）、梶牛嘲風等が獨逸流の煩瑣學風に對する反抗（三十三年）等、皆是れ其の根柢に上掲の潮流の横溢を見ざるなし。清澤高山網島諸家の人生觀宗教觀は、即ち此の系統を辿りて正に到達すべき境地に外ならず。されば其の思想の根柢には主觀的色調を帶ぶると同時に實行的現實的の賦彩を有す。一世を擧げて倫理宗教の問題に熱中し、深く人生問題に立ち入り、進んで自己の問題に逢著し、主觀の權威に想到し、遂に走つて三十七年頃の自稱神佛の出現となり、或は三十五年以來の個人主義の活動となりし者、固より其の所なりと言ふべし。

思想界の此の傾向に附隨して必然的に起る最初の現象は、文藝に於ける主觀主義なり。抒情主義なり。詩人の瞑想は概ね哲學體系の組織とならずして、却て抒情の審美境に入る。當代に於ける文藝の特徴は實に抒情的傾向にてありき。されば曩きに科學主義客觀主義の文藝界に入るや、寫實の風潮斯壇の大勢力となり、『小説神髓』の大旗一たび翻つて小説は忽ち心理學の囚ふる所となり、『柵草紙』の銳鋒一たび閃いて文藝作品は悉く美學の囚ふる所となり、所有文學は科學の規矩を適用せられ、客觀主義の風は創作界を吹き靡けたりしも、今や漸く反動を起し、和歌に在りては『明星』『白百合』の青年歌人の奔放なる抒情歌となり、嘗て客觀描寫を極意とせし『ほととぎす』の俳句漸く主觀趣味を尙ぶに至り、新體詩に在りては叙事の一體遂に發展するを得ずして、泣菫有明林外泡鳴、皆主觀瞑想の抒情的詩調を取り、特に最近の述作に於て神祕空靈の新詩境に突入せるを見る。若し夫れ小説に至りては、二十年來全盛を極めたりし寫實小説漸く凋落して、混沌飄蕩の裡、一道の内省的瞑想的的主觀的情調を帶び、風葉が妖艶なる寫

實の筆漸く惱みて方向一變の途上に在り、秋聲の特色漸く世に認められ、藤村省察の詩風小説に現はれて一味内觀の深きを示し、花袋は可憐なる情緒を描きし往時の作風を捨てて、泰西近代の夫れに近づけり。特に紅葉の死は過去寫實小説の一大段落を劃し、新陳代謝の現象は争ふべからざる當面の事實となれり。

十九世紀科學主義の反動として這般の新思潮が思想界に波瀾を捲起せしは、獨り本邦に特發せる現象に非ずして、實に世界の各隅に遍滿せる大思潮に動かされたる者なりき。三十年來交通の發達、語學の普及、教育の進歩、學術の隆盛、及び國力の發展は、泰西文明との交渉をして比隣よりも容易ならしめ、彼の國の學術文學の輸入益盛にして其の思想感情に觸るゝこと愈密に、其の推移は直ちに本邦思想界文學界に影響するに至れり。されば彼の國に於て輓近科學主義の反動としてニイチエの超人思想ゴルキイの放浪思想マールリンクの神祕思想等の現るゝや、直ちに本邦思想界に影響し、茲に自我發展主義天才主義個人主義神祕主義の思想を醸成するに

至りぬ。三十四年頃勃興したりし論壇の新ロマンチズムは即ち此の風潮の所産なりき。

然れども此の物質的文明に反抗して心靈生活を鼓吹する一道の思潮の本邦文壇に存するは、決して無前の珍事に非ず。夙く二十年代に『女學雜誌』あり『文學界』ありて、文壇の一隅に其の峻峭清新の聲を揚げたりき。特に『文學界』は人生問題の煩悶に關する幾多の言説述作を載せ、所謂世紀末の一種の思潮既に其の間にほの見えたりしなり。北村透谷が世を破り世を壊ち、一切の傳習を滅絶して新生の新光明に浴せんと努力せしが如きは、正に斯界先覺の聲と言ふべく、彼自ら及び藤野湖白堂の悲慘なる最期（二十七年及び二十八年）は、實に時代の犠牲として仆るゝ新人の必至的運命と見つべし。されど透谷等の運動は、時代に先だつこと餘りに遙にして、未だ世人の耳目に入らず。其の一代の思想を動かして社會の表面に現はれ來りしは、實に此の次の運動を以て初めとなす。三十一年詩人晚翠カーライルの『英雄論』を紹介し、其の序に、舊信仰既に廢れて新信仰未だ起ら

ず、靈界嚮導の光明失はれて民心憑依する所を知らずと道破せしより、三十四年樗牛竹風『太陽』『帝國文學』の誌上にニイチェ主義の大旗をかざして八方に馳突するに至り、天下青年の思潮翕然として之に向ひぬ。

樗牛論壇に立ちて既に六年、其の思想の徑路に幾變遷ありきと雖、其の間常に一種の煩悶の閃くあり、人生の理想と現實との扞格に由來する無限の懊惱が片言隻語に現はれて、遂に凡俗世界に對する反抗の聲となりぬ。三十二年近代主義を説き翌年當代の文壇を論せし態度は、正にこの反抗の第一撃なりき。同年ニイチェの訃音傳はり、其の超邁豪放なる個人主義超人主義の思想普く弘まるや、靈界一點の火を點せられて、既に芽ぐみ初めたる自我の觀念炳乎として燿き出でぬ。爾來「文明批評家としての文學者」を論じて時代の文明に對する個人の反抗を説き、「嘲風に與ふる書」を裁して現代文學を非難し、「美的生活論」を唱へて奔放なる本能主義を呼號し、遂に進んで平清盛日蓮上人を讚美して自我主義天才主義を發揮するに至るまで、現代一切の事物を破壊して新しき文明新しき道德新しき文藝を打立

てんとする活動、猛烈にして當るべからざる概ありき。かくて樗牛は一代新思想の指導者として、三十五年世を終るまで健闘の筆を絶たず、千軍を叱咤して陣頭に立つが如き態度を以て、絢爛痛烈の詞章を行ひ、崇高の詩調一脈の靈氣を放つて直ちに人の肺腑を衝き、當代の青年をして髣髴として自己心靈の聲を聞く思あらしめたり。彼れの評論は此の點に於て宛然創作たり。其の理路を辿り其の曲直を剖判すれば忽ち破綻百出せんも、奔放熱烈なる思想筆力直ちに迫つて人を魅するに至つては、洵に詩人の境地創作の領域に入れりと言ふべし。彼れの眞面目は、美學者たるよりも、美術史家たるよりも、批評家たるよりも、むしろ此の方面に在り。

思想界の新傾向の遂に到達すべき個人的自覺は、かくして世に普く、新ロマンチズム、本能主義の稱呼は一代の人心を震ひ撼かしぬ。世に稱して狂飈時代スワムムウインドラフと言ふ。思ふに維新以來從來の倫理宗教に安立して何等求むる所なかりしもの、一朝新なる思索に入るに及んで、忽ち儒佛道德に疑を懐いて心靈の空虚を感じ、新なる充實を憧憬して何等與へらるゝ所なきまゝ、

去つて懷疑破壊の極に趨り、茲に思想界の過渡時代を出現せるに外ならず。而して此の思潮は直ちに文藝界に影響して、前章に説けるが如く、或は晶子の『亂れ髪』となり、或は風葉の『醒めたる女』『涼炎』『沼の女』、秋聲の『春光』、荷風の『地獄の花』『夜の心』、花袋の『重右衛門の最後』、竹風の『洗ひ髪』となり、甚しきは從來往々反道德なりとの非難を蒙れる自然主義的傾向の文藝は、茲に有力なる聲援を得たるものゝ加く、又一種の學理的是認を與へられたるものゝ如く誤解せられ、本能の暴露は即ち時代の精神なりと妄斷せらるゝに至り、遂に趨りて所謂世紀末の病的思想をすら文藝の上に現すに至れり。次節に述ぶべきデカダン傾向即ち是なり。

第二節 海外文學の輸入

吾人は前節に於て我が最近の思想及び文學の特質を擧げて、内省的實行的個人的主觀的の數條を算したり。今や進んで此の特質を帯びて現はれ來りし新興文學を叙せんとするに方り、豫め之が先驅となりし二三の文界の

現象を述べて、其の由來を詳にせざるべからず。而して此の叙述をなさんには、當代の新潮を捲起すに最も有力なる動機となりし海外文學の輸入紹介に就て記す所なかるべからず。

維新以來新文學の勃興を始めとして、文壇の新事象、一に海外文學の影響に出でたることは、本書一卷の説ける所によりて略推知するを得べし。特に前章既に説けるが如く、最近語學の進歩、思想の發展、交通の繁榮は、一層彼此の接觸を密ならしめ、翻譯紹介の流行又往年の比に非ず、第六章第四節に述べし趨勢は益其の歩を進めたり。三十四年以來詩歌小説の翻譯の出づるもの前後相望み、詩人文豪の評傳亦少からず現はれ、プラットー、シェイクスピアの全集すら翻譯し初めらるゝに至りぬ。而して其の間おのづから以前の翻譯界と異なる現象を呈して當代の特色をなせるを見る。異色とは何ぞや。露佛文學を主とする大陸新文學の流行是なり。

第二期並に第三期に於ける泰西文學の中心をなせるものは英獨の文學なりしや論を俟たず。政治小説時代は更にも言はず、逍遙の英文學に於ける、

鷗外の獨文學に於ける、各一時代を劃して其の傾向を代表するの觀あり。特に英語の普及は此の國の文學をして最もよく我が國民に親ましむるに至り、泰西諸國の文學も主として英譯によりて其の面影を窺ひ、翻譯の如きも多くは英譯より重譯せるものに係る。文科大學の外國文學科中英文學科は最も早く設けられ最も多數の學生を有し、早稻田專門學校文科の外國語は即ち英語に止まる。斯くて一般社會に於ける英語の勢力依然として隆盛を極むと雖、最近思潮の變遷の急激なる、從來紹介せられし英國クラシックをば漸次文壇の中心より遠ざからしめぬ。前章詩風一轉の機を叙せる條に示せる如く、最近の文界は又莊重沈靜なる英國クラシックを味ふの餘裕と趣味とを缺き、只管熱烈と痛快とを求めて露佛新文學に赴き、保守的秩序的道德的なる英國古文學に同情すること能はずして、専ら懷疑的破壊的進歩的なる大陸新文學に趨りぬ。特に新ロマンチズムの運動起るや、社會の現狀學界文界の狀勢に不滿を抱く者、相率ひて大陸新文學の破壊的虛無的なるを歓迎し、従つて同じく大陸文學の中にも従前歓迎せられしダンテ、

カルデロン、セルバンテス、ゲーテ、シルレル、ユーゴー、モリエールの如きよりは、寧ろ最近佛國デカダン詩派、象徵詩派、佛國自然派、獨國自然派、露國自然派、那國イブセン、伯國マールテリック、伊國ダンヌンチオ等の小説戯曲を喜ぶに至りぬ。勿論ツルゲネーフ、トルストイの如きは、二葉亭鷗外等によりて夙く二十一年より紹介せられ、ドストエフスキイは魯庵によりて二十六年既に世に知られ、ビエルロチ、ゾラ、モーパッサン、ダンヌンチオ、ゴーゴリ等は上田柳村等によりて三十年前後移植せられきと雖、當時は唯漠然諸國の文學を知るに従ひて輸入紹介するに止まり、未だ民性の相通する所思潮の相應する所を自覺し、自己と同じきものを其の裡に見出でたる熱烈の同情を以て之を鼓吹奨説したるものに非ざりき。就中、二葉亭嵯峨の舍抱一庵、共に露國文學の紹介者を以て知られしも、未だ積極的に新思潮を捲起す活動に加はらざりき。當時の讀者は唯譯文の巧拙を言ひ、譯解の正否を判するのみにして、之に對する態度は猶シェイクスピア、ミルトン乃至、マコーレー、カーライルの譯書に於けるが如く、極

めて超然たる者なりき。然るに新思潮の文壇に入るや、新なる意義を以て魯庵の『罪と罰』を推し、二葉亭の『片戀』『浮草』を薦め、後ればせに讃して吾人の胸奥を動かす者ありと唱説するに至りぬ。

三十四年月郊の『イブセン作社會劇』柳村の『みをつくし』花袋の『西花餘香』以來、三十六年孤蝶の『宿り木』三十七年竹風の『賣國奴』(ズーデルマン)三十八年魯庵の『復活』(トルストイ)柳村の『海潮音』を始め、ワグネルの歌劇、イブセン、ハウプトマン、マールテリックの劇、ズーデルマン、モーパッサン、バルザック、フローベール、ドーデー、ゾラ、ダンヌンチオ、ゴーゴリ、ゴルキー、ツルゲネーフ、メレジコウスキイ、チエホフ、アンドレーエフ、ヒュスマン等の小説、ボードレール、エルレーヌ、マラルメ、エルハールン、モレアス、ローデンバッハ等の詩歌續々我に移植せられ、昇曙夢、瀨沼夏葉等、新進の露國文學研究者亦輩出し、近年特に其の旺盛なるを見る。是等の大陸文學が新興の文學に影響して、詩歌小説戯曲、所有方面に目ざましき變化を遂げしめし實相は、蓋し豫想の外に在り。要

するに本邦の文學は日に月に泰西文學と近接呼應するに至り、彼の地文壇の推移は直ちに來りて我が文界を動かす事、是れ近時斯界に於ける著しき現象なりとす。

第三節 象徴詩の勃興

海外最近文學輸入の大勢は略前述の如し。而して先づ之が直接影響を創作の上に現したるものは新體詩なりき。前章既に説きしが如く、神祕空靈を尙ぶ一派の詩風斯壇一轉の兆を示し、が、三十七八年の交に至りて遂に象徴主義の形を取りて其の新面目を現し來れり。

象徴詩派の作風及び作家の我が文壇に紹介せられしや、近日の事に非ず。『文學界』『帝國文學』夙に海外詩壇の新風を紹介し、特に上田柳村之に勉めたり。吾人は二十九年既にリイル、エルレエス、ボードレエルの名を聞き、三十一年バルナツシヤン、サムボリスト、エルリプリストの名稱を聞き、彼等の詩には、聯想の力、視聽嗅味の官能を交錯する消息のよく現はれた

るを學び得たりき。然れども當時の詩壇は尙搖籃期に屬し、文界一般の幼稚なるとともに、未だ此の詩風の直接影響を受くるに至らず。吾人は唯幽婉微妙奇峭妖艶なる一派の詩風として白眼に看過したりき。爾來十年、詩壇は日に新しきものを追ひ、既にテニズン、ラルツヨルス、バインス、キーツを棄てて、ロセツチ、スキンバーンに就き、ラファエル前派の詩風一時文壇の流行なりしに、今や轉じて、デカダン、サムボリストの名喧傳せられ、技巧過重官能過重の詩風世にもてはやさるゝに至りぬ。

三十八年、有明『春鳥集』を公にし、前年來此の新詩流を汲みて作れる所謂象徴詩を編み、之に序して其の詩見を表白せり。曰く自然と我とは一なり、自然の呼吸を我に感じ我の影を自然に見る。既に詩想に此の新意あらば、其の表現に新なる方式を要するはおのづからなる勢なり。かの音節格調措辭造語の新意に適はんことを求むるとともに、邦語の制約を寛うして近代の幽致を寓せ易からしめんとするは、洵に已み難きに出づ。視聽の官能は常に鮮かに常に生意を保たざるべからず。視聽は又相交錯して近代

人の情念に雜り、こゝに銀光の音あり、こゝに嘲曉の色あり。音に心眼と心耳とあるのみならず、われは靈の香味をも嗅味の官能に感ずることあり。嗅味を稱して卑官といふは、官能の痛切を知らざるものなりと。斯くして「日のおちば」に詩人の信念を日月の光彩に比し、「朝なり」に白壁を吾が胸として壁に映せる魚河岸の景を敘し、「五月鶯」に鶯と朝戸の響とを藉りて戀情の發作と其の消失とを抒べ、「わが思ひ」に夏の炎熱を人の心に比べ、其の他「君にさゝぐ」「みなとあり」「家根の草」等、皆感覺印象交錯の技巧を弄して何等かの暗示を寓せんとするに似たり。然れども彼れの創作は、彼れの詩見の實現と見んには尙渾成の域に遠く、所謂サムボリストの模倣としては象徴的的技巧未だ完からず。發達の初期に於ける試験的述作としては蓋し已むを得ざるに出づと雖、晦澁朦朧の謗は遂に免る能はざりき。

遮莫有明の詩觀と製作とは、疑もなく佛國サムボリストの紹述模倣なり。利弊共に繼承せる固より其の所なり。夫れ佛國サムボリストのバルナッシャ
ン詩社を壓倒して文壇に地歩を占むるや、時人は彼のボードレール一派の

詩人を稱してデカダンといへり。デカダンとは衰退の義なり。神經質の謂ひなり。世紀末の人心を浸蝕せる神祕の思潮、主我の傾向、現實の風尚、發して知力の減退となり、神經の衰弱となり、情緒獨り盛にして官能過敏に陥る。其の結果思想と感覺との交錯となり、感情と官能印象との交錯となり、若しくは官能印象相互の交錯となり、こゝに灰色の思想あり、こゝに赤色の詩歌あり。さては光る音、響く色、匂ふ聲、心靈の味も舌頭に感せらるゝに至る。以爲へらくかゝる状態の下に外界の事物に遇して、茲に催起せられたる一種縹渺たる情緒を寫し取れるもの即ち詩なり。詩歌に重んずる所は、思想に非ずしてこの情緒なりと。かゝる幽婉微妙なる情緒を傳へんには、おのづから從來に異なる新技巧の發達なかるべからず。即ち官能的手段によりて讀者の神經をして或る情緒を起さざるを得ざらしめ、この情緒の中におのづから作者の傳へんとする心的状態を捕捉するを得しむるは、彼等の新技巧なり。故に詩歌の對象を直接描出することなくして常に象徴の技巧を用ふ。思へらく對象を明にするは詩の享樂の四分の三を

失ふなり。詩の享樂は其の暗示を解くの快なりと。彼等が只管形式の彫琢に勉めて、隱言微辭、縹渺たる韻致あらんことに腐心するも之が爲なり。此の作風の佛國に起り獨逸に入るや、墮落頹廢を以て之を斥けたる批評家少からず。曰く神經衰弱して主我の念のみ盛に、現實の官能に泥みて想像力思考力なく、徒に神祕を銜ひて朦朧含糊に陥る。要するに官能過重技巧遍重の病的狂的の現象なりと。思ふに其の表現せんとする詩人の心的状態と、之を表現するに用ひたる詩的技巧とが上述の如くならば、其の表現の形式に卓越群を抜くものなくんば、晦澁朦朧、同臭味の小範圍の人にのみ解せらるゝ狂的詩歌なりとの非難を招かんこと異むに足らず。『春鳥集』の作者等は即ち此の詩風を移植したるものなれば、所有特色と缺點とは共に其の粉本によりて窺ふを得べし。特に晦澁難解の謗りを聞くこと多かりしは、其の本源の既に此の傾向を帯べるに加へて、象徴的技巧の未だ至らざるものありしによる。

此の詩風は有明に至りて意識的に本邦詩界に移されたり。然れども有明

の詩見と創作とは、柳村の紹介と翻譯に負ふ所少からず。柳村近年此の新詩派を推奨すると共に、『明星』『藝苑』等の諸雜誌に其の名篇を譯載し、當時の詩界をして佛國象徴詩の一斑を髣髴せしめたり。三十八年末に出せる譯詩集『海潮音』を見るに、ボードレエル、エルレエス、ローデンバッハ、エルハアレン、レニエ、モレアス、マラルメを始め、新詩派の譯詩最も多きに居る。同年又片山孤村『帝國文學』に獨逸象徴派を紹介し、角田浩々『讀賣』に之を論述し、此の詩風は漸く文壇に勢力を張り來り、翌年公にせられたる詩集『あやめ草』の諸詩人は、概ね此の傾向を帯び、曩に暗中摸索唯漠然と神祕を戀ひ空靈を慕ひ、求めて得ざる動搖の聲を揚げたりし人々も、茲に至りて稍明かなる道途を見るを得、聊か之に安住して向ふ所を定めぬ。こゝに於てか詩界は、從來模倣したりし『暮笛集』の詩風を棄て、一轉して『春鳥集』の新傾向に就き、泣菫の如きも、從來の古典的情緒的作風より、漸く變じて象徴派的色彩を帯ぶるに至れり。之を當時の詩集『白羊宮』(三十九年)に徴するに、自然物特に動植物に感興を寓せて、其の中

おのづから人間生活の趣致を象徴せんとし、色香味觸の官能印象を其の上に見出でて、各の特色を感覺的に表現せんとする傾向著しきものあり、所謂自然の中に我を感じ我の中に自然を見んとする象徴詩派の面影を存す。「零餘子」「日ざかり」の如きは蓋し此の方面の代表的作品なるべし。

かゝる間に有明が象徴的技巧の完からざるもの漸く熟し來り、嘗てデカダン詩派の新彩に酔うて、事を見景を捕へては、直ちに何等かの象徴となさんと試み、或は事物に對して起せる情緒興趣を如何に象徴すべきかの問題にのみ苦心し、其の結果象徴と其の暗示せんとする對象との渾融を失ひたる缺點は漸く脱せられ、人の如く呼吸し痛苦する自然を藉りて人生をシムボライズする技巧は著しく進めり。此の間の消息は最近の詩集『有明集』（四十一年）に於て略窺ふを得べし。かくて此の潮流は青年詩人の間に汪洋し、『明星』の作者多くは日常卑近の事物に實際生活の意義を暗示せんとし、或は銀行工廠を歌ひ、或は試験場鐵工場を賦し、或は機關車川蒸汽を詠じ、總べて象徴的技巧の應用に苦心せり。

以上述ぶる如く我が象徴詩は實に佛國デカダン派の模倣に起り、新を追うて一轉化を試みんとせる時流に乗せるものに過ぎずと雖、又是れ當時思想界文藝界一般に互れる世紀末の大思潮が、冥々の中、斯界にも其の波を揚げたるに外ならず。其の神祕的趣致といひ、主我的傾向といひ、官能的特色といひ、現實的風尚といひ、擧げ來れば一として第一節に述べし作風ならざるはなし。

第四節 自然派小説の源流

曩に時代精神論起り、實世間に切實に觸れたる作品を要求する聲の盛なるや、一方に於て政治小説家庭小説の起ると共に、他方に於ては從來硯友社一流の寫實小説も、亦著しく其の風采を變じたり。次に梶牛等近代主義の文學を説き海外最近文學の輸入連りなるや、小説壇の新傾向は茲に新興自然主義の形を取りて現れ來りぬ。『初姿』（三十三年）以來作毎に寫實小説を標榜せる天外は、其の作の卷頭に序して曰く、「自然は善でもなく悪でも

ない。美でもなく醜でもない。小説亦想界の自然である。善惡美醜の孰れに對しても、敘すべし敘すべからずと羈絆せらるゝ理由はない。唯讀者をして、其の官能が自然界の現象に感觸する如く、作中の現象を明瞭に空想し得しむれば足る。詩人は唯其の空想したる者を在りのまゝに寫すべきのみで、讀者の感動すると否とは其の關する所でない。詩人は描寫に臨んで其の間に一毫の私を加へてはならぬ」と。言ふ所描寫の態度に止まり、其の内容に及ばずと雖、主張の存する所を見るに、新興自然主義の一面を捉へたるに近し。

然れども天外の作品はゾラ一流の科學的實驗小説なり。心理の描寫に加ふるに生理の描寫を以てし、或は遺傳の説境遇の論に依り、或は酒毒浸染生存競争の理法を取り、科學的研究を以て性格事件の發展を辿らんとす。されば其の態度は頗る十九世紀科學萬能の思潮に順じ、最近の主觀的自我的傾向と相容れざるの觀あり。三十六年の『魔風戀風』、三十九年の『コプシ』、共に一時青年讀者間に喧傳せりきと雖、深く其の内容を検する者、當

代思想界を覆ふ特殊の暗流を其の中に見ること能はず。特に『コプシ』の如きは、唯かの主人公の血管を環れる強烈なる遺傳の勢力が、不知不識の間に有爲の青年が向上努力の意志を侵蝕し、遂に彼をして力爭煩悶の後甘んじて之が犠牲たらしむるに至りし徑路を描きしに止まり、長篇全卷遺傳説を祖述せんが爲に作られたるかと疑はる。されば天外の作は一代文運に對する關係甚だ深からず。唯其の主張に於て、從來の字烹句練文辭を以て讀者の涙を絞らんとする作風を排し、自己の想像の最も自然なる描寫を唱説せるの一事は、新興文學の源流を探るに於て看過すべからざる事象なるべし。

若し夫れ作の内容に立入り、露佛新文學の影響を具現したる者を求むべくんば、蓋し風葉の『青春』を推すべし。風葉は固と時代思潮の推移に鋭敏なる感受性を有する作家にして、先きに新ロマンチズムの運動起ると共に、『醒たる女』『涼炎』を出せしが、爾來露國小説家の新作風を究め、三十六年『へそ日記』翌年『未成年』をものしてツルゲネーフの翻案を試み、

三十八年遂に『ルーヂン』に暗示を得たりといへる大作『青春』を草しぬ。作者は主人公をして時代の病弊に侵されたる青年を代表せしめ、知力徒に進みて意力之に伴はず、感情旺盛なれども移り易く醒め易く、而も主我の念強烈にして時には冷酷なる行動を取ることある一性格を描いて委曲を盡し、天外が唯事象の表面をさながらに描寫せんと努めしに反し、現代思潮の内面に突入して其の缺陷を剔抉せんと試みたり。然れども唯時代青年の弱點を擧ぐるに急にして、未だ現代の如き時勢に生れ現社會の如き境地に育てられたる青年が、不知不識かくの如き性格を作りかくの如き缺陷に墮せざるを得ざる消息を描寫するに及ばざりき。時代の背景を髣髴せしめ、此の背景の中に人と爲りたる青年が悲惨なる犠牲者となり行く真相を躍如たらしむるが如きは遂に之に窺はれず。爲に讀者をして單に斯かる性格の人を深刻に描寫せる寫實派の作品と相距ること遠からざるを感せしむ。特に作者獨得の艶麗なる筆致は、興味中心主義の作品に於ける技巧の精粹を盡くして、往々此の新性格の描寫と相乖離せんとする傾なきに非ず。要す

るに作者は現代生活の内面を知ること明なりと雖、其の中に没頭して之に呼吸し之に感觸し、斯くして得たる自家の主觀を描出する新態度に出づる能はざりしなり。此の點に於て『青春』は正しく新舊兩作風の旋轉軸に在る者といふべし。

斯かる間に露佛新文學を研究して深く其の趣味を身に體したる結果、意識的に舊來の態度を棄てて新作風に就かんとする作家あり。花袋是なり。曩にニイチエ文壇に知られ自我發展主義の唱道せらるゝや、花袋は從來のセンチメンタリズムの作風を棄てて『重右衛門の最後』(三十五年)をものしぬ。主人公及び之に配せられたる一少女は我が文學に珍しき性格を帶び、特に少女は野獸の如き自然兒にして、其の主人公に對する關係などゾーデルマンの『猫橋』を想起せしむ。次いで翌年短篇『女教師』を出し、が、是亦ハウプトマンの『アインザーメメンシエン』を模して孤獨寂寥の時代病を描けり。爾來花袋の態度一變し、三十七年「露骨なる描寫」と題して描寫の技巧を論じ、十九世紀後半の泰西新文學の技巧は、從來の修飾誇張を

破壊して偏に露骨自然を尙び、形式の彫琢を斥けて直ちに時代の内面生活の眞を描出するに力むと述べ、自ら之を本邦文壇に試みんと努めぬ。

然れども一般文壇は未だ此の新運動の意義を解せず。未だ其の價値を認めず。新ロマンチズムの大なる破壊運動の後を承けたる我が評論界は、依然として混沌の裡各其の道途に迷へり。此の時に方り未曾有の新彩を帯びたる一作品の出づるあり、之を動機として所謂自然主義の語は先きに第六章第四節に述べし者とは全然別種の意義を以て唱道せらるゝに至りぬ。三十九年春、藤村は長篇『破戒』を出して世に問へり。『破戒』は舞臺を信州に取り、特殊階級として穢多を排斥する舊思想の強烈なる状態を描き、其の種族に生れたる主人公が、先輩の激勵理知の發達よりして、自己の素姓を恥とせざる信念を有ちながら、惡辣なる社會の壓迫に堪へず、痛苦煩悶、亡父の戒を破つて、匿し來りし素姓を告白するに至るといふ一種の新しき個人の哀愁を寫し出でし小説にして、之を行ふに理路説明の主觀的筆致を以てせずして、力めて客觀的敘述の態度に出で、其の文辭も精練周到

を極めながら尙天外風葉の濃艶誇張を避けたり。げにや個人對社會の衝突は小説の題材としては夙に陳套に屬すと雖、『破戒』に現はれたるは別に新味の掬すべきありて、深く人生の嚴肅なる方面に著想し、痛切なる生活問題に觸れたり。夫れ從來の小説に於ける個人對社會の衝突は、多くは戀愛中心の現象にして、主人公は生活上の所有問題に關係を有せざる觀ありしも、此の小説に於ては即ち生活中心の事件にして、主人公は社會に生きんとする個人の欲求を懷いて、茲に湧出づる悲哀を名殘なく味へる者なり。換言すれば、新しき自覺に伴ふ生活の願望と之を毀けんとする社會の舊俗との衝突、及び俗習を破らんとする知識と舊慣に従つて一時を安うせんとする感情との争闘、此の内外二面の痛苦よりして癒すべからざる創痍を負へる者なり。『破戒』の新味は即ち此の點に存す。よし其の描寫の技巧尙精美に過ぎて所謂露骨なる描寫に遠く、作爲の跡往々露れて未だ偽らざる人生の表白と稱するを得ずと雖、泰西近代自然派の面影を傳へて新生命を文壇に寄與せる功没すべからず。蓋し藤村の泰西文學を翫賞するや久し。先

年の作『綠葉集』中の短篇、多少露獨近代の韻致を移せり。而も其の傾向の明瞭なる色彩を以て一世を動かしたるは實に『破戒』に始まる。

『破戒』出でて斯壇の形勢一變し、或は此の作を以て泰西自然派の問題的作品に近しと稱し、或は郷土藝術の趣を具ふと唱へ、或は無戀愛小説と名づけ、多くは其の新彩を謳歌し、延いて從來顧みられざりし一作家國木田獨歩の價值をも認むるに至りぬ。獨歩は決して新進作家に非ず、前期夙に新體詩家として知られ、『國民の友』『國民新聞』に短篇を草し、既に三十四年『武藏野』三十八年『獨歩集』を公にせり。然れども當時天外風葉の寫實小説、蘆花春葉の家庭小説の流行せし文壇には、何等の注意を惹かさざりき。然るに三十九年短篇集『運命』を出すや、俄然評壇の賞讃を得、忽ち自然派の大家を以て目せられたり。蓋し獨歩の作は當時一般の作品に比して著しき特色に富めり。一道の新彩を有せり。彼れの小説は世相の寫實に非ずして問題の解釋なり。情の幾微を描くに非ずして智の煩悶を描くなり。かの戀愛を生命とする所謂小説的人物を寫すに非ずして、痛切なる生活問

題に觸れんとするなり。興味に富める人生を描くに非ずして敗れたる人生の悲哀を描くなり。總べて因襲的古典的思想に反抗して率直に人生の眞を暴露せんとす。思へらく從來の作、西鶴近松にせよ、紅葉露伴にせよ、人を人として描くのみにて、之が大自然と相繋る所に觀及べる者なし。偉大なる自然の壓迫にをのゝく人間を見得るに非ずば、其の作や空論に終らんと。乃ちヲルヅヲルスに赴きツルゲネーフに參し、一種の自然觀運命觀を形作りて之を短篇に披瀝せり。「空知川の邊」の如きは正に其の標本たるべし。「正直者」等に肉の力の壓迫を寫せるも、即ち人間の内部に存する自然力を見たるに外ならず。而して其の敘述は露骨直截、其の辭は素朴簡明、直ちに思想の骨髓に透徹す。此の新味や實に『破戒』に存する其れと一道相通する者あり。特に自然の描寫往々神に入り、人生と渾融默會する所亦『破戒』と同じく、地方色天然趣味を重んずる當代の新要求に投合せり。要するに從來の小説と異なるは、嚴肅なる人生の眞實を觀照して内省考察をなし、其の結果を自由に大膽に敘述せる點に在り。然り、此の特色は『武

藏野』の當時より既に存し、爾來今日に至るまで未だ嘗て其の態度を變せず。會、文壇の潮流盤旋して恰も暗合默契する所あり、作者をして忽ち名をなさしめたり。

思ふに獨歩の作品は、哲理を説くに小説の形を以てせる者、問題に對する感想を殺するに小説の結構を藉りし者、人の情感に訴ふるに非ずして理知に訴ふる者、之を文藝の立場より見て尙夥多の缺陷を有す。彼は思想の文人理知の詩人なり、技巧の詩人妙筆の作家に非ず。彼自らの言によりて見るも、彼は世人の稱する如き自然派の小説家に非ず。唯其の性格の然らしむる所、文界時流の如何に顧慮することなく、胸臆を衝き來る人間生活の嚴肅なる事象に對し、僞らざる自己を暴露する態度、及びアルヅアルスに骨を得て所有修飾を棄却せる簡勁素朴の文章が、會、自然派と呼吸相通ふ所ありしなり。所詮彼れの自然主義は彼自らの人格より來れる者、學んで得たるに非ず。翌年又『濤聲』を刊して、一層平淡なる描寫を以て一層淺近なる事象に托せる人生の特殊相を發揮せり。

三十四年來起り初めたる文壇の新運動は、泰西新文學の輸入と相縁りて小説界に入り、遂に上述の如き革新を成しぬ。顧みて之を過去の小説に比較すれば、其の差實に鮮少に非ず。先に樗牛が文藝中心の主義を以て社會の所有事象を論議するや、文藝をして哲學的基礎の上に立たしめんと努め、一方に於て哲學者の視聽を文學に集め、他方に於て文學者を鞭つて哲學的評論を容るゝに足るべき意義内容を有する小説を作らしめんと力めぬ。爾來逍遙紅葉時代に尙多少殘存せりし戯作の臭味を擺脫するを得、描寫の對象從來と同一なるものにて、著想の上に一種の哲學的歸趣を示すに至りぬ。従つて以前は情緒偏重の傾ありて殉情の行爲に厚き同情を表せしに反し、今は著しく理知の分子加はり、同じく戀愛を描くにも單純なる情熱のみの行動の如きは興味を惹かずなり、生活問題など理知によりて起る苦悶を加ふること少からず。其の代りに自我の念獨り強烈となり、犠牲の念日に衰頽し、自殺情死の如き悲劇は漸く減退しぬ。又從來小説の主人公は多く無教育にして、其の活動の舞臺は主として下層社會若しくは遊里狹斜の

巷なりしが、今は人情活動の主體を比較的教養ある男女に取れる者多く、従つて舞臺は移りて上流中流の家庭又は社交界に赴き、過去の社會組織に在りては性情の自由なる活動を見難かりし上流社會教養ある社會にも、今は至る所に意味深き複雑なる人情の種々相を現するに至れる近年世態の變遷を其の儘に具現せり。且つ従前に在りては、新小説家は概ね青年にして、讀者評家も亦青年なりしも、今は彼等既に壯年となりしかば、往時の如き年少男女の夢の如き戀愛談に満足する能はず。後進年少の作家讀者も亦思想の進歩に連れて意義ある作物を要求するに至り、茲に所謂中年の悲哀を描ける者、壯年の主我的觀念を寫せる者を生じぬ。

第五節 俳諧派小説の出現

三十八年の初、文壇は新なる作家を小説界に見出でて、いたく其の類例なき新彩に驚かされぬ。夏目漱石は從來『ほととぎす』派の俳人として、若しくは單に英文學者として知られたりしが、此の年「倫敦塔」を『帝國文

學』に、「我輩は猫である」を『ほととぎす』に出し、續いて數篇の小説を公にするや、世人は其の俳諧趣味の汪溢せる新作風を見て、俄に之を推重し、即ち斯かる作風を導ける源泉を探りて俳人等の寫生文に想到し、時恰も虚子四方太等の『ほととぎす』誌上の寫生文が多少世の注目を惹けるに際しければ、寫生文の名忽ち文壇に重要な意義を有するに至れり。されば今漱石が作品を敍するに方りては、勢之が傳統を尋ねて寫生文發達の跡を辿らざるへからず。

三十二年子規既に俳句革新の業を終るや、從來俳句に用ひたる客觀寫生的手法を散文の上に試み、名づけて寫生文と稱し、『ほととぎす』誌上主張と作品とを掲げて、俳人の間に之が研究を促しぬ。思へらく藝術の生命は外界事象に對して起せる感情を偽る事なく描寫詠出するに在りと。彼は此の藝術觀を以て新俳句を試み、新和歌を試み、時には小説をもものし、繪畫を論じ、進んで寫生文を起しぬ。されば當時の所謂寫生文は、猶其の俳句の如く、客觀的態度を以て自然人事の相を捕捉敍寫し、其の間に作者の私

意を加へざらんとする者、言はゞ自然人事のスケッチにして、其の名稱の如きも繪畫に於ける術語を藉り來りしなりき。故に描寫の對象は客觀の事物をありのまゝに捉へ來れるものにして、従つて其の間に意義あり歸趣あるを要とすることなし。特に當時は尙同人間の研究習作中に屬し、『寒玉集』『寫生文集』出でしも、文壇に著しき反響を見ざりき。されば『寫生文集』中「倫敦消息」を載せたる漱石の如き、おのづから此の系統に出で、筆力後年に劣ることなきに係らず、未だ其の存在を認められざりき。然るに漱石が『猫』を出して文壇を驚かせしに方りて、他の虚子四方太鼠骨等、亦文壇大勢の影響を受けて多少作風に新味を加へ、其の技巧に著しき進歩を示し、時恰も天外等が客觀寫實の主張あり、續いて自然派の主張の一部として描寫の眞實自然ならんことを鼓吹するに際しければ、其の間一味相通する所あり、從來文壇の一隅に伏在せりし寫生文俄に其の中心に紹介せられたり。三十九年文集『帆立貝』の出でしは正に此の時とす。

此の時に方り、寫生文の作家も、觀照の眼を人間生活其の物の上に開き、

其の描寫の手法を用ひて一篇の小説を作成せんと試みるに至り、内には漱石に粉本を得、外には文界新潮の眞實なる描寫を要求する聲に刺撃を得、茲に寫生文の上に立ち俳諧趣味を帶べる一種の小説を生み成せり。同年より翌年に互り、虚子を始めとして伊藤左千夫、鈴木三重吉、寺田寅彦等が『ほととぎす』の上に試みたる者、佐藤紅緑が初作『行火』等、即ち是なり。世に稱して俳諧派の小説と言ふ。而して是等作家の巨頭として夥多の追隨者を出し、文壇の中心に至大の感動を惹起せしものは、言ふまでもなく漱石其人なり。

漱石既に『倫敦塔』『我輩は猫である』を出し、續いて『幻影の盾』『薙露行』『趣味の遺傳』『坊ちやん』『草枕』等を草し、三十九年『漾虚集』四十年『鶉籠』の二集を結びて世に問へり。其の一作毎に生面を開展し來る作者の才筆は、根柢ある學殖と先例なき風格と相俟つて騷壇注視の焦點となり、期年ならずして居然たる大勢力となりぬ。げに漱石の面目は多様なり複雑なり。單純なる概括論を以て一刷毛に抹し去ること能はずと雖、其の間お

のづから三様の異色を分ち得べし。『猫』『坊ちやん』に奇警なる觀察、銳利なる諷刺、氣品ある滑稽を具へたる英國趣味江戸趣味の筆致を窺ふべく、『倫敦塔』『幻影の盾』『琴の空音』『薙露行』『趣味の遺傳』等に、富瞻なる想像の翼を張つて空靈神祕の域に翔り、人をして幽玄沈痛の傳奇界に遊ばしむる超現實的技巧を見るべく、『薙露行』『一夜』『草枕』等には、即ち縹渺たる一種の美感を讀者に起さしめ、暫く人生を忘れて或は典雅なる或は洒脫なる詩境に神往せしめんとする俳諧的態度の作風を認むべきなり。

『我輩は猫である』は、中學教師苦沙彌先生の飼猫が、先生を中心として其の周圍に存する種々の人物、及び彼等が演ずる雑多の事件に對し、自己の觀察を物語るといふ脚色の下に、作者自らの感懷諷刺を披瀝せる者にして、從て事件の發展人物の性格等に關しては、何等の統一せる趣向なく、言はゞ小説に非ず寫生文にもあらぬ一種珍奇なる敘述文なり。而も動物の説話に假托して諷刺の文を行ふ一種の様式は決して漱石の獨創に非ず。明治文壇に於ても、既に二十年代、逍遙が一寓意譚に此の結構を見たりき。

然れども此の様式を活用して其の風味を十分に發揮し、且つ其の諷刺諧謔に清新卓越なる者あるは『猫』に於て始めて之を見る。夫れ滑稽諷刺の作の本邦文壇に存するや久し。明治に入りても、前に新二得知あり、後に綠雨あり、各一方の雄なりしかども、畢竟前代戯作者流の繼承に過ぎず。漱石が日常偶發の事件に對して觀察を下すや、奇警銳利、骨を刺し髓を扶らずんば已まざると同時に、飄逸冲澹にして餘裕綽々たる者あり、洒脫にして諧謔を極むると同時に、沈痛にして一種の悲哀を帶ぶる者あり。泰西ユーモアの風骨を得て氣品高尚に、理路を説いて剖析細に入り、實境を寫して揮灑微を穿ち、内容手法共に全然戯作の流風を擺脫せり。『坊ちやん』は『猫』と異なり、一の纏りたる小説的趣向を凝し、江戸趣味の眼を以て地方の人物事象を觀察したる者なれども、根ざす所の作風筆致は即ち『猫』の類なり。されば是等の作の根柢に働く者は言ふまでもなく理知にして、一切の事件に臨みて冷靜に觀察し、周密に説明し、事相の眞核に觸れて理知に満足を與へずんば已まず。從つて其の文章自由達意を旨とし、思想の流

露する所に放任せる傾あり。

翻つて『幻影の盾』『薙露行』等の傳奇的作品を見るに、雄勁簡淨の致を極め、理路の委曲心狀の詳細を述べ盡すことなくして、直ちに感興の神髓を表白し來る。故に華麗豊艶の文辭を弄しながら、些の弛廢なく、莊重幽玄の詞章を作りながら、些の冗漫なく、句々讀者の胸奥を衝いて強烈なる印象を留め、從來動もすれば緩漫贅長の謗を得たる明治の口語文の爲に萬丈の光焰を揚げ、斯道の一生面を開きたり。作者が近英の文豪スチブソンに私淑せりと稱する者、蓋し此の文體を生み出すに至れる由來の久しきを知るべし。獨り文致に於て前條の作物と異なるのみならず、描寫の對象に於ても、彼の現實界なるに對して此は超現實界なり、ロマンチックの空想界なり。然り、神祕空靈の想像を逞うせりと雖、露伴の如く露骨なる理窟に墮せず、鏡花の如く無内容の幻怪に陥らず。思ふに犀利なる洞察の眼を以て人生を觀る、諷刺の中に悲哀あり、諧謔の裡に痛苦あるは洵に已むを得ざる所、而も暫く此の傷むべき人生の煩を避けて神往すべき別天地を覓め、

即ち思を遠くロマンチックの空想界に走するに至るは、是亦然るべき徑路ならずや。此の條に掲げし作品は正に是なり。

次に第三類の諸作も略右と同一なる人生觀の態度より出でし者にして、『薙露行』の一半面は唯美しき感じを讀者に起さしむるに在るが如く、『一夜』は唯一種の情調を催起すれば足るなり。『草枕』亦然り。就中『草枕』は一畫家の旅行記に托して、かの自然の風光を觀する態度を以て人間を見んとする寫生文的描寫を試みたる者、所謂非人情[○]的觀察點より人事自然を寫して成功に近く、作者が筆端に磅礴せしめんと努めし一種の美しき情調は遺憾なく表はれたり。其の剖析的筆致の微を穿ち細に入るは、『猫』『趣味の遺傳』に似たりと雖、談理窮らんとする時一轉して敘景の筆を著け、進んで抒情に移り又還りて談理に入る所、詩趣饒かに神韻浮動し、誠に渾融の作に近し。作者自ら曰く、斯かる作品は東西兩洋に其の類例を見ずと。然り、此の作の獨創なるは、根柢に横はる人生觀照の態度の特異なる點に存す。曩きに一たび傷むべき人生の煩を避けて傳奇的空想界に遊びし者、今は方

向を轉じて俳諧的態度に出で、一切の現實を超脱して傍觀の地位に立ち、悲痛に富める人生に没頭せずして靜かに之を薄布の彼方に押し隠す。人事の眞相に突入して作者も共に泣くは普通の態度なり。斯くては可惜感興を殺ぐべし。思へらく、人生は退屈なり。執拗なり。觸れては例の人情に墮す。須く人情の外に立ちて美しき感興の中に生くべしと。故に此の類の作にはおのづから餘裕綽々として迫らざる趣あり。

斯くの如く漱石の作品には三様の異色を認むと雖、其の間相通する一道の光彩あり。到る所常識の影動き、哲理の閃きを見し、倫理の色を宿し、人生を傷むと雖極端に走りて虚無自暴に陥ることなく、諷刺辛辣を極むと雖執拗惡烈の弊に入らず。諧謔洒脱を盡すと雖蕩逸閑放に流るゝことなく、枝葉時に非常識に入り感情に榮え沒道德に繁らんとすれども、所詮常識の幹に據り智慧の土に立ち倫理の根に返る。一言にして之を覆へば大陸的特質に對する健全明快の英吉利的特質、西洋趣味に對する寡欲冲澹の東洋趣味、隨所に流露して獨得の光を放てり。されば佛國新派の流を汲める者の

如き神經質的デカダンの世紀末的傾向、若しくは露國近代文學を學べる者の如き自棄的虚無的蕩逸的傾向は終に之を免むること能はず。自然派象徵派の作品を讀み終りて之に移れば、宛然別乾坤の觀あり。而して此の特徴は畢竟作者自身の人格より來る。作者思へらく進歩したる文藝は個性の偽らざる表現なりと。此の點に於て作者主觀の嚴肅なる表白を旨とする新興文學一般の流風と呼吸相通ふこと切なるを見るべし。

第六節 脚本界の新聲

脚本演劇の事を論ずるに方りて常に遭遇する一箇の困難あり。讀むべき文學としての脚本の發達を尋ぬる事と、劇場に實演せらるゝ脚本の推移を觀察する事と、常に同一歩調に出づる能はざること是なり。劇場の實演は觀客其の他種々實社會と直接の關係を有して、必しも文藝の理想に順應する能はず。其の進歩も發展も多くは實社會の進退措置に俟たざるべからず。故に新に現はるゝ脚本に在りても、上場せんが爲に書き卸したる者と文藝

の理想の上に立ちて作せる者とは、等しなみに論ずべからざるに似たり。然れども前者必しも文藝の理想を無視すること難く、後者亦全く讀み物たるを以て甘するに非ざれば、兩者を別ち論ずるの複雑多岐に陥るを避け、茲には唯文學の發達を大觀するの見地に立ちて新作の脚本を論じ、上場せると否との如きは暫く措いて問はざるべし。

先づ當時劇界全般の大勢を觀るに、かの團菊諸優の歿後、舊劇は精神的死滅を遂げ、而も之に代るべき新劇未だ起らず、新派俳優新演劇といふ者も、専ら小説物翻案物の上場に腐心するに止まり、俳優興行主の頭腦趣味素養、依然として舊態に止まり、未だ新興思潮に順應すべき新藝術を見ざりき。文學の新潮に對し絶大の影響を與へし泰西新文學も、此の社會に入りては反響極めて少く、斯界最新の趨勢を代表する翻案物も、僅に古典的なるシエークスピアを模するのみにて、偶、ドレーの『サッフオ』、ペリコの『フランチェスカ』、マートルリンクの『モンナワナ』、サルドーの『祖國』等の新劇を取る者ありと雖、其は唯盲目的に西洋物を取りしに止まり、意識

的に新趣味を移植せんと試みしに非ず。三十九年以來大劇場設立の運動起り、俳優養成の計畫成り、女優輩出の機運を作りしも、是等は寧ろ實社會の要求又は見識なき興行者の計畫に出で、未だ純粹なる文藝上の見地より新思潮の必然の所産として現はれしに非ざりき。

由來脚本は凡ての文學の中最も後れたり。而して演劇は脚本よりも一層後れたり。『桐一葉』の出現（二十九年）は既に新派小説に比して五六年の後れを見る。而も之を實演して多少の成功を收めしは更に八年の後（三十七年）なりき。今日に至りて『ハムレット』『エニスの商人』を歡ぶが如きは、正に十年を後れたりと言ふべし。妄りに好脚本なきを歎する勿れ。今の俳優は現存の脚本すら満足に演じ遂ぐる者なきに非ずや。俳優の時勢に後ること當に十年のみに非ざるなり。イブセン、ハウプトマンを理解し實演し得る俳優の出づるは前途尙遼遠ならん。

此の時に際し、確たる文藝上の見地に立ちて劇壇革新の運動に著手せし者あり。文藝協會演藝部及び毎日新聞社内の若葉會即ち所謂文士俳優の活

動、佐藤紅綠、松居松葉の劇部に於ける事業是なり。文藝協會は早稻田大學の文科を中心とする文藝團體にして、三十九年逍遙抱月等によりて起され、最も力を演藝に盡し、同年及び翌年二回の試演を行ひ、春曙鐵笛薇陽等『桐一葉』『エニスの商人』『ハムレット』『新曲浦島』を演ず。就中春曙の公子ハムレットは卓絶なる藝術として斯界に認められぬ。若葉會に在りては、三十九年來、劇評家岡鬼太郎杉膺阿彌等『日蓮聖人辻說法』(鷗外作)『吉田寅次郎』(月郊)『甕破柴田』(紫紅)『信玄最後』(同)を演じ、専門家に非ざる文士研究の結果を公にせり。紅綠は三十九年來劇場作者として作劇に従事し、松葉は歐洲巡遊を終へて歸朝し、同じく外遊せる俳優左團次と結んで斯界に革新を行はんとし、四十一年『袈裟と盛遠』(松葉)『エニスの商人』(逍遙譯)を演じ、左團次のシャイロクに舊型を抛つて新工夫に就かんとする意氣を示しき。我が俳優の技倆は、斯くして漸うハムレット、シャイロクを演ずるに足る程度に進むを得たりしなり。

然れども是等の劇は吾人より之を見れば尙『忠臣蔵』と相距ること遠か

らず。現代人の胸臆を動かす新思潮と相關する所なきに似たり。畢竟將來らんとする新演藝を導く先驅たるに過ぎず。脚本の如きも、進歩の程度到底小説と同日の談に非ざるなり。而して斯壇發展の斯くの如く遅々たるは、其の由る所一にして足らず。俗衆を以て過半数を占めらるゝ觀客と稱する者の向背は、演劇生存の第一要件なること其の一なり。文學上何等の見識なく、唯演藝興行を以て己が營利事業とする劇場主興行者が、絶大の勢力を俳優の進退脚本の選擇の上に有する事其の二なり。興行主俳優其の他劇部内面に於ける多年蓄積の情弊牢固抜くべからざるものあり、俳優脚本家等にして偶、革新を企つる者ありとも、此の情弊の纏綿する所一蹶復起つべからざる悲境に陥るに至る事其の三なり。俳優を始め劇部全體の趣味頭腦、到底新文藝を理解し受用する能はず、所謂改良改革と稱する者、遂に何等の新意義を齎さざる事其の四なり。所謂糞土の牆治すべからず、修すべからず。之を指導育成して新文藝を産み出さんが如きは、百年河清を俟つに等し。寧ろ之を拋棄して別に全然新しき者を建設せんに若かず。是

に於てか從來の劇場を棄てて新試演場を建設し、從來の俳優を顧みずして新優人を養成し、從來の見巧者風の劇評家に依らずして新思潮に養はれたる新批評家に聞き、從來の脚本を改作翻案する事に踴躍せずして新意義を有する新脚本を迎へんとする傾向、漸く斯界に現はれぬ。げに逍遙の言へる如く、今は折衷の時代に非ずして創始の時代なり。所有舊套を排して人情自然の表白に歸るべき時代なり。第一節に説きし新ロマンチズムの思潮は此所にも其の發現を見るべきなり。

舊套破るべく、舊型壞つべし。而も舊演劇の中、一種の藝術として新劇壇に生殘るべき唯一の技あり。振事又は所作事と稱する舞踊劇是なり。此の者や泰西樂劇と一味相通する所あり、且つ恰も室町時代の能樂の如く、時勢の大波に推流さるゝことなくして能く百世の好尚を維ぎ得べき特質を具ふ。故に之を變化改良して一新面目を與ふるを得ば、以て新時代の詩的劇曲として鑒賞するに足るべし。『新曲浦島』『新曲赫哉姫』を作れる逍遙の努力は、此の見地より見れば極めて重要なる意義を有す。爾來逍遙は益々研

究の歩を進め、『鉢かづき姫』(四十年)『新曲初夢』(四十一年)『新曲金毛狐』(同)等、幾多の試作を公にし、既に其の二三は試演を経たり。然れども此の新樂劇又は新振事劇は、むしろ音樂舞蹈に近く、人をして忘我の境に神遊せしむるを旨とする者にして、吾人の生活にひたと相合して感せしめ考へしむべき性質の者に非ず。従つて最新思潮との交渉甚だ切ならず。若し夫れ史劇と社會劇とに至りては、所有過去の歴史を放棄して全然新建設によるに非ずば其の前途誠に危むに堪へたり。史劇社會劇に對する新時代の要求苟にすべからざるなり。

史劇脚本は白星月郊等二三の新作ありしも、特に注目すべきものなく、山崎紫紅に至りて多少の新彩を見る。『七つ桔梗』(三十九年)の一幕物七篇、及び其の後の數篇、皆史的事實に寓せて新時代精神を現さんと試み、多く個性の發展自我の満足を主張せんとするに似たり。其の結構に於ても、主人公の運命が生死の境に窮れる一刹那を舞臺に取り、過去未來を包容せる大なる背景の中に主人公の境遇心理を描出する手法を用ひ、一生面を斯界

に開けり。斯くの如きは現時の俳優にては十分に消化演出することを難んせんも、内容に於て最新思潮に觸るゝ所あるが故に、脚本としての發展は頗る刮目するに足る。唯紫紅の作には、未だ新興文學の傾向を具現したりと見ゆる者あらず。イブセンの社會劇が文壇に知られしより既に十年、其の翻譯を見しより既に五年、其の影響は寧ろ小説界に著しく、社會問題に觸れ解放せられたる新人を描ける新興文學の作風は、近時斯壇の中心に大波瀾を捲起せりと雖、劇界の進歩は未だ之に動かさるゝ程度に至らず、脚本に於ても、小説に於けるが如き強き感化を受けざりしに似たり。然れども三十九年イブセンの訃音傳はりし頃より、ノラ、ブランド、オスワルド、レベッカ等の名頻りに提唱せられ、之に刺撃せられて多少其の趣を傳へたる脚本漸く出でぬ。泡鳴の『焰の舌』(三十九年)『斧の福松』(四十年)、佐野天聲の『意志』『大農』『不死の誓』(同)、眞山青果の『第一人者』(同)『生れざりしならば』(四十一年)等、脚本としての價值及び實演の上に於ける成功の如何は暫く之を措き、兎に角新彩を斯壇に寄與せる功没すべからず。

就中天聲の作は、皆社會劇にして、紫紅の史劇に比すれば、頗る近代的の情趣に富み、現代思想界の苦悶暗闘を具象化して、強健なる個人意志の發展を主張する所、疑もなくイブセンの影響を見るべし。試みに『大農』の脚色思想を尋ぬるに、主人公は強烈なる個人思想を懷ける新人にして、宗教には基督教を奉じ、戰爭に捕虜となりて恥とせず。事業には大陸式の大農主義を取り、以て、二宮明神を奉じ武士道を尙び固有の小農主義を守る父妹村民に反抗し、所有嘲笑憎惡と戦つて其の主張を貫徹し、遂に個人の權威自我の勝利を謳ふに至るといふを以て一篇の骨子となす。從來屢文學の主題となれる新舊思想の衝突は、此の作に於ては、生活問題社會問題に觸れて著しく沈痛嚴肅の色を帯べること『破戒』と同一轍に出で、近代泰西の自然派戯曲家の徑路を踏んでハウプトマン等の跡を追へる觀あり。而も此の劇の主人公は、『破戒』の主人公の如く消極的の薄弱なる人物に非ずして、積極的革命的なる自我の結塊なり。恰も『猫橋』の主人公の如く、又『人民の敵』『ブランド』の主人公の如し。我が脚本は、茲に至りて始め

て小説と略同じ程度に於て新時代の面影を寫せりといふべし。よし其の作意に於ても臺詞に於ても幾多の缺點を存すとも、新社會劇として極めて重要な意義を有す。

恰も此の際雜誌『歌舞伎』にもイブセンを模せる社會劇を載せ、新進小説家たる青果、峭刻の筆力を此の方面に揮へり。『第一人者』は同じくイブセンの面影を髣髴し得べき新悲劇にして、傳習の俗見と新人の思想との葛藤に想を構へ、『大農』の峻烈なしと雖、渾融の致おのづから備はり、『大農』の如く革命的ならずして寧ろ道德的なり。舞臺上の効果はとにかく、脚本界の新聲として亦推讃すべきなり。

斯くの如くにして、我等は四十一年の今日、漸く一般文學の趨勢に平行すべき一二の脚本を見るを得たり。然れども其の質に於ても又量に於ても未だ大に稱するに足らず。特に實演の方面に在りては夜は猶深くして容易に醒めざる觀あり。吾人は唯新代の大思潮が文學界の所有部面に革新の波を揚げつゝある現狀を叙し得たるを以て満足せんとす。

第九章 新興の文學

第一節 思想界の新潮

三十八年空前の國家的大鬭争も其の終を告げ、十年の宿志茲に報いて光榮ある勝利の桂冠を戴くや、國運の進歩曩日の比に非ず。國民自覺の強固なる亦二十七八年の往時に超えたり。されば戦後の文學界は活氣縱横、前年來の沈靜を破り、幾多の新現象踵を接して起り、其の狀恰も二十七八年戦役の後の如くにして、而も一層の確固と充實とあり。三十九年『早稲田文學』再興せられ『文章世界』發刊せられて、抱月花袋、評論の筆を執り、『趣味』亦新刊せられて新作家の誘掖に努め、其の他文藝雜誌の起る者相繼ぎ、論壇の活氣茲に再び現はれ、和歌界に在りては『舞姫』『夢の華』の作者晶子正に圓熟高華の調を出し、俳句界に在りては從來文壇の一隅に限られたりし所謂俳趣味を擴充して文界の中心に大影響を與へ、新體詩界に在

りては前年に起りし象徴詩益、世に行はれ、小説界に在りては特に眩暈燦爛、或は自然派の先驅と言はるゝ、『破戒』『運命』を出し、或は俳諧派と言はるる『漾虚集』『草枕』を出し、或は獨創の新味を斯界に齎したる正宗白鳥を出し、或は天外の『コブシ』、宙外の『月に立つ影』、二葉亭の『其面影』等、各趣を異にする長篇を出し、其の他新進作家の起る者十數にして止らず、演藝界に在りては、文藝協會成りて劇壇の刷新を計り、大劇場設立の議熟し、脚本募集の舉起り、文士演劇略成功の緒に就きて専門俳優に刺撃を與へ、樂苑會成りて歌劇を本邦藝壇に移さんとし、評論界に在りては自然主義論始めて盛に、思想界に在りては自稱神佛の論あり、宗教文藝の交渉論あり、文藝道德の交渉論あり、總べて人生觀上の主義論頻りに討究せられ、通じて之を見るに新興の氣勢何れの方面にも満ち充ちたり。正に是れ百花新芳を競ふ時、文壇多望の春なり。

然れども當時の思想界文學界は、戰勝に酔ひ太平を謳うて高歌亂舞するが如き空虚の者に非ざりき。大戰終局を告げ人心漸く沈靜するに及び、國

民がはたと面前に遭遇したるは、夢の如き樂境に非ずして、大負擔を雙肩にして苦闘すべき斷崖の上なりき。暫く耽りつゝありし快き幻想より醒め來りて、一朝現實の苦しきに遭會する者、誰か痛切なる哀感に觸れざらんや。況んや文明の進歩は社會問題の複雑なる交渉關係を惹起し、交通の發達は泰西諸國の社會状態をして直に本邦に影響する所あらしめ、是に關する學者文人の論議創作は月を閲せずして我に渡來するをや。戦後の社會的大變動は、一として人生の嚴肅なるを思はしめざるなし。げに人生は嚴肅なり、遊戲に非ず。山鳥の尾の長々しき行列を作りて五十三驛を練り行ける悠遊太平の世は夢の如く去りぬ。憲法發布の何事なるかを解せずして唯めでたしと酔泣きせし景氣よき世も亦夢の如く去りぬ。生活問題の壓迫は所有空想を打破して赤裸々に吾人の前に暴露し、人をして深刻なる人生の悲哀に觸れしめずんば已まず。所謂自我意識の發展、個人思想の發達は、右に列叙するが如き状態に在りては免るべからざる自然の現象なり。此の際に於ける我が思想界は果して如何なる特質を帶ぶべきか。情緒偏重

の詩的空想時代は既に去りて、理知の力著しく發達し、如何なる事物に對しても情緒の盲動を許さず、覺醒の眼常を開きて惑溺すること少し。其の自我の念強きや、從來の思想が多く他人本位にして、君父國家を中心とせるに反し、言動總べて自己を本位にし、自我の發展を求めて屢舊道德を破らんとす。曩に日清戦争に勝つや、國民的大自覺を喚起せしも、日露戦争に在りては、戦勝に慣れて國民的自覺は前戦役の時程に大ならざりき。却つて世界特に歐洲大陸の思潮を受けて個人的自覺を喚び起しぬ。斯くて個人の覺醒は人生の觀察に異色を呈せしめ、痛切なる主觀の基彩を漲らしむ。三十四五年の當時、樗牛が豫言的高調を以て呼號せし狂飈時代の個人思想は、今に至りて、確たる根柢を現代人の思想に据ゑぬ。

斯かる時勢に生れ斯かる思想に根ざせる我が文學はおのづから種々の特色を帶ぶ。試みに之を列叙すれば、第一、前期の文學は理想を戀うて得られざる現實の苦痛を描きしが、今期のは傳統の理想を抛つて現實の眞に就き、常住不變を戀ひし昔に反して變化ある刹那を喜ぶに至れり。第二、嘗

て觀念小説出現の當時既に自我意識の發達するあり、人生を批評的に觀察して其の缺陷多き慘憺たる状態に逢着し、乃ちかの悲惨小説深刻小説の作風を起すに至りしが、今は其の傾向一層著しく、熾烈なる自我意識が生活問題の活火に觸れて忽ち破壊的の人物を作り、虛無的の人物を作り、神經質の人物を作り、敗殘の人物を作り、デカダン小説頽廢小説茲に起る。第三に、逍遙紅葉時代の文學に在りては、作者と作物との間に多少の間隔あり、作者は自己の經驗せる事象を閑却して故らに材料を他の世界に求め、斯くて知り得たる所の者を説示し物語る如き態度に出でたりと雖、今の文學は作者が直接經驗せる人生の一片を赤裸々に表白する者にて、作者と作物、事實と文學、二者の間分つべからざる密接の關係を有す。即ち今の文學は偽らざる自己の告白或は一人格の自然なる表現にして、換言すれば嚴肅なる主觀の所産なり。第四に、從來の文學に在りては主として靈の方面に筆を著け、肉の力の強大なる事實を描くこと少かりしが、今は肉靈不二の説をなす者あり、官能尊重の論をなす者あり、所有生存慾は心靈と同等

の勢力を以て文學に入り來れり。第五に、從來の文學は興味中心の文學にして、唯感情に訴へ涙に訴へ、所謂小説的事件を探り求めて遊戯の境に入らんとせしも、今の文學は運命を靜思して人生を感得せしむる者、理性に訴へてひたすら事象の眞を得んとす。嘗て『小説神髓』の時代に在りては、心理現象の表面を寫して満足し、天外に至りて之に生理の事實を加ふる迄に發達せしが、今は更に人性全般の事象を顧み、根柢に立入りて内面描寫を試みるに至りぬ。されば『膝栗毛』に興を催し「涙を以て主眼とす」と標榜せる小説に感涙を絞りし時代は夢と過ぎて、嚴肅なる人生の眞實に觸れたる者に非ずば吾人を満足せしむる能はざるなり。所謂文學はもはや閑人の閑事業に非ず、人をして喜ばしむるに非ずして考へしむるなり。第六に、前期寫實主義に比ぶれば、人生を觀る態度おのづから異なり、寫實主義に在りては、人生と自己との間に或る距離を保ち、客觀的態度を以て之に對せしも、今の文學に在りては、自己の中に人生の全き相を見出で、價値の判斷なしに、結構脚色なしに其の眞相を暴露す。寫實主義は客觀の事

象を尊重し、之を全人生として取扱ふも、今の文學は自己が自然人生の事象に觸接して起す所の種々の曲折動搖を一の客觀的事實と見做して之を文學の對境となす。即ち自然人事と自己との渾融合體せる者を全人生として取扱ふ。今の文學が自己暴露の文學となり、問題提供の文學となり、無解決の文學となり、無脚色の文學となり、主客兩體融合の文學となるは是が爲なり。更に其の技巧に就て見るも、或は露骨なる描寫と言ひ、或は無飾藝術と言ひ、何れも誇張を避け粉飾を去り、曲げず偽らざる事象を平淡達意の文辭に寓せ、白描素寫、直ちに事實の裸體的表現をなさんとす。

上述の如き文壇の新傾向は、世に稱して自然主義と言へり。或は自然の名に拘泥して單に之を客觀主義と解し、選擇せざる事象の寫眞的描寫をなす者と誤るあり。或は泰西文壇に於ける十九世紀後半の自然主義ナチュラリスムと異なるを難するあり。或は新傾向の一斑のみを擧げて全豹の價値を定めんとするものありきと雖、我が新興文學は斯く一口に説き去らるべき單純なる者に非ず。由來を有し歴史を有する一個文學上の大事實なり。上述の解説尙其

の要を悉くすに至らざるを思ふ。蓋し狂飈時代の新ロマンチズムは、硯友社一派の舊文藝觀に對する新文藝觀にして、同時に儒教武士道等の舊人生觀に對する新人生觀なりき。而も舊文藝舊人生觀に對する破壊の運動を開始せしのみにて、未だ具體的に新文藝新人生觀を立するに及ばざりき。自然主義を標榜せる論客は、其の後を承けて舊文藝破壊の運動を續け、長谷川天溪は『太陽』に據つて幻像の破滅を論じ破理顯實を提唱し、泡鳴は『神祕的半獸主義』(三十九年)を著して、肉心不二半靈半獸の人生即藝術主義を呼號し、花袋『文章世界』に據つて無理想無目的を標榜し、抱月『早稻田文學』に據つて新主義に美學上の根據を與へんとせり。時會、藤村、獨歩、漱石等新作家の舊風を擺脫せる創作あり、之を動機として論壇俄に色めき、苟も文藝に従事する人々は争うて之に關する論議をなし、舊人生觀舊文藝觀の一切を破壊し盡さんとする運動猛烈を極めたり。樗牛等の豫言的運動は、今日始めて鮮明なる色彩と重要な意義を有せる一般的運動となれりと言ふべし。されば自然主義は、單に文藝上の新主義たるに止らずして、

又人生觀上の新主義たり。此の主義や、所有傳統を破壊して後に起りし新自我の所生なれば、即ち解放せられたる新人の人生觀にして、物心合一肉靈一致、自己は唯全一體として存するのみ、心性は知に非ず情意に非ず、又全一體として存するのみ、現實の外に理想なく眞の外に善美なしと稱する一元的新見地に立てる者なり。

第二節 新興の小説

自然派文學は論議のみことごとく、しかりしも、未だ世の矚目を値すべき創作を見ざりしが、四十年に至り、評壇に於ける此の主義の鼓吹者花袋、『隣室』『少女病』『蒲團』『一兵卒』等を草し、所謂自然派小説の一片を世に示せり。『隣室』と『一兵卒』とは、將に病歿せんとする礦夫と兵卒とを描きて、生理的壓迫の強烈なる苦痛が所有精神的心靈的努力を推倒し行く消息を寫し、『少女病』と『蒲團』とは、家庭に興味を失ひ新時代に葬られんとする中年孤獨の感を敘して、之に伴ふ生理的衝動の壓し難き發作に及び、共

に自意識の盛なる現代人の生活の悲哀に觸れ、前章に擧げし『女教師』の統を繼ぎて更に一轉歩をなせり。特に『蒲團』は、作者の心的閱歷を客觀化して、偽らざる自己の大膽なる告白を試み、作家と作品とが有機的に渾融すといふ自然派の態度を最もよく代表する者にして、一篇の材料盡く作家を中心とする現存の事實に出づ。而して主人公の性格及び行動にはおのづから磨すべからざる時代の影あり。此の點に於て、『蒲團』は、夥多の缺陷を有するに係らず、新興自然派の最初の見本として見るに足るべし。

同年藤村『並木』の作あり、推移り行く時代の洪濤が遠慮なく舊人を倒して進む有様を描きて、中年の悲哀を名残なく現はし、獨歩『疲勞』『波の音』『竹の木戸』等の作あり、些末平凡なる事實を描きて其の背景たる現代人生の大なる影を暗示し、例の銳利峻峭の筆を以て生の悲哀倦怠を痛切に寫す。風葉は『おと娘』『解脱』等の短篇、『天才』『戀ざめ』等の長編を出して、『青春』以來益時代の新潮に適應せんとする努力を示し、或は『蒲團』に見えたる如き中年の戀を描かんとし、或は壯年者の青年に對する嫉妬を

寫さんとし、就中『天才』には、倦怠と疲勞とに陥りたるデカダンの青年作家と、生活の苦痛に壓迫せられながらも自意識の飽くまでも強盛なる青年評論家とを中心として、現代文學者の生活の悲慘なる一面を刻劃に叙し、而も作者從來慣用の爛熟せる技巧を破棄して、白描素寫の新風を試みたり。秋聲は淡々として白湯を呑む如き筆致、寂寥にして沈鬱なる作風、未だ文壇に其の價値を認められず、從來唯深刻沈痛なる人生の半面を寫せる小説家として知らるゝのみなりしが、新興文學の文壇に迎へらるゝや、會之に暗黙契合する所あり、俄然として世に知らるゝに至りぬ。此の點に於ては頗る獨歩の出處に似たり。其の北國的陰鬱の生活、心身上の劣等者の廢頹の生活を叙するに、獨得の寂しく沈みたる筆致を以てする所、露國文學と一味相通する點あり、『おのが縛』『焰』『獨り』『犠牲』『凋落』等の長短篇、何れも孤獨なる自我の寂しみを描き出で、其の徹底せる人生觀、人をして深く瞑想せしむる力を具ふ。眞山青果は新進の作家にして『南小泉村』に僻村の生活を描き、ツルゲネーフを想起せしむる筆致を以て一躍斯壇に名を

なし、次いで『敗北者』『茗荷畑』等の短篇をものし、疲れたる生活の哀愁に想を寄せたり。以上は皆四十年、花袋の諸作と同時に起りし現象にして、自然派の特色を發揮して新運動に寄與する所少からず。

然れども花袋等の作品は未だ全然舊風を擺脫せりと言ふべからず。『蒲團』の如きは、當時自然派作家の態度を具現せる者と稱せられたれども、尙セシメンタリズムの餘弊を残し、或は描かんとする究竟事象を暴露するに急にして、概念的説明の筆を行ひ、自己客觀の態度未だ十分ならざる者あり。此の點に於て正宗白鳥は卓出せる新作家と稱せらる。白鳥は三十七年の頃始めて文壇に知られし新進にして、四十年より次年にかけて『塵埃』『獨立心』『安心』『玉突屋』『何處へ』『五月幟』『世間並』『明日』等、即『紅塵』『何處へ』二集に收めたる短篇を草し、何れも自己經驗の上に材を求めて、些細平凡なる事象に全人生を暗示するが如き趣あり。彼れの人生を觀るや、冷靜なり、覺醒的なり。反抗するも甚しからず、憎惡するも極まるに至らず。好んで一切の刺撃に對して何等の興味を感ぜざる寂しき人生を描く。

蓋し、チエホフに私淑する所最も深きなり。而して其の描寫の態度は、唯示さんとする事象の生命を、素朴なる筆致を以て其の儘に直寫するのみにして、決して之を説明註釋することなし。

自然派の創作は白鳥に至りて略成熟したる標本を得たり。此の時に際し、更に之に加へて新興文學の發展を示すべき二個の作品を得たり。花袋の『生』と藤村の『春』と是なり。『生』は、作者の藝術に對する主張、即ちゴングールの態度を學んで、現實に於ける自己の經驗を唯印象のまゝに平面的に描寫し、而も事象其の物のみにて讀者をしておのづから深く考ふる所あらしめんとの主張を實現せんと試みたる者にして、材を一家庭の親子兄弟の關係に取り、古葉凋落して新芽の發生する生の相を描き出でたり。之を讀めば人類各個が強固なる生の執着、親子兄弟と雖畢竟自己を本位として別に各個の生を營むに努力する生の執着を窺ひ知ると同時に、大自然力の強壓が黙々の裡新陳代謝を行つて止まざる人生の全相を名残なく味ふを得べし。『春』は作者が從來の技巧を棄てて、自己生活の經驗を直寫するに印

象的粗描を以てせんと試みたる者にして、雑誌『文學界』の同人が新思想新文藝を鼓吹せし時代、思想界の曙、文藝界の春とも言ふべき時代を背景となし、此の運動に與りし若き人々の生活、即ち人生の春ともいふべき者を描出し、貫くに作者自身の生活を以てせり。之を讀めば、嘗て人生を論じ戀愛を談じ、所有舊文藝を破壊し、所有習俗を打破せんとし、健闘の極遂に時代の犠牲となりしロマンチックの詩人北村透谷を中心とする精神的運動の消息おのづから思ひ浮べられ、ロマンチックの藝術生活と壓迫し來る實際生活との扞格に懊惱せし作者が青春時代の消息おのづから回想せらるべし。上掲二作品は、共に作者の舊風を擺脫し、自然派の自己客觀の態度、印象的描寫の筆致を比較的によく表出せる者と稱せらる。

現時自然派の發展は大略茲に止まる。顧みて既出作品を通覽すれば、偽らざる自己の表現、飾らざる眞實の描寫と稱する中にも、特に廢頽哀愁の一面に馳せ、獸性解放の一角に赴き、デカダン人物の一方にのみ行くの觀あり。何が故に然るか。或は曰く、こは其の師として學べる泰西文學其の

物の傾向を模倣せしのみ。十九世紀大陸文學の自然派は、人生の現實を重んずるの極、獸性を描くを避けず、自意識發達して個性を重んずるの極、偏倚病的の人物を寫すを辭せず、實際生活を重んずるの極、疲勞孤獨の生活を筆にするを拒まず。當時社會の實狀正に然りしが爲なり。加之彼の國特に佛露二國の實情は、迷信に囚へられ、宗教に囚へられ、社會的若しくは政治的の壓制束縛を受くること甚しきを以て、其の反動として虛無的反抗的肉的病的の文藝を生じたるなりと。或は曰く、豈嘗に佛露文學の模倣とのみ言はんや。我が國現時の社會狀態は正に斯かる文藝を起すべき素質を具ふ。曩に第三期初頭に方り、所謂深刻小説悲慘小説の行はれしは、洋たる戰勝の歡樂の中、既に急激なる文明の進歩に伴ふ夥多の犠牲者を出したる當時の社會狀態の反映なりしが、今や我が文明の偏倚的進歩、往日の比に非ず、覺醒の眼に映する社會の現狀は疾痛すべき事象に滿ち、生活の實況は哀傷すべき葛藤に充てり。生の壓迫は個人をして自覺せしめ、習俗を打破せしめ、赤裸々の態度を以て人生に向はしむ。此の時に方り、眼

前に曝露し來る現實の眞相を見ん者、悲哀痛苦の聲を放たざらんと欲するも能はざるなり。特に新生を翹望して一切の因襲を破らんとする時、事の容易ならざるを知り、或は舊習を破るも之に代るべき新人生の容易に實現し難きを見ては、誰か不安煩悶の聲を揚げざらん。透谷樗牛が十五年乃至七年以前に嘗めたりし苦悶の味が、今日遂に創作の形を以て現はれし事、偶然に非ず。且つ夫れ嚴格なる過去社會の桎梏より解放せられしのみにて未だ新秩序に訓練せられざる個人が、斯くの如く放縱懷疑に流るゝも亦已むを得ざるに出づと。思ふに、兩者各一面の理を闡明せるもの、生の痛苦は古今東西を通じて渝らざる大事實なるべしと雖、近時文明の爛熱は一層之れを切實ならしめたり。而も現代自意識の強烈なる、個人は過去人物の如く遁世自殺を學ぶ能はず、飽くまで世に生きんとする願あり。茲に悲哀起りデカダン傾向生ず。自然派の作品が理論の廣汎雄大なるに似ず、相率ゐて破壊廢頽の一面にのみ趨せしは即ち是れが爲めなり。

新興文學の主要なる一面をなせる自然派小説に關する論述は茲に筆を擱

き、轉じて他の一面なる俳諧派小説の發展を辿らん。右に敍べし人生の眞相は、俳諧派作家も亦之を洞察して近代的哀愁を身にしむ。然れども之を觀照する態度、若しくは之を文藝に表現する態度は、全然自然派と趣を異にし、現實の眞を赤裸々に暴露するを避け、美しき薄布を隔て、之を觀んとす。故に回避的態度と言ふ。現實の事象に没頭熱中せず、冷靜に傍觀す。故に非熱情的態度といふ。冷靜に傍觀すと雖、清淡溫藉の襟懷を存して一種の情味あり。故に微溫的態度と言ふ。事象の外相に棄て難き逸興を感じて内部意義の深きに入らんとはせず。故に低徊的態度と言ふ。其の他或は非人情的と言ひ、或は大人對小兒的と言ふ者、皆此の人生觀照若しくは文學製作の態度を指せるなり。されば此の作風に出でたる文學は、多くは人生の奥底に達せずして所謂觸れぬ作品となる。然れども全精神を盲目的に傾注する事なく、理性の眼を開いて一段の高所より全局を瞰下すが故に、餘裕ある作品となる。作者の態度既に右の如くなれば、従つて描寫の事象の意義内容に重きを置くよりは、寧ろ、如何にして事象より得たる作者の

感じを表現せんかと言ふ事、即ち描寫の技巧に全力を注ぐ。事象の無脚色無結構を辭せざる所は自然派に似たりと雖、表現の技巧に腐心する所は全く之に反す。以上挙げ來りし俳諧派の特質は、即ち東洋趣味の特産にして、一たび俳句となり、二たび寫生文となり、三たび小説となりて斯かる發展を遂げしなり。子規が鼓吹せし俳諧文藝の生命は、今に至りて明治文壇の中心に影響を與へたりといふべし。

虚子の『鶏頭』に收めたる短篇は、此の種の小説の主要なる者にして、漱石の作品と共に此の派を代表す。然れども彼等の態度は、四十年に入りて著しく色調を變じ、主觀的傾向を加へ、徹底的筆鋒を磨き、現實生活の内面に肉薄せんとする趣あり。即ち漱石の『虞美人草』は、全幅の苦心を文章に集め、妖艶の中おのづから薄命の韻を存する一種の感じを表現せんと試みし中にも、一味人生の根本に説き入らんとする風情あり。『野分』『坑夫』に至りては即ち嚴肅なる現實生活に觸れんと試みし者にして、『鶏頭』の二三篇亦此の傾向を帶ぶ。虚子の『俳諧師』は目下此の傾向の最も發展

せる者にして、材を新俳句勃興當時の俳人の生活に取り、恰も『春』が『文學界』同人の運動を描きしが如く、日本派俳人の文學運動を寫し、之を行るに印象的筆致を以てし、頗る近代的風趣に富む。『生』及び『春』と並べて新興文學の一方の代表作とすべし。

二葉亭の創作『其面影』(三十九年)『平凡』(四十年)は、評壇の一部より自然派の作品を以て目せられ、作中人物の自意識強きこと、人物及び事象に現代人の生の悲哀おのづから現はるゝこと等を、其の特色として挙げらる。然れども斯くの如きは新興文學の通性にして、自然派作品に限るに非ず。『其面影』『平凡』の如き、若し類を以て別つべくんば、寧ろ俳諧派の作品に近き所あり。試みに其の人生觀照の態度を見るに、人生を洞察して一段の高所より瞰下し、世は畢竟斯かる者ぞと冷かに説示する趣あり。即ち所謂非熱情的態度、大人對小兒的態度、餘裕ある態度なり。而も其の態度強きに過ぎて往々人生を侮り人物を弄ぶが如き弊に陥り、人生に對する嚴肅なる觀察、人物に對する溫藉なる同情を缺き、動もすれば冷嘲惡諷に陥

らんとする嫌あり。次に之を表現する技巧を見るに、精練優麗、老熟の極に達し、時に内容を離れて獨り其の妙を恣にせんとす。是れかの露骨描寫排技巧を主張する自然派との間に超ゆべからざる鴻溝を穿つ者と言ふべし。蓋し是等は決して世の讚稱する如き新興文學の佳什に非ず。往年の作『浮雲』の作風を追うて唯一歩を進めたるに止まる。其の價値はむしろ絶妙なる技巧に在り。

小説の作家には尙小山内薫、小川未明、水野葉舟、其の他新進の青年甚だ多く、前期以來の新體詩人にして指を小説に染むる者亦少からず。女流作家も二三輩出するあり。其の作風多少差異あれども、皆近代的色調を帯びて新興文學の特質を存す。斯く新興文學の榮え初むるや、從來の作風を改めざる者漸く凋落し、宙外に長篇『月に立つ影』の作あり、鏡花に『春晝』『草迷宮』等の作あり、さすが往年の筆力を墮さすと雖、遂に新代の好尙に適せざる觀あり。澁柿園の歴史小説は依然二流以下の讀者に歡迎せらるれども、文運の大勢とは全然相關せず。

第三節 新興の詩歌

翻つて新體詩界を觀れば、かの鋭敏なる官能神經に訴へ人生の荒廢痛苦を歌ふ佛國デカダン詩派の遺流を汲む者尙斯壇に榮え、其の先達有明は『有明集』の諸篇に於て其の最も發達したる象徴詩歌の標本を示しぬ。然れども象徴詩は、畢竟一種の新技巧を詩界に導きし者なれば、詩の内容の進歩に對して幾何の貢獻を爲し、かは、蓋し疑問に屬す。故に末流誤つて象徴の技巧を試みんが爲に象徴詩を作するの弊を生じ、甚しきは單純なる譬喩を以て象徴と思ひなすの謬りに陥る。勿論現代人の實際生活に觸るゝに至りしは、内容に於ける一進轉歩に相違なしと雖、象徴技巧の研究と晦澁難解の謗を免れんとする苦心とは、おのづから内容に對する注意を壓倒せんとする傾あり。是に於てか内容の根本的革新を稱ふる者詩界に出でぬ。泡鳴即ち是なり。

先きに自然主義の人生觀藝術觀を發表せし泡鳴は、四十年に入りて之を

詩歌に擴充し、自然主義的表象詩を提唱して、所謂苦悶詩又は内容的デカダン詩を作しぬ。曰く、世に絶對なる者あることなし。人は刹那刹那に於ける心的活動に生くべし。而も其は情意に非ず、知に非ず、心性全體刹那の活動なり。熱情のみなるは少年青年の事なり。センチメンタリズム、ロマンチズムの事なり。壯年の今は情熱知熱共に活動する熱。想。あらざるべからず。全心刹那の燃焼は即ち人格なり、行爲なり、詩なり、斯くして物靈合一肉心不二の藝術的妙境に至るを得べし。其の刹那の心境をさながらに表白せる者、之を自然主義的表象詩といふと。詩集『闇の盃盤』(四十一年)は、即ち此の刹那主義の人生觀を體現して、知熱情熱同時に燃えたる心熱の面影を寫さんと試みたる者なり。要するに作者の所謂苦悶詩は、現代人の哀愁を湛へ自家の生活の告白をなせる點に思想上の新味を有す。之を大局より見れば、藝術界全般を革新せんとする自然主義の洪波が、今や新體詩界に寄せ來りしものと言べく、所有古典的詩歌及び技巧的象徵詩に對する破壊運動の先聲と見るべし。されば泡鳴の詩論の如きも、獨り詩歌

に對する特殊の觀察に非ずして、普遍なる藝術觀なり。自然主義的表象の説は總べての文學に通すべし。泡鳴は之を詩界に導きて先づ内容革新の運動を起せるなり。

然れども此の運動は廣く詩の内容に關し、未だ新體詩といふ特殊の形式に關して特殊の考察をなすに至らざりき。内容の激變右の如きに際し、依然として舊様の詩語詩形を取る者、其の間豈扞格なくして終らんや。小説に於ける自然主義の運動は、内容を一變すると同時に、其の表現の形式をも一變して全然新生の第一步に復らしめぬ。新體詩亦遂に此の事なかるべからず。思ふに新體詩が朦朧晦澁の非難の下に讀者社會に敬遠せられたるや久し。詩歌界最も發達すべき新文學たる新體詩が、文壇の大勢力たる能はずして少數の讀者にのみ鑒賞せられし事多年、象徵詩に至りて其の傾向の極點に達せり。當代の作家自らこゝに反省する所あり、表現の技巧に種種の研究を試み、用語句法の上に種々の工夫を廻らし、如何にして、晦澁難解の域を脱せんかに腐心せりと雖、形式の彫琢愈細に入りて讀者の心胸

に觸るゝ者却つて失はれんとす。『有明集』の渾成を以てして尙此の缺點を免れざるなり。泡鳴に至りて詩の内容を一新せりと雖、尙同じく世に解せらるゝこと少く、其の他幾多青年詩人の努力ありきと雖、一として此の非難を解くに至らざりき。かくて新體詩は漸く文壇の中心より遠ざかり、新興文學が冲天の勢を以て世に布き、從來斯界の一隅に潛みし寫生文すら文壇の中心に若干の影響を與へしに係らず、益々讀者社會と乖離せんとす。詩人は必ずしも其の新感想の一般社會に解せらるゝを要せずと稱すと雖、新體詩其の物の日に、文壇の中心に遠ざからんとするを見ては、詩人たる者如何ぞ現狀に安んずべけんや。而も從來彼等が試みし詩律詩形に關する所有試みも、表現の技巧に就ての慘憺たる苦心も、内容一新の目覺しき努力も、遂に其の功なきを見ては、深き懊惱と懷疑とに包まれざらんと欲するも得べからざるなり。

退いて新體詩が讀者に解せられざる理由を索むるに、或は思想の上に在り、或は表現の技巧の上に在り、或は用語措辭の上に在りて、必しも其の

軌を一にせずと雖、苟も近代の思想と没交渉なる舊代の人に非ざるよりは、現今の新體詩の歌はんとする思想を了解せざる事あらざるべし。讀者は其の内容の如何に想到するに先だち、早く其の用語措辭の晦澁に苦しみ、表現の技巧の難解に感興を失ふ。新體詩をして讀書界より遠ざからしむるは、主として形式技巧の内容に添はざるに存す。刹那に流轉する現代人の心的活動の複雑なる印象を表現せんとするに方り、舊代人の詩想を寫すに用ひたる在來の詩語にのみ依らんとするは素より難事に屬す。詩技亦然り、詩形亦然り。内容の律調と言語の律調と相和せざるに至りては、到底詩的效果を見る能はざるなり。自然主義的表象詩の運動も形式革新に及ばざれば其の全效を收め難し。用語に古語復活を試み、口語混入を試み、詩技に俗謠體を取り、象徴を用ひ、詩律に七五を八六に變へ五七を七七に更め、詩形にソネット型を取り長短句を混ふるが如きは、畢竟末節に過ぎず。所有過去の形式を棄却して内容の中より流れ出づる自然の形體を取るに非ざれば、此の困難を解決する能はざるなり。從來の詩人茲に思ひ到らず、其の苦心

試練する所多く姑息に終る。

舊文藝破壊の運動は遂に新體詩の形式に及びぬ。四十一年相馬御風『早稻田文學』に「詩界の根本的革新」を唱道して曰く、之を歴史に徴するに、詩歌革新の第一聲は常に形式に對する内容の爆發なり。形式を破つて内容の流露せる作風は常に新しき時代を創む。之を我が詩界の現状に見るに、象徵主義と言ひ自然主義と言ひ、革新の聲徒に高しと雖、改むる所言辭の末に止つて未だ根本的形式に及ばず。古典的西詩の詩形に則り奈良朝以來の詩律を繼承して作られたる『新體詩抄』の形式を踏襲し、外形先づ定まりて之に内容を適合せしめんと努むる弊習を承くる限りは、到底現代人の胸に觸るゝこと難し。詩界眞の革命は新體詩といふ者の歴史を棄却して、我が情緒主觀さながらの形式を新に創り出づるに在り。先づ從來の用語を斥けて現代口語の絶對自由なる採用をなせ。次に從來の固定的外存的詩律を捨てて情緒主觀其の物の律に従へよ。第三に古典的西詩に則れる行聯の制約を破りて絶對自由なる詩形を用ひよ。要するに内より湧き出でて自ら

形を成す詩歌發生の第一步に歸れと。斯くの如きは當代詩人が正に思ひ及ぶべくして未だこゝに至らざりし所のものを大膽に道破せる説にして、詩界に於ける自然主義の主張は茲に始めて徹底するに至りき。

御風は續いて其の主張を創作に試み、絶對自由の詩形を以て新感味を歌へる象徴詩を草しぬ。但し口語を詩歌に用ひしは決して今日に始まりしに非ず。既に美妙齋梅花道人嵯峨の舎の昔に存し、近くは泣菫林外有明雨情等の民謠體の詩にも亦存す。又過去の詩歌に於ける律格句法を棄てて散文的にする事も、既に透谷梅花に始まり、山獨歩を経て白星林外に至るまで屢試みられたりき。然れども是等は唯用語詩形の變化多様ならんことを求めし試作に止まり、未だ内容を解放せんが爲に自ら起れる形式全部の根本的棄却に非ざりき。獨り片山孤村が三十八年獨逸の「神經質の文學」を紹介するに方り、デエメル、ホルツの小篇を口譯せる者は、絶對自由の形式に出で、恰も御風等の先聲をなすの感あり。而も是、意識的革新運動に非ざりしが故に深く注目せらるゝことなかりしが、御風等の作あるに至り

て俄然斯壇の大勢を動かす、新進青年の作家をして競うて之に赴かしめぬ。同時に泡鳴はホイットマンの詩風を承けて、從來の詩律即ち言語律（外形律）を捨てたる散文詩を草し、續いて其の詩見に従ふ自己表現に最も適切なる言語として現代語を取り、御風等と呼應して盛に舊型破壊の筆を揮へり。世に稱して或は口語詩或は散文詩或は自由詩といふ。蓋し單に一特質を擧げたる便宜上の名稱のみ。拘すべからず。

先きに小説に於ける自然主義の運動を説ける際、論議の普遍的壯觀あるに係らず、作品は多く其の一面を體現するに止れるを指摘せしが、此の現象は又新體詩にも之を見るを得。上述詩論の堂々なる、些の非難すべきなしと雖、試作する所多く印象的斷片的詩技の一面にのみ執する傾向あり。思ふに現代人の主我的官能的現實的デカダンのなるや、情緒生活甚だしく荒んで常に新なる刺撃を求め、其の極遂に異常なる刺撃を俟たずんば復感興を起さざるに至る。其の情緒主觀さながらの聲は、即ち刹那に流動する情緒の各瞬間に於ける最も強き印象的表現なり。現時の新體詩が印象

的斷片的となれるは、小説に於ける傾向と同じく現代生活の實相より流れ來るに外ならず。特に櫻井天壇が獨逸的印象的自然主義を説きて、ホイットマン、アラン・ポーに源流を汲めるホルツ、デエメル、モムベルト等の詩風を紹介せるは、之に對する有力なる暗示となり、短句錯落、間歇的斷片的の措辭によりて強烈なる印象を直下に叫び出さんとする印象詩の一流、益々世に行はるに至れり。名づけて印象詩又は斷片詩といふ。

新體詩目下の發展は略茲に止まる。一切の自己活動が渾一して其の高潮に達せる刹那、おのづから迸出する全人格の聲をば、思想律（内容律）を追ひ現代語もて寫せる新詩は、詠すべき詩又は讀むべき詩の境を脱して、考ふべき詩の域に入れりと言ふべし。斯くて詩界の新現象は新體詩に於て最も著しく、他の詩歌即ち和歌俳句に於ては、同じく文壇の大勢に動かされて、或は自己諷詠或は現實描寫等、注目すべき變化發展なきに非ずと雖、之を新體詩に比ぶればむしろ受動的なるの觀あり。

* * * * *

文學史家に從へば、泰西近代文學は、十八世紀のクラッシズムより十九世紀のロマンチズムに移り、リアリズム、ナチュラリズムに變じ、世紀末より二十世紀初頭にかけてシムボリズムに轉じ、今やミシチズムに遷らんとすと言ふ。本邦現時の文學は泰西文學に負ふ所少からずと雖、是等四五の流派一時に紹介せられ、星霜百年の間に傳統あり順序ある推移をなしたる各種文學が、僅々數年の中に順序なく系統なく輸入せられしが故に、最近文壇の變遷は必ずしも右の順序に依らず、上述各時代が同時に來りしかの觀あり。且つ我が現時の文學や、假りに自然主義象徵主義印象主義と名づくと雖、固と是れ我が國民性に根ざし、我が社會状態に養はれ、我が文學の歴史に培はれし者なれば、泰西文學に於ける同名の者と等しなみに觀んとする時は、却つて真相を失ふべし。故に泰西文學史上の事實を以て、之を我が文學の現状に推し、若しくは將來をトせんとするが如きは、力めて避くべき事に屬す。我が詩壇の象徵派は必ずしも露佛のシムボリズムに等しからず。小説界の自然派は必ずしも科學的眞實を重んずる本來自然主義

に非ずして、却つて主觀抒情の傾ある佛の印象的自然主義若しくは獨の徹底的自然主義に似たる者多し。唯其の大勢に於て、絶東の海表に立てる島帝國の文學が、極西諸邦の文學と呼吸相通ふに至りし大發展を認むれば則ち足る。

蓋しこの新興の思潮は獨り文壇の事象のみに非ず。フォルクェルト曰く、十九世紀後半の思潮の中心は實際的精神なりと。哲學に於ては、理論上の眞を發見するよりも、經驗上の實に近づくことを欲し、道徳に於ては、道義の理想を建設するよりも人類生活の實況に重きを置き、藝術に於ては、美の極致を發揮するよりも實際生活の描寫を勉むるは即ち輓近の潮流なり。思想界のプラグマチズムと言ひ、文藝界のナチュラリズムと言ひ、等しく此の源より出づる二の流に外ならず。我が文學は他の部面に先だちて世界の思潮に參するの光榮を荷へるなり。

新興思潮の運動は、斯くして各種文學を根柢より蕩搖し、到る所舊形を破壊し去れり。然り、目下新運動の主なる事業は破壊なり。内容の進歩革

新ありて既定の形式に制約せらるゝに堪へざるや、乃ち爆發して所有舊型を燒盡さんとするは文學史上の常態にして、鷺見柳之助間貫一の徒一轉して關欽哉となり、再轉して竹中時雄となり、菅沼健次となり、岸本捨吉となりし今日、硯友社を中心としたる舊文學の破壊せらるゝはおのづからなる運命に屬す。吾人は舊物の破壊を惜まず。今後の問題は、唯破壊し去りたる荒廢の中に立ちて、如何なる新文學の殿堂を築くかに在るのみ。紅葉歿して茲に五年、從來の名作家にして時代の大濤に推し流さるゝ者少からず、維新以來最暗黒の文壇に立ちて明治文學の基礎を築きし先進の諸士は、道を新進に譲りて過去の幕裡に没しぬ。新進の作家評家は、破壊すべき者を破壊すると同時に、先進の功業を追諱するに吝なるべからず。彼等の努力は先づ文學の社會的地位を高めて之を社會各方面に弘布せしめ、舊時代の戯作文藝を排して新趣味を開拓し、次に一代文壇の指導者となりて後進作家を抜き、外邦文學を紹介して東西思潮の融合に資し、總べて將來の新文學を醸成すべき素地を作るに勉めたり。彼等は未來文學の大光明に達せ

んが爲に暗中に奮闘せし過渡時代の勇士として、長へに其の功績を録せらるべきなり。今や文學の社會に對する地位亦往時の比に非ず。三十四五年に於ける新ロマンチズムの運動は、道學者教育者をして周章動搖せしめ、三十九年には劇壇の常例を破りて文士演劇の成功を見、四十一年には社會は獨歩眉山等の死に對して政治界其の他に於ける偉人の死と同等の注意を拂ひ、文部大臣は半公式に文學者を招きて文藝院設立の内談をなすに至りぬ。斯く一方に於て文藝と社會との交渉日に密に、他方に於て海外文學の輸入月に盛に、文運興隆の機正に至れり。かゝる時勢に際し、過去文學を破壊して立てる新文學者の責任は、二十年前に於ける先進諸家のそれと同日の談に非ず。吾人は此の重任を負へる現今及び將來の文學者が、如何なる新殿堂を建設して先進の勳業に對せんとするかを見ん。

明治文學史終

附錄 明治文學年表

明治元年

- 二月 柳川春三『中外新聞』發刊
- 三月 太政官『日誌』發刊
五箇條御誓文を發せらる
- 四月 福地源一郎條野傳平『江湖新聞』發刊
岸田吟香横濱に『藻蘆草』發刊
- 六月 昌平校を復興す
- 八月 江戸を東京と改稱す
- 九月 明治と改元す
- 十月 東京遷都

明治二年

- 一月 宮中歌御會復興
- 二月 出版條例新聞條例を公布す
- 三月 府縣に小學校を設く

五月

開成所昌平校に出版取調所を置く

六月

開成學校兵學校醫學校を合して大學校とす
版籍奉還

八月

福澤諭吉『世界國盡』

明治三年

一月

大教宣布の詔發せらる

九月

魯文『西洋道中膝栗毛』第一編
府下に中學校を置く

明治四年

三月

木村黒川補原編『語彙』

四月

『横濱毎日新聞』發刊

五月

關篤輔等『新聞雜誌』發刊

七月

中村正直譯『西國立志編』

十二月

魯文『安愚樂鍋』

明治五年

- 二月 條野傳平等『東京日々新聞』發刊
- 福澤『學問のすゝめ』
- 東京に女學校を起す
- 東京に圖書館を開く
- 四月 小西義敬等『郵便報知新聞』發刊
- 六月 中村正直同人社を起す
- 七月 學制頒布
- 八月 始めて太陽曆を用ゆ
- 十一月

明治六年

- 四月 渡邊溫譯『伊蘇普物語』
- 松村春輔『復古夢物語』
- 五月 東京外國語學校を起す
- 七月 森有禮等明六社を結ぶ
- 十月 征韓論起る
- 十二月 福地櫻痴官を辭して『日々新聞』に入る

明治七年

- 一月 板垣退助等民選院設立の建議をなす
- 三月 明六社『明六雜誌』(月二回)發刊
- 四月 服部撫松『東京新繁昌記』初編
- 柳北『柳橋新誌』
- 九月 『朝野新聞』發刊成島柳北入社
- 十一月 本野盛亭『讀賣新聞』發刊鈴木田正雄入社

明治八年

- 一月 『新聞雜誌』改題『東京曙新聞』
- 四月 『洋々社談』發刊
- 十一月 新島襄西京に同志社を立つ
- 『明六雜誌』廢刊
- 明治九年
- 一月 春輔『春雨文庫』
- 四月 撫松『東京新誌』發刊
- 七月 同人社『同人社文學雜誌』發刊

明治十年

- 一月 柳北『花月新誌』發刊
- 二月 鹿兒島に反亂起る
- 三月 野村文夫『圓々珍聞』發刊
- 『碩才新誌』發刊
- 四月 大學校東京大學と改稱す
- 八月 第一回内國勸業博覽會
- 九月 鹿兒島反亂平定す

明治十一年

- 四月 板垣等民權自由説を唱ふ
- 十月 織田純一郎譯『花柳春話』

明治十二年

- 一月 學士會院を設く
- 村山龍平大阪に『大阪朝日新聞』發刊
- 二月 『歌舞伎新報』發刊

- 九月 教育令を公布す
- 十二月 國會開設の請願建白出づ

明治十三年

- 七月 東京大學文學科始めて卒業生を出す
- 十月 『六合雜誌』發刊

明治十四年

- 三月 中江兆民『政理叢談』發刊
- 『東洋學藝雜誌』發刊
- 國會開設の大詔發せらる
- 板垣等自由黨を結ぶ
- 十一月 音楽取調掛編『小學唱歌集』初編

明治十五年

- 三月 福澤『時事新報』發刊
- 五月 外山、山井上巽軒矢田部尙令『新體詩抄』
- 九月 第一回繪畫共進會

十月 兆民譯『民約譯解』
東京專門學校早稻田に起る

明治十六年

一月 馬場辰猪『天賦人權論』
三月 矢野龍溪『經國美談』第一
七月 『官報』發刊
十一月 兆民譯『維氏美學』

明治十七年

四月 角藤定憲大阪に壯士芝居を起す
五月 坪内逍遙譯『自由太刀余波銳鋒』
七月 かなのくわい起る
九月 藤田鳴鶴『文明東漸史』

明治十八年

二月 ローマ字會起る
逍遙譯『慨世士傳』

一月 依田學海『吉野拾遺名歌譽』

二月 蘇峰『國民の友』發刊
『哲學雜誌』發刊
鐵腸『花間鶯』上卷
須藤南翠『新粧之佳人』

四月 蘇峰『新日本の青年』
鹿鳴館に假裝舞踏會を催す
學位令を公布す

五月 二葉亭四迷『浮雲』上卷
六 月 美妙齋『以良都女』發刊
七 月 東京音樂學校起る
十 月

明治二十一年

二月 二葉亭『浮雲』第二編
四月 三宅雄二郎等『日本人』發刊
五月 紅葉等『我樂多文庫』發刊
加藤弘之著作麟祥伊藤圭介學位令によりて
博士を授けらる

三月 尾崎紅葉石橋思案山田美妙等硯友社を結ぶ

六月 逍遙『當世書生氣質』第一
柴東海散士『佳人の奇遇』第一二
七月 巖本善治『文學雜誌』發刊

八月 鳴鶴譯『繫思談』
逍遙『小説神髓』上卷
十二月 官制改革内閣設置

明治十九年

一月 『反省雜誌』發刊
三月 帝國大學令發布
六月 私立明治學院創立
末松謙澄等演劇改良會を起す
美妙紅葉『新體詞選』
末廣鐵腸『雪中梅』
九月 徳富蘇峰『將來の日本』
十月

明治二十年

六月 『東京朝日新聞』發刊

七月 二葉亭譯『あひびき』『國民の友』に出づ
田邊花圃女史『藪の鶯』

八月 美妙齋短篇集『夏木立』

十月 小説雜誌『都の花』金港堂より發刊
東京美術學校起る
二葉亭譯『めぐりあひ』『都の花』に

十一月 小説雜誌『小説萃綿』春陽堂より發刊
狩野芳崖死す六十一歳

十二月 『大阪毎日新聞』發刊
小説雜誌『大和綿』博文館より發刊

明治二十二年

一月 美妙『胡蝶』春の屋「細君」思軒譯「探偵
ユイベル」『國民の友』附録に出づ
矢崎嵯峨の合「初戀」『都の花』に
小説雜誌『新小説』春陽堂より發刊

憲法發布式舉行
 二月 幸田露伴「露團々」『都の花』に
 新聞『日本』發刊
 四月 紅葉「二人比丘尼色懺悔」『新著百種』第一
 五月 高田半峰『美辭學』
 七月 櫻庭篁村『むら竹』第一編
 八月 森鷗外等譯詩「面影」嵯峨の舎「流轉」『國民の友』附録に
 二葉亭「浮雲」續篇『都の花』に
 九月 露伴「風流佛」『新著百種』第五
 東京專門學校文學科創立
 篁村『當世商人氣質』
 十月 鷗外等『桐草紙』發刊
 歌舞伎座落成
 十一月 廣津柳浪「殘菊」『新著百種』第六
 十二月 繪畫雜誌『國華』發刊

明治二十三年

一月 鷗外「舞姫」『國民の友』に
 新島襄死す
 蘇峰『國民新聞』發刊
 四月 鷗外譯「埋れ木」『桐草紙』に
 六月 宮崎湖處子『歸省』
 七月 國學院創立
 八月 露伴「一口劍」『國民の友』に
 紅葉「伽羅枕」『讀賣』に
 九月 教育勸語發布
 三上高津共著『日本文學史』
 十一月 帝國議會召集せらる
 二月 露伴「辻淨瑠璃」『國會』に
 三月 中西梅花『新體梅花詩集』
 川上香次郎等新演劇「板垣退助」を演ず
 田口鼎軒雜誌『史海』發刊

明治二十四年

原抱一庵「關中政治家」『聚芳十種』第五
 中村正直死す六十歳
 六月 齊藤綠雨「かくれんぼ」『文學世界』第六
 七月 紅葉「二人女房」『都の花』に
 八月 逍遙等『早稻田文學』發刊
 十月 露伴『五重塔』『國會』に
 十一月 紅葉「三人妻」『讀賣』に
 鷗外譯稿集『水沫集』
 正岡子規『日本』に俳句論を始む
 鷗外譯「即興詩人」『桐草紙』に
 黒岩涙香『萬朝報』發刊
 内田不知庵譯『罪と罰』

明治二十五年

二月 落合直文等淺香社設立
 五月 子規『類聚書屋俳話』
 六月 紅葉「心の闇」『讀賣』に
 十月 逍遙「我國の史劇」『早稻田文學』に
 『二六新報』發刊
 十一月 子規「芭蕉雜談」『日本』に
 三月 鹽井雨江譯『湖上の美人』
 五月 透谷死す二十七歳
 七月 清國と開戦す
 八月 雜誌『桐草紙』廢刊
 魯文死す六十六歳
 十一月 逍遙史劇「桐一葉」『早稻田文學』に

明治二十七年

古河默阿彌死す七十八歳
 露伴「風流微塵藏」第一「笹舟」『國會』に
 星野天知等雜誌『文學界』發刊

明治二十六年

明治二十八年

帝國文學會『帝國文學』發刊
 雜誌『太陽』博文館より發刊

一月 露伴「新浦島」『國會』に
樋口一葉「たけくらべ」『文學界』に
小説雜誌『文藝俱樂部』博文館より發刊
雜誌『青年文』發刊
二月 外山正一散文詩「可兒大尉」『帝國文學』に
泉鏡花「夜行巡查」『文藝俱樂部』に
清國と講和す
四月 柳浪「黒蜥蜴」『文藝俱樂部』に
後藤宙外「ありのすさび」『早稻田文學』に
五月 武島羽衣新體詩「小夜砧」『帝國文學』に
鏡花「外科室」『文藝俱樂部』に
六月 川土眉山「裏表」『國民の友』附録に
雜誌『文庫』發刊
八月 外山上田中村「新體詩歌集」
九月 一葉「湖江」『文藝俱樂部』に
十月 江見水蔭「女房殺し」『文藝俱樂部』に
十一月 眉山「暗潮」『讀賣』に

十二月 南新二死す六十一歳
『文藝俱樂部』増刊『閑秀小説』
明治二十九年
一月 鷗外「めざまし草」發刊
巽軒「比沼山の歌」『帝國文學』『太陽』
逍遙史劇「牧の方」『早稻田文學』に
紅葉「多情多恨」『讀賣』に
若松賤子死す三十二歳
二月 鐵腸死す四十九歳
與謝野鐵幹詩歌集『東西南北』
五月 小説雜誌『新小説』再興
柳浪「今戸心中」『文藝俱樂部』に
雜誌『新聲』發刊
竹越三又「世界之日本」發刊
八月 新詩雜誌『大和琴』發刊
小栗風葉「寝白粉」『文藝俱樂部』に
逍遙論集『文學其の折々』
九月

明治三十年

十一月 一葉死す二十五歳
十二月 鷗外論集『つき草』
一月 紅葉「金色夜叉」『讀賣』に
『一葉全集』
賤子譯『小公子』
二月 雨江羽衣桂月新詩文集『花紅葉』
島崎藤村新體詩「天馬」『文學界』に
獨歩花袋國男湖處子等『抒情詩』
藤村「深林の逍遙」『帝國文學』に
三月 新體詩集『この花』
宙外天外等『新著月刊』發刊
四月 土井晚翠新體詩「破鐘の響」『帝國文學』に
子規「俳人蕪村」『日本』に
櫻痴歌聲伎座立作者となる
二葉亭譯「浮草」『太陽』
天遊天來詩集『松虫鈴虫』
雜誌『日本主義』發刊
五月

六月 鷗外喜美子譯稿集『かげ草』
八月 藤村詩集『若菜集』
九月 逍遙「春手鳥孤城落月」『新小説』に
京都帝國大學設立
十一月 思軒死す三十七歳
十二月 雜誌『文學界』廢刊
明治三十一年
二月 竹柏園和歌雜誌『心の花』發刊
子規和歌論『日本』に
不知庵「暮の二十八日」『新著月刊』に
三月 日本派俳句集『新俳句』
晚翠「暮鐘」『帝國文學』に
四月 『新著月刊』廢刊
五月 藤村詩文集『一葉舟』
八月 『國民の友』廢刊
十月 日本派俳誌「ぼとぎす」發刊
『早稻田文學』廢刊

十一月 徳富蘆花「不如歸」『國民新聞』
十二月 藤村詩集『夏草』

明治三十二年

一月 『反省雜誌』改題『中央公論』
二月 高山樗牛「時代精神論」『太陽』
三月 根岸短歌會創立
四月 晚翠詩集『天地有情』
八月 矢田部尙今死す四十九歳
私立學校令發布
十一月 薄田泣菫詩集『暮笛集』
子規寫生文『ほととぎす』
鐵幹新詩社創立

明治三十三年

一月 雜誌『歌舞伎』發刊
芳賀矢一『國文學史十講』

十月 蘆花「黒潮」『國民新聞』
泣菫詩集『行く春』
上田柳村譯文集『みをつくし』
高安月郊譯『イアセン作社會劇』

十二月 北田薄水小説集『薄水遺稿』
柳川春葉「錦木」『新小説』
天外『はやり唄』
兆民死す五十五歳

明治三十五年

一月 網島梁川「宗教的眞理の性質」『早稻田學報』
條野探菊死す七十二歳
三月 雜誌『文藝界』金港堂より發刊
子規『猿祭書屋俳句帖抄』上巻
風葉「涼炎」『新小説』
五月 田山花袋『重右衛門の最後』

二月 税所敦子死す七十六歳
鏡花『高野聖』『新小説』
三月 外山、山死す五十三歳
四月 鐵幹詩歌雜誌『明星』發刊
五月 小杉天外『初夢』『二六新聞』
十一月 大西操山死す三十七歳

明治三十四年

一月 樗牛「文明批評家としての文學者」『太陽』
河井醉茗詩集『無弦弓』
清澤滿之宗教雜誌『精神界』發刊
二月 福澤諭吉死す六十八歳
國木田獨歩短篇集『武藏野』
三月 日本派俳句集『春夏秋冬』
五月 晚翠詩集『晚鐘』
六月 大橋乙羽死す三十三歳
藤村詩集『落梅集』
八月 鳳晶子歌集『亂れ髪』
樗牛「美的生活論」『太陽』

七月 樗牛「日蓮論」『太陽』
永井荷風『地獄之花』

八月 徳田秋聲「春光」『文藝界』
九月 子規死す三十六歳
十月 透谷集『透谷全集』
十一月 藤村「舊主人」『新小説』
獨歩「酒中日記」『文藝界』
十二月 鷗外脚本『玉匣兩浦島』
樗牛死す三十三歳

明治三十六年

一月 紅葉「新續金色夜叉」『新小説』
天外「魔風戀風」『讀賣』
二月 俳優尾上菊五郎死す六十歳
平木白星詩集『日本國歌』
三月 專門學校令發布
月郊脚本『江戸城明渡』
五月 蒲原有明詩集『獨絃哀歌』

六月 清澤滿之死す
短歌雜誌『馬酔木』發刊
對露開戰論起る

七月 音樂學校歌劇『オルフオイス』を演ず
露伴「天打つ浪」『讀賣』に

九月 子規四方太等『寫生文集』
俳優市川團十郎死す六十六歳

十月 紅葉死す三十七歳

十一月 土井春曙翻案『ハムレット』新派劇に上る
詩歌雜誌『百合』發刊

十二月 落合直文死す四十三歳

明治三十七年

一月 『紅葉全集』第一
『樗牛全集』第一
兒玉花外『花外詩集』
木下尚江小説「火の柱」『毎日新聞』に

二月 雜誌『時代思潮』發刊
海外脚本「日蓮聖人辻説法」『歌舞伎』に
露國と開戦す

三月 露伴長詩「出塵」『讀賣』に
『桐一葉』舊劇に上る

四月 綠雨死す三十八歳
雜誌『新潮』發刊

五月 抱一庵死す三十九歳

八月 俳優市川左團次死す六十三歳
小泉八雲死す五十四歳

九月 逍遙『新樂劇論』『新曲浦島』
子規歌集『竹の里歌』

十一月 尚江「良人の自白」『毎日新聞』に
岩野泡鳴詩集『夕潮』

十二月

明治三十八年

一月 夏目漱石「倫敦塔」『帝國文學』に
漱石「我輩は猫である」『ほととぎす』に

三月 風葉「青春」『讀賣』に
前田林外詩集『夏花少女』
奉天大戰
『牧の方』舊派劇に演ぜらる

四月 魯庵譯「復活」『日本』に
田口鼎軒死す

五月 石川啄木詩集『あこがれ』
泣菫詩集『二十五絃』
梁川「見神の實驗」『新人』
野口寧齋死す三十九歳
日本海大海戰

六月 泡鳴詩集『悲戀悲歌』
有明詩集『春鳥集』

七月 伊藤證信宗教雜誌『無我の愛』發刊
梁川『梁川文集』

八月 獨歩『獨歩集』
落合直文『萩之家遺稿』

九月 戸澤姑射淺野憲虛譯『沙翁全集』第一

十月 柳村譯詩『海潮音』
梁川論集『病問錄』
藤岡作太郎『國文學全史』平安朝篇
露國と和す

十一月 逍遙『新曲赫哉姫』

明治三十九年

一月 『早稻田文學』再興
晶子歌集『舞姫』
櫻痴死す六十六歳

二月 文藝協會成る
藤村『破戒』

三月 獨歩短篇集『運命』
高濱虛子坂本四方太寫生文集『帆立貝』
雜誌『文章世界』發刊

五月 漱石短篇集『漾虛集』
泣菫詩集『白羊宮』

- 六月 落合『萩の家歌集』
晚翠詩集『東海遊子吟』
泡鳴論文『神秘的半獸主義』
雜誌『趣味』發刊
- 八月 碧梧桐編『續春夏秋冬』
漱石『草枕』『新小説』に
- 九月 山崎紫紅脚本集『七つ桔梗』
日本エスベラント協會成る
京都文科大學開講す
二葉亭『其の面影』『東京朝日』に
秋聲『己が縛』『萬朝報』に
- 十月 品子歌集『夢の華』
文藝協會演劇部第一回公試演
- 十一月 明治四十年
- 一月 『日本人』改題『日本及日本人』
漱石集『鶴籠』
藤村短篇集『綠葉集』
- 二月 正宗白鳥『塵埃』『趣味』に

- 四月 風葉『天才』『萬朝報』
佐野天聲脚本『意志』『早稻田文學』に
『思軒全集』第一
- 五月 獨歩短篇集『濤聲』
眞山青果『南小泉村』『新潮』に
天聲『大農』『都新聞』に
- 六月 漱石『虞美人草』『朝日新聞』に
花袋『蒲團』『新小説』に
雜誌『新思潮』發刊
梁川死す三十六歳
陸羯南死す五十一歳
- 九月 白鳥集『紅塵』
青果脚本『第一人者』『中央公論』に
秋聲『湖落』『讀賣』に
- 十月 風葉『戀ざめ』『日本』に
二葉亭『平凡』『朝日』に
- 十一月 青果『青果集』
- 十二月

明治文學史索引

(人名書名件名)

あ、い、ゐ

- 姉崎嘲風 四二九
- あひびき 二一八
- 鑿庭篁村 一五、一七、一九五
二九八、三〇六
- 石橋思案 二二、四二、二九七
三五七
- 石橋忍月 一三、一七〇、一八七
二九七
- 磯貝雲峰 一八五
- 泉鏡花 二八、五二、二九
三九、三九、四八八
- 伊藤左千夫 二四六、四三三
- 井上巽軒 八五、一〇〇、一八四
- 巖谷澹山人(小波) 三三
一三、二八、二九、三三
- 岩野泡鳴 三六、三九、四六
四三、四六、四七、四九、四九六
- イブセン作社會劇 三五六、四三二
- 色懺悔 三六、三七、三三
- う、え、ゑ
- 浮雲 一〇九、一一三、二八、三三
三三、四八八
- 内田不知庵(魯庵) 一三
- 一七、一八七、三九、三六、四二
- 上田柳村 三〇、四〇、四七

埋木

- 運命 四四六、四七〇
- 江見水蔭 三三、三四、三七
二七五、三三三、四〇九
- 小川未明 四八八
- 小栗風葉 三八、二六、三二
三六五、四〇五、四三、四七、四一
- 尾崎紅葉 一〇九、二〇、三六
三七、三九、四五、二五、四四
- 長田秋濤 三六〇、三六一
- 小山内薫 四八八

織田純一郎

- 落合直文 七四、七六、二九
一八四、三三四
- 大西操山 一八五
- 大町桂月 一八四、三三四
- 於母影 一八四
- か
- 概世士傳 五六、二二五
- 海潮音 四三二、四三七
- 幸田露伴 三三、四一、一五三
二八九、三三二、三九二、三九八、四〇一
- 幸堂得知 一三、三七六
- 高野聖 三七二、四〇一
- かげ草 一八五、三七八

索引

佳人の奇遇 六〇
雅俗折衷體 三三、二七、三三

假名垣魯文 二三、二七、四六、一九九

河井醉茗 三九、三九八

川上眉山 三三、四二、三七
一五一、二五八、三九九

河竹默阿彌
古河默阿彌を見よ 三〇〇、三四

河東碧梧桐 三〇〇、三四

我樂多文庫 三三、三六、四三

花柳春話 五五、九五、一二五
蒲原有明 三三八、三五五、四三
四三、四六、四八

殘菊 一四二、三三

三人妻 一三三、三六

該撒奇談 五七、九一

桐草紙 七、二六、一六〇、一九五
三四二、四三

繁野天來 二八四、三八

自然主義 三六四、四七、四九
四四四、四七〇、四七五、四九五

柴東海散士 五九
十三夜 二六八

十二文豪 一八一
鹽井雨江 三四
島崎藤村 一九〇、三九、三七
三六九、四〇五、四三三、四四四、四七八
四八一

き

歸省 一八六

北村透谷 一八八、四四、四八二

北田薄氷 二七四

木下尚江 四〇七

曉鐘 三三三

狂飈時代 四六、四七、四七六

伽羅枕 一三三、三四、一四七

清澤滿之 四一八

桐一葉 一九九
三四六、三五二、四一〇、四六二

陸羯南 六

草枕 四三、四七、四七〇

國木田獨步 三三八、四一九

島村抱月 二八四、四一八、四六二
四七六

象徴主義 三九七、四三二、四八九

寫生文 四五二、四八六

春鳥集 四三三

新浦島 二九二、四〇八

新曲浦島 三三三、四三三、四六二

新體詩 八五、九八、四九一

新體詩抄 二六六、八五、九四
九八、一〇〇、一八三

新體梅花詩集 一八六

新著百種 二七、二九、一四三

新俳句 二六、三六六

新派劇 三四四、四一〇、四六〇

末廣鐵腸 一三、五一、五九、四

暮の二十八日 四四六、四七六
三五九

黒岩涙香 一七、一七九、三七五
三八一

經國美談 六〇

視友社 一九九、二〇〇、二二三
二六五、二七九

言文一致 一五、一七、二二三
三三、三四、三六、三九、四〇、四一

小金井喜美子 一三三、一八四
三七八

國民の友 二六、三三、三五
三三、四三、一八五、三七

心の闇 一三三、一三六、四七

二

小杉天外 二六六、三六六、四〇六
四三九、四七〇

五重塔 一四三、一四五、一五一

胡蝶 二五、二八、一四三

後藤宙外 二八〇、三六、四七〇
四八八

金色夜叉 三〇三、三九九、四〇七

細君 一五五

西國立志編 一七、二六

齋藤綠雨 一五八、二八六

相馬御風 三六九、四九四

佐々木信綱 六、一八、四三
三三〇、三三六、四三三
四六二

佐野天聲 四六七

即興詩人 三六一

當世書生氣質 九四、一〇三
一〇六、一一〇、一一八、一三六

高崎正風 三三、三三六

高濱虛子 一三〇、三四、四五二
四八六

高安月郊 三六、三五、三五六
三九九、四〇八、四三二

高山樗牛 一八二、二〇六、二六〇
四一九、四三、四四九、四七六

瀧口入道 一八二、一八三

たけくらべ 二六七、二七二

武島羽衣 三三三、三九九

田澤稻舟 二七四

多情多恨 三〇〇、三〇七

類祭書屋俳話 一九六、三三

玉匣兩浦嶋 四〇八

田山花袋 一七、二七、三八

三九、四三、四七、四三、四七七

四八一

ち、つ

遅塚麗水 一六、一八、二八

三七五

女學雜誌 一八八、四四

塚原滋柿園(蓼州)

一八、三七五、四八八

土井晚翠 三三、三二、三九

三九八、四四

網島梁川 四九

坪内逍遙 五、五七、八八、四

一〇三、二五、二九、一五五、一七四

一九一、二〇〇、三四〇、三四六、三五六

四二、四四、四六、四六四

て、と

帝國文學 三三、三九、三三

四三二

條野探菊(有人) 三、三

四六、三、二九七

デカダン 四七、四八、四八四

四九〇

天地有情 三三

東洋學藝雜誌 九五、一八四

土居春曙 三五、四九、四六二

戸川鏡花 一八、一九〇、三二

戸川秋骨 三九、三〇

徳田秋聲 二九、三二、四〇五

四三、四七、四九

二六

四三

登張竹風 四五、四七、三三

外山、山 五八、八五、一〇〇

一九四、二〇六、三〇九

な

内藤鳴雪 二九、三六

永井荷風 四〇五、四七

中江兆民 五〇、九五、二七

長塚節 二四六

中西梅花 一八五

中村正直 一七、一九、二五

中村春雨(吉藏) 四〇四

夏木立 二三、三二

夏目漱石 三〇、三六、四〇五

四三、四八六

三三

成島柳北 三三、四、四五、五一

に、ね

新島襄 二七

に、りえ 二六七、二七二

日蓮聖人辻説法 四〇八

四二、四六二

日本(新聞) 七、六、三七

日本人(雑誌) 九、五

日本派 三六、三四、四四

二人女房 一三、二五

人形の家 三六

根岸派 二四六、三六

は

梅花詩集

新體梅花詩集を見よ

破戒 四四、四六、四七〇

白羊宮 四七

芭蕉雜談 三二

長谷川四迷 二葉亭を見よ

長谷川天溪 四七六

初姿 三六、四九

服部誠一(撫松) 三四、四五、五五

馬場孤蝶 三九、三八〇、四二

はやり唄 三六八

原抱一庵 一三、一七、一九七

三八二、四三〇

春 四八一、四八七

ひ、ふ、へ、ほ

樋口一葉 二六、二七、三九

廣津柳浪 二二、四一、二五六

二六二、三五四、三六三、四〇四

風流佛 一四三、一四五、一五一

福澤諭吉 一三、一九、四、二六

六四、九八、四〇〇

福地櫻痴 一七、二〇、三三、二八

三四、二九、一九五、一九八、三四一

三五四

二葉亭四迷 一〇九、二四

二八、一六七、三九、四二、四七〇

藤田鳴鶴 三、三五、五、五九

六四、一九四

蒲團 四七

古河黙阿彌 三〇、四一、三九

文學界(雑誌) 一八、三九

三六〇、四四、四三、四八二

文藝協會 四六、四七〇

平凡 四八一

幕笛集 三五、四三七

ほととぎす 二八、四六

四三、四五二

杏手鳥孤城落月 三四九、四二

三四九、四二

ま

牧の方 三五、四二

正岡子規 二九、三五、三九

三三、四三、三七、三七、四三二

四八六

正宗白鳥 四七〇、四八〇

松岡國男(柳田) 三八、三九

松居松葉(松翁) 一六七

二六八、三五四、三六六、四六二

松村春輔(操) 四

舞姫 一六〇

前田林外 三九、九五、四三

眞山青果 四六、四七九

み

三田派 六四、二八

みだれ髪 三六、四七

水谷不倒 一八三

南新二 一三、二六、三六

水沫集 一五、二〇

明星 二七、三六、三六、四三

索引

三宅雪嶺	四六	〇めぐりあひ	二八	〇山田美妙齋	二〇、二三	〇落梅集	三〇
三宅花圃(田邊)	一三三	〇森鷗外	一〇、一四、一七、一八、一九、二〇、二七、三三	〇闇の盃盤	四九〇	〇戀慕流	三五五
都の花	一〇九、二八、三五	〇森田思軒	二六、二五、二七	ゆ、よ		〇若菜葉	三三
宮崎湖處子	一八、一七	〇湯淺半月	一八、三八、三九	〇我輩は猫である	四五、四五	〇若松賤子	一三、二五、二八
宮崎三味	一三、一七、一九	〇與謝野鐵幹	一四〇、三六	〇若かれ道	二六八	〇わかれ道	二六八
〇む、め、も		〇與謝野晶子(鳳)	三六、三九	〇早稻田文學	二〇〇、二九	〇早稻田派	三八、四〇、四九
村井弦齋	一六、一八、二〇	〇矢野龍溪	一八、二七、二九、三八、三九	〇讀賣新聞	二二、二三、三三	〇早稲田派	二七九、二八五
村上浪六	一七、一五、一七	〇山崎紫紅	三九、四〇	ら、わ			
明六雜誌	一四、一七						

索引終

昭和二年十一月五日
昭和二年十二月十一日
昭和三年六月十日
再發行
發行



明治文學史
定價金參百五拾圓

著者 奈良市法蓮町一三一五 岩城準太郎
發行者 豐中市櫻塚本通三丁目二十四番地 鈴木政雄
印刷者 京都市下京區西洞院七條南 内外印刷株式會社
代表者 富森茂彭

發兌 豐中市櫻塚本通三丁目二十四番地 修文館書店

21/25
5.



910.26
I.93

終

